

金沢城研究 第21号

令和5年 3月

研究紀要 金沢城研究 第二十一号

〔論文〕

金沢城二ノ丸絵図の変遷とその背景 栃木 英道 1
—文化5年(1808)～明治3年(1870)— その1

〔研究ノート〕

近世前期加賀藩主前田家の疱瘡と藩士の動向 池田 仁子 22

〔史料紹介〕

「金谷御広式御鎖口勤方帳」について 袖吉 正樹 33
国祖遺言(下) 大西 泰正 85(一)

〔特集〕 金沢城シンポジウム「金沢城調査研究20年の歩みとこれから」

基調講演「金沢城調査研究の20年」 木越 隆三 39

講演1 「日本の近世城郭と金沢城」 千田 嘉博 45

講演2 「石垣から見た金沢城跡の魅力
—この20年とこれからの期待すること—」 北野 博司 51

パネルディスカッション 59

(パネリスト) 木越 隆三・千田 嘉博・北野 博司

(司 会) 秋本 和美

二〇二三年三月

石川県金沢城調査研究所

金沢城二ノ丸絵図の変遷とその背景

－文化5年(1808)～明治3年(1870)－ その1

栃木英道

目次

はじめに	§目的と目標 §対象 §方法と時期区分(案)	1
第1群(Ⅰ期)絵図	: 発災から復興; 文化5年(1808)～文化11年(1814) §Ⅰ-i 初動から応急 §Ⅰ-ii 応急から復旧 §Ⅰ-iii 復旧から復興	2
第2群(Ⅱ期)絵図	: Ⅱ-i～iii 斉広の改修; 文化11年(1814)～文政7年(1824)	5
第3群(Ⅱ期)絵図	: Ⅱ-iv 斉泰の改修; 文政7年(1824)～弘化4年(1847)	7
		註 7
附表 年表(抄) 1	: 文化5年～文政7年(1808～1824)	10
史料一覧	「金沢城二ノ丸御殿絵図集」No.18～77+101～103	11

(その2)

第4群(Ⅲ～Ⅴ期)絵図	: Ⅲ-i～Ⅴ-i 斉泰の幕末; 弘化4年(1847)～慶応2年(1866)
第5群(Ⅴ期)絵図	: Ⅴ-ii～Ⅴ 慶寧の幕末; 慶応2年(1866)～明治3年(1870)
附表 年表(抄) 2	: 文久元年～明治5年(1861～1872)

表・図目次

はじめに	第1表 金沢城後期二ノ丸絵図の変遷	12
	第1図 金沢城後期二ノ丸五時期区分	13
	第2図 金沢城後期二ノ丸裏口門南脇長屋階段配置(①～⑤類)	14
第1群	第3図 Ⅰ-i: 初動から応急1 (①: 21・22)	
	第4図 Ⅰ-i: 初動から応急2 (①: 35)	15
	第5図 Ⅰ-i～ii: 表向/松ノ間西熨斗立	
	第2表 金沢城後期二ノ丸裏口門南脇長屋の文字記載等	
	第6図 Ⅰ-ii: 応急から復旧 (②: 20・18・19・34・33・36)	16
	第7図 Ⅰ-i～iii: 広式御膳仕立所東側熨斗立	
	第8図 Ⅰ-iii: 復旧から復興1 (③: 23～29・31・32・38・43; 11)	17
	第9図 Ⅰ-iii: 復旧から復興2 ((②): 30・37)	18
第2群	第10図 Ⅱ-i～iii: 表向/松ノ間西熨斗立	
	第11図 Ⅱ-i～iii: 居間東北端/(南から)御膳奉行溜～坊主溜～廊下の東	19
	第12図 居間東北端「二階上り口」坊主溜4・廊下8	
	第13図 Ⅱ-i～iii: 表向/蔦之間～(檜垣之間南の)御使番・新番頭溜の南の空地	
	第14図 Ⅰ-iii c (43)→Ⅱ-i (50)→Ⅱ-i-ii (52): 奥向/広式対面所南側周辺	20
	第15図 Ⅰ-iii b (23)→Ⅱ-i (50)→Ⅱ-iii (48) iv: 居間廻り(部分)	
第3群	第16図 第3群絵図(Ⅱ-iv期)の変遷	21

はじめに

目的と目標

本稿では、江戸時代後期(具体的には、文化5年(1808)正月の二ノ丸火災⁽¹⁾以降)の金沢城二ノ丸の景観を描く絵図について、その(景観の)変遷とそれら(変遷)の背景を探る。

当該作業は、文字記載にも依拠するが、まずは絵図に描かれた景観そのものの異同を比較検討し、新古・併行等相互関係を時系列化し、諸々解釈の余地等によっても解消不可能な矛盾等がなければ、景観変遷に係る時期区分細分の可能性を示すものとして仮説を得、それを検証する方法を採った。

結果、第3～4類絵図群(以下、3～4群(絵図)などと表記)のように、現状、文字史料による援用等が十分でないことなどから、変遷がただ絵図の裡に留まり、事跡との対照を介してその背景にまで届いていない箇所も多いが、一方、第1・2・5群絵図の少なくとも一部では、絵図それ自体から読み取れる変遷が文字史料の掘り起こしに繋がり、その背景にまで辿り着けたように見える箇所もある。

単純誤記載はもとより、表現上の一定の幅の中での揺れなどまでが間々あつたりするため、従来、当該分野において積極的に採用されてきた方法ではないかもしれないが、絵図そのものから明確に読み取れる情報があればこそ、にも拘わらず、モノの同定や相対年代化等を作業一般とするフィールドで暮らしてきた側からの分野を超えたチャレンジといった体である。

対象：史料点数(55)と景観点数(51)／附表 史料一覧

『金沢城史料叢書29「金沢城二ノ丸御殿絵図集」絵図にみる金沢城二ノ丸御殿』石川県金沢城調査研究所 2017(以下『絵図集』と表記)pp.88-89「金沢城二ノ丸御殿絵図リスト」No.18~77(60点)のうち、8点(39~42・44~47)を部分図であることなどから保留・割愛し、別途、石川県立図書館蔵1点(101)及び金沢市立玉川図書館蔵2点(102・103)を加えた計55点を対象とする。

本稿では加えて、上記通有(?)の史料点数とは別に、絵図に描かれた景観の数に着目した。即ち、組図等(49~51(3)、56~59(4)、60~62(3)、76・77(2))をそれぞれ1景観とする(55-(12-4)=47)一方、貼掛等によって、それぞれ時期の異なる(可能性のあるものを含む)3景観が描かれる史料2点-73(上・中)・下)及び103(上・中・下)-を6景観とすることにより、対象を計51景観と整理(47+(2+2)=51)し検討した(以上、附表 史料一覧「金沢城二ノ丸御殿絵図集」No.18~77+101~103)参照)。

方法と時期区分(案)／第1表、第1・2図

『絵図集』pp.70-72他で示された五時期区分⁽²⁾(『絵図集』ではアラビア数字表記であるが、小文字による細別表現が可能であることから、本稿ではローマ数字で表記する⁽³⁾)を主軸に、それとは一応独立し、互いに素とでもいふべき裏口門南脇長屋の階段配置①~⑤(類)を補助軸として組み合わせ、

- ・ **I期**と組み合わせ①~③をI-i・I-ii・I-iiiの3期。別途、数寄屋屋敷の井戸配置(I-ii a・b)、同部屋方の二階化の進捗等(I-iii a-c)、さらにI-iii a-cのa・cにそれぞれ新・古を認め計**8期**
- ・ **II期**と組み合わせ③・④をII-i~iii・II-ivの新・古。前者i~iiiは、別途、隣接絵図間の個別記載の比較検討等により細別し計**4期**
- ・ **III~V期**(はおそらく、III期に④、IV・V期に⑤が組み合わせ)も、同様に隣接絵図間の個別記載の比較検討等により、それぞれIII-i~iii・IV-i~iii、V-i~vに細別し計**11期**

全体として、以下**合計23期**に及ぶ時期区分細分案を提示する。

第1群 (I期) 絵図：発災から復興；文化5年(1808)~文化11年(1814)／附表 年表(抄) 1

I-i 初動から応急 (①：21・22・35；3点)／第3~5図

裏口門南脇長屋の階段配置(以下「階段配置」)①類は、概ね江戸時代中期(宝暦の大火⁽⁴⁾後~文化の火災前)形とみられ、裏口門自体、中期形仮門様の様に描かれる(21)か、あるいは描かれない(22・35)。数寄屋屋敷(部屋方)に井戸が1基描かれるもの(21・22：中期形踏襲か)と、(井戸は描かれずに)部屋方の建物軸と並行する番所が描かれるもの(35)がある。

宝暦の大火(宝暦9年(1759)4月)以降、仮門様のまま半世紀を経て再び火災に遭遇した裏口門の再建着手は文化6年(1809)3月、翌4月に「二階上り口付方」が(仮門様になって久しく判然としないためか、橋爪門に倣うことでよいか伺いをたて、その旨)裁可されている⁽⁵⁾ことから、本類①は、文化5年から同6年初めにかけて取り沙汰された発災直後の最初期⁽⁶⁾図とみられる。

即ち、再建仕様の絵柄を火災後直ちには描くことができず、直前の絵柄で代用した時期や取り敢えず

描かず留保した時期があったのか、とはいえ、上記伺い直前まで仕様が定まらずにいたとは、上棟式(2月24日)も既に終えており考えにくく、文化6年(1809)3月は、当該景観の最大下った下限であって、実際のそれは(確証はないが)前年(文化5年)の内といったところであろうか。

かかる裏口門の描かれ方にもみられるように、本類景観がどの程度まで実現に至ったものかは慎重にならざるを得ず、構想上のそれを含めた3景観の関係についても、もとより短期間であって実在性の証明も容易ではないことから、相互の関係を時間軸の観点から整理するのは適切ではないだろう。

因みに、数寄屋屋敷(部屋方)において、井戸を描かず部屋方建物軸に並行する番所を描く35は、同系統・同景観の30・37(階段配置②類、第9図参照、後述)ともども、1群(I期)にあって、他は総て井戸を描き(15点)、番所も描かれない(5点)か建物軸に斜向するものが描かれる(9点)なか、孤立した史料群となっている。加えて35の表向/松ノ間西の熨斗立(鍵形+直線)は、21・22(二重直線)とも後出する33他15点(二重鍵形)とも異なっており、その実在性を考定しようにも、30・37までが二重鍵形となっており、唯一の孤立史料として無下に非実在ともできず正に「留保」となっている。

I-ii 応急から復旧(②:18~20・30・33・34・36・37:8点) / 第2表、第6・7図

本類②の階段配置が窺えるものは33・36の2点(同じく②類ではあるが、あり方がやや異例の30・37については、次節末・第9図参照)で、ともに裏口門が再建仕様で描かれ、うち33には長屋東端に「慧照院部屋」の記載がある。同様の記載のある4点18・19・20・34も、階段配置が表現されておらず裏口門も範囲外ではあるが、本類に含まれるものと考えた⁽⁷⁾。このうち19・20には「文化六己巳御造宮之御殿図」・「己巳十一月写之御作事奉行小堀左門より」他がそれぞれ記される。

重教の側室 慧照院は、文化の火災後二ノ丸裏口門脇に居住⁽⁸⁾し、文化14年3月79歳で歿する⁽⁹⁾が、その地は金谷出丸であって、実際、文化7年(1810)治脩歿(正月)後の5月、金谷に移るべき旨命じられている⁽¹⁰⁾ことから、本類②は、復旧初期~中期段階の景観、即ち裏口門「二階上り口付方」が裁可された文化6年(1809)4月から年明け早々へ(?)遡った頃から、文化7年(1810)治脩歿(正月)⁽¹¹⁾後の同年5月より(退去後高部屋へ改修され③類となった蓋然性を高くみて)暫くの間までのものとみられる。

数寄屋屋敷に井戸を1基描くもの20と2基描くもの33・36があり(いずれも番所は描かれない)、前者(井戸1)は①21・22からの、後者(井戸2)は③23~29・31・32への系統を有しており、前a(20)→後b(33・36)に細(々)分可能と考える。後者(これらのみ「居間先土蔵」が一見すると南北に長軸をもつ長方形建物のように描かれる)のうち、「慧照院部屋」の記載のない36は、あるいは慧照院が金谷へ退去した後(で、かつ階段等改修前(か、はたまた単なる書漏らし)の可能性もある)か。

翻って、数寄屋屋敷が表現範囲外となって彼の地の井戸のあり方が不明な18・19・34は、その点では33(・36)に先行するものかどうか不明であるが、次節でもふれる広式御膳仕立所東の熨斗立のあり方は、20(:先行する21・22と同じ「直線」類)とほぼ同じであって、件の33・36(:両者は類似し、後出する24・31と同じ「鍵形」類)とは異なっていることから、(20=)I-ii aとみて大過ない。

もとよりこれら(20・18・19・34)は、I期①~③類の他の絵図が(有無が判断できるものは)総て広式に御囲(茶室)を描くのに対して、それを描かないなど、性格等に類縁性が高い(非作事系(?)の)一群とみられるが、復旧初期の図にあって、現下、それらのみが知られていることとなり、外向きの儀礼先行の(実態は諸事進行中のさてもありがたい)仮復旧的な状況を窺わせているようにみえなくもない。

そうして、かの「二之御丸御殿御造宮内装等覚及び見本・絵形」(文化8年(1811)正月)には、本類②(慧照院部屋仕様)が親和的といえる。その実態は、当初発注という意味において狭義にはI-ii a(20他)が照応するとみられるが、広義には直続するI-ii b(33他)も、追加や変更がどの程度生じそれがどの程度反映されているか等にもよるが、もしかしたら大部分大過なく照応するのかもしれない。

I-iii 復旧から復興 (③: 23~29・31・32・38・43; 11点) / 第8(・9)図

③類はI期とII期に跨り、点数も比較的多く論点也多岐にわたることから、以下、I期11点とII期3点に分けて記述する。I期のうち、階段配置が窺えるものは23~29・31・32・43の10点、それらを数寄屋屋敷(部屋方)の二階化という観点から整理すると、

a 平屋 : 24・31→25~29・32・38; 文化7年5月?~文化8年6月? / 井戸の東の景観が、②33・36と共通する24・31→I期③b23と共通する25~29・32の新・古がみてとれる。

古相(24・31)の最上限が文化7年(1810)5月だとして、新相(25~29・32)には「文化八年以降ノモノ」記載の25が含まれることから、階段配置が明らかではなく、数寄屋屋敷も表現範囲外ではあるが、文化8年2月の規式能関係の図とみられる38も、実際、広式御膳仕立所東の熨斗立●のあり方も、25~29・32と同じ「直線」類となっており、ここ(a新相)に含まれるものとみられる。

b 一部二階: 23; 文化8年6月?~文化9年正月以前 / 「文化九年申正月夜中於私宅拵直之 山本庄助」の記載(:文化9年正月以前の景観)から、文化8年6月御大工篠田弥三兵衛「二御丸広式・部屋方二階建揚等補理主附」に照応するものか。

c (古)総二階: +; 文化9年頃か / b23(文化8年6月?~文化9年正月以前)とc(新)43(文化10年(以前))の間。該当史料は未だ明らかではない。

c (新)既二階: 43; 文化10年(以前)か / 「御広式之分、□(文)化十酉年出来被仰付 大脇六郎左衛門ヨリ図り出ス 同十一戌孟夏十二日写之」の記載(:文化11年(1814)4月以前の景観)

となり、この間、数寄屋屋敷の井戸は、2基(②33・36→) [a24・31→25~29・32→b23] から1基 [d43] (→II③)となる。その変化は、確証はないものの、総二階化c(古)を契機としている蓋然性を高くみたい。一方で、a・b段階で(漸く?)建物(=部屋方)軸に斜向する番所が置かれる。c(新)43での番所の存否は(絵図の表現範囲外となって?)判然としないが、そもそもそこは、II期になって風呂屋が降りて来る(以降、番所はみられない)ところで、43の段階にはその最後の姿があったとみるのが、これまた自然のように見える。

そうして、同じくI期③類の「二之御丸御殿建物指図」(地指図・七枚組)は、例えば、広式御膳仕立所東の熨斗立●が直線的で、同御仏間の東縁◎が建継(増築)される前であることから、I-iii a新のグループ(25~29・32(・38))に照応する。因みに、裏口門南脇長屋の文字記載等(第2表)も、25~29(東3部屋目に「高部屋」と合致している。

いずれにしても、当期はその初期段階(a・b)で一応の復旧と遂げ、さらに復興へと向かいそれを成し遂げる(最大広義の復興終期)までの間ということができる。

ところで、前節冒頭でふれた、数寄屋屋敷(部屋方)において、井戸等を描かず部屋方建物軸に並行する番所を描く①35(第4・5図)の系譜下にある②30・37(第9図)は、数寄屋屋敷南を囲郭する熨斗立(35では描かれていない)が数寄屋唐門へ至るルートを遮断するがごとく描かれ特異であり、また、広式御膳仕立所東の熨斗立もI-iii a古③類24・31と同じとこれもまた異例で、②類末期に当該熨斗立が出現するとみるのか、そもそも②類表現が(II-iv54の①類のように)時点修正漏れ等で、実際は③類段階とみるのか…確証はないが、他にも諸々納まらない箇所もあることから、後者の可能性が高そうだ⁽¹²⁾。

第2群(Ⅱ期) 絵図：Ⅱ-i～iii 齊広の改修；文化11年(1814)～文政7年(1824)／附表 年表(抄) 1

Ⅱ期㊦類(と考える)：48・50・52(；第10～15図) 3点のうち、階段配置が窺えるものは48・50の2点、表向/松ノ間西の熨斗立の形状の変化(第10図)によって新・古(50→48)がみてとれる。

別途52は、文政3年(1820)6月、勝千代(齊泰)が二ノ丸に移る際の改修工事(計画?)図「文政三年辰六月勝千代様就相殿、朱引之所御補裡御箇所」で、「階段配置」はもとより風呂屋の位置(故にⅠ期かⅡ期か)も不明であるが、「熨斗立」の位置は50と同じで、50・52と(既に熨斗立形状が変化している)48との間に別の改修が介在していることを踏まえつつ、両者の前後関係が各種考量の端緒となる⁽¹³⁾。

即ち、52が文政3年(1820)6月当時の①現況(基本、墨表現)を、㊦改修(同前、朱表現。便宜上、仮設工事的なものを除く)する計画図とすると、50は①または㊦に該当し、前者においては㊦23→+→43→50→52→+→48、後者においては㊦23→+→43→52→50→+→㊦48となることを念頭に、3点を詳細に観察し巡り…巡ると、52に上述の基本表現の他に、異なる表現がなされている(やや複雑な改修であったため、そのようになったものとみられる)箇所があることに気づく。

まず、「居間東北端/(南から)御膳奉行溜～坊主溜～廊下の東」(第11図)では、

- ・ ①現況で残すものと㊦新たに設えるものを「墨」で、㊦現況で撤去するものを「朱(文字を含む)」で表現(一部に不具合があるが)したとみられ、
- ・ 北から㊦「ナカシ」「畳敷入」「二階上り口板張」「畳四畳敷入(註 実際は三畳半のようだが、畳四枚という意味では不足はない)」の朱文字は、そのまま50の当該箇所を解説して余りあり、
- ・ 更に48の当該箇所も、驚くほどそのまま52①㊦で構成されており、52を挟んで50→52(→+)→48の先後関係を確かなものとしている。

因みに、当該改修で撤去(・移設)された(こととなる)「二階(御能方物置)への上り口」(第12図)が確認できるものは、50・52を含め12点を数えるが、先行2点(21・22)は同じ坊主溜から、後出8点(57・62・101・66・67・69・68・102)は北隣の廊下からとなっており、時空の平仄を合わせている。

次いで、52の「表向/蔦之間～(檜垣之間南の)御使番・新番頭溜の南の空地」(第13図)では、

- ・ ①現況「墨」の上に紙を貼り、①残すものを「墨」、㊦撤去するものを「(空)白(貼紙下)」：①①㊦は50と同一視される、㊦新たに設えるものを「朱」で(一部に不整合があるが)表現したとみられ、
- ・ その50①①㊦を、①㊦㊦に改修しようとしたとみるのが可能(50→52必要条件)である一方、
- ・ 48では㊦の一部しか確認できず、①㊦も(その後の改修により?)確認できず、更には㊦の一部が復旧されているようにもみえ、結果、㊦の一部及び㊦の施工が確認できず十分条件を欠くが、仮にこれが逆(52→50)であるとするなら、先行する23には①㊦の片鱗がみられないことから、十分条件だけでなく必要条件をも失うことになるため、その意味では十分傍証となるだろう。

52の上記表現の理解をとおして、従来、不分明とされてきた実際の改修内容が、一部とはいえ判明したことの意義は小さくなく⁽¹⁴⁾、加えて漸く、これらに描かれた景観等について具体的な検討を進める前提が整った。まずは43(文化10年(1813)頃)と52(文政3年(1820)6月)の間となる50は、

- ・ 現状ではⅡ期最古の図となるが、既に居間風呂屋が数寄屋屋敷に降りており(組図51の関連の「時点修正」については註(13)参照)、その最初期の景観ではなく、
- ・ 藩の御大工清水家に伝来したもので、焦点が当たっている箇所は明らかに、52において「寛姫様御居間」とされている奥向/広式対面所の南側周辺(第14図)とみられる。
- ・ 寛姫は齊泰同母の妹で、文化12年(1815)6月生まれ。同年4月、当該居間増築工事を清水家が担当

した『御大工清水又十郎「二 御丸御広式御対面所御建継被仰付」』。

以上のことから、50は「文化12年4月拜命の寛姫居間増築工事関係図」と考えるのが自然といえ、結果Ⅰ期-Ⅱ期の界線も、文化10年(1813)頃以降-文化12年(1815)4月以前に措かれることとなる⁽¹⁵⁾が、当該界線に対照可能な事跡を探索する前に、比較検討が可能な23→50→48において、居間廻りの変遷の単に風呂屋の移動といった単一かつ即物的な(?)事象に留まらない姿(第15図)をみておこう。

Ⅰ期23(→43)の居間廻り景観とⅡ期50のそれとを比較すると、その主な相違(変化)は、

- (23)の風呂家を数寄屋屋敷に降ろし、従前その北側に所在した湯殿・揚場(あがりば)・押入を南へ4.5間移動させ、寝所前の空地(庭)を南へ概ね2倍に拡張
- 拡張空地南東隅に従前空地北東隅所在の厠を移し(別途クツヌキ等も置かれる)、当該北東隅床下を活用可能としつつ、その前に斜めに橋掛(西詰は壁∴通抜不可、同橋は現状50・48のみでみられる)
- 拡張空地南東隅「湯殿～沓脱(クツヌキ)～厠」背面(?)及び(主として)拡張空地西縁の石垣上に庭籠(前者は内外(?)「アミト」、後者は六囲)を設置
- 居間北(柵①)・床が1間分南へ移動、居間3×6=18畳→3×4=12畳・菊ノ間東側の縮小等→「浮(?)仙ノ間」(寝所御次南)・「新御用(?)ノ間」(菊ノ間南)設え
- 寝所床(南辺西→北辺西)・付書院⑨(西辺南→同辺北)の位置変更〔後者⑨から「二ノ丸御殿関連史料(御居間書院・奥書院等図巻)」が(地袋が右側だけの設えの)Ⅰ期(特有)史料であることが判明〕

となる。

以上、この間の変遷は、風呂屋の数寄屋屋敷への下降をあくまで手段とし、①寝所前空地(庭)の拡張、②奥向/広式対面所空地(庭)への(おそらくは火災後最初期の(?))導水(第14図右参照)並びに③寝所前空地隅及び縁への庭籠設置にこそ主眼があり、それ(より限定すればおそらくは庭籠設置)に伴い新御用(?)ノ間等が設けられたとすることが可能ではないか。いずれにしても、もはや復興の範疇には納まらない「平時の改修」として大過ないようにみえ、Ⅰ期末を「最大広義の復興終期」とした所以でもある。

蓋し、当該改修に照応する事跡は、文化11年(1814)12.23〔「二之御丸御居間先御亭鳥籠等御普請御用相勤候二付 文化十一年戌十二月廿三日 於御次拝領被仰付 御作事奉行中引請御用番小堀牛右衛門殿 被相渡候 御目録」『清水又十郎相統以来二ノ丸造営其他主付御用の時拝領目録』金沢市立玉川図書館清水文庫〕よってⅠ期-Ⅱ期の界線は文化11年(1814)頃⁽¹⁶⁾として同じく大過ないだろう。

次いで48は、仮設物の設置や特定範囲に集中する着色など、(50・)52がそうであるように何らか改修(計画)図とみるのが自然といえる。そこでは、改修前の現況と改修計画などを窺うことができ、史料自体、前後する時期の情報が重複しその境界に位置付けることができる。以下、48の現況とその後に分けて(もとより完全には分離できないが、後者は次群で)みていく。

50(文化12年(1815)4月)→52(文政3年(1820)6月)に後出する48は、

- ・ 52との比較では、48は奥向/広式対面所辺りと表向/松ノ間辺りの間の熨斗立の位置が既に東方へ寄っているなど、この間何らかの規模の改修が行われている。
- ・ 50との比較では、50の「庭籠」は48では既に撤去されていてなく、「新御用(?)ノ間」は「御物置」に、「浮(?)仙ノ間」は仙ノ間が消されて「浮(?)」のみとなっている⁽¹⁷⁾。
- ・ 48自体では、(おそらくは)改修(対象)箇所を示唆するとみられる黄色塗範囲が、奥向/広式の広域に亘っており、それは居間廻りと奥向/部屋方の一部にも及んでいる。

たいして、文政3年(1820)6月(52)以降の事跡には以下が知られる。

- ・ 文政5年(1822)齊広隠居・齊泰家督相続許可(11/21)及び齊広竹沢御殿転居(12/16)
- ・ 文政7年(1824)齊広死歿(7/12)及び榮操院(齊広側室・齊泰生母)二ノ丸広式転居(8/19)

両者の間を行きつ戻りつ考量すると、まず、52の後(=48の前の「熨斗立の移動」等)の改修は、庭籠の撤去などが伴われて然るべきとみられる「斉広隠居・斉泰家督相続」(文政5年の代替わり→斉広の竹沢御殿移住)が当てられるだろう。続く文政7年の斉広死歿→栄操院二ノ丸広式転居には、本稿では48が照応するとみた。それは、一般的には上限とするのが穏当なところなのだろうが、48の広域に亘る奥向/広式の黄色塗範囲(居間廻り等については、現状、定見を持ち合わせてはいない)が、斉広の死歿を受けた栄操院の竹沢御殿からの転居に伴うものとみるのが頗る蓋然的とするもので、階段配置もこの時、時宜を得て③から④へ変化したものとみておきたい。

以上、文化11年(1814)頃～文政7年(1824)7月の間を、II-i 50(・52)：～文政3年(1820)6月、II-ii (52)：～文政5年(1822)12月、II-iii (48)：～文政7年(1824)7月と措いておきたい。

第3群(Ⅱ期) 絵図：II-iv 斉泰の改修；文政7年(1824)～弘化4年(1847)／第16図

Ⅱ期④類(と考える)：53～63(48に後出するII-iv図)11点のうち、56～59・60～62は組図で景観点数では6、なかでは、48に後出する形状の馬場が(範囲外の63を除く)5景観、48の現状③に後出する階段配置④が55・58・63(53・60～62は範囲外)の3景観⁽¹⁸⁾で確認される一方、文政13年(1830)10月指出の図に、天保3年(1832)8月、水樋筋及び万年樋筋が追記され再度指し出された55より以前(53・54)と、天保4年(1833)～同9年(1838)の景観とされる56(～59)以降(60(～62)・63)に二分される。

まず、48から55までは、①馬場が改修され、西接②納戸土蔵が改修もしくは改築され、その西に③庭籠Sが造られ、その西の④「新五郎塚」が大(多角)形化するとともに、③の池を介した対面(?)に⑤庭籠Nが造られる。それらは、①・②が54・53・55、③が53・55、④・⑤が55でそれぞれ確認されることから、48→54→53→55と変遷するとみられるが、これまでに①～⑤に直接関わるとみられる事跡は確認されていない。おそらくは6年に満たない間の三次以上に亘るイベントとなるが、それは48を上限の文政7年7月の景観とみた場合であって、下げればさらに近接した展開となるだけでなく48自体が事跡を失い漂流する。いずれにしても、①～⑤に照応する事跡の探索が課題といえる。

次いで、56(～59)、60(～62)及び63の3景観については、62では57にたいして、③・⑤の庭籠が既に撤去(?)され、63では58にたいして、⑥奥向/広式の化粧之間の西端が半間縮小され、2間×2間から2間×1.5間となっており(伴：同間西の空地の拡張等)、結果、56(～59)→60(～62)・63となるが、後者2景観の(先後等)関係については、現時点では明らかではない⁽¹⁹⁾。(続)

【註】

- (1) 『金沢城史料叢書41 金沢城総合年表 後編』 石川県金沢城調査研究所 2022(以下『年表 後編』と表記) p.47
- (2) 五時期区分そのものについては『絵図集』を参照いただくとして、各期間の4境界(下記①～④)をめぐる本稿での整理は、②・④については基本踏襲、①・③については、別途、以下のとおりとなっている。

- ① I期からⅡ期：居間西端の風呂場が数寄屋屋敷(部屋方)へ移設される；従来、文化末(15年が文政元)年頃が目安とされてきたが、本稿では文化11年(1814)頃と整理。
- ② Ⅱ期からⅢ期：広式－松ノ間間の土蔵を廃し同間が直線廊下で結ばれる；弘化4年(1847)、13代斉泰の子基五郎・豊(みつ)之丞の二ノ丸松ノ間移住を反映したものとされる。
- ③ Ⅲ期からⅣ期：居間南縁の廊下が(北から南へ凸字形から)直線になる；従来、嘉永6年(1853)の二ノ丸広式奥御居間～部屋方の普請に連動したものとされてきたが、新史料の記述から本稿では安政5年(1858)。併せて同期の可能性が指摘されてきた、広式－松ノ間間の直線廊下(Ⅲ期の指標)を廃した(広式に接続する)土蔵の再設置も、後出絵図(102)貼付の付箋「此御土蔵安政二年四月出来」から、本稿では安政2年(1855)とした。

なお、広式奥御居間～部屋方普請に照応するⅢ期からⅣ期の境界そのものについての変更はない。

- ④ IV期からV期：十三代藩主齊泰正室溶姫の二ノ丸移住に伴う御守殿建造；文久3年(1863)4月25日の溶姫金沢着に先立つ竣工(23日)。
- (3) 結果として、庄田 孝輔「金沢城建物配置図の記載情報について(2)」『研究紀要 金沢城研究』 第14号 石川県金沢城調査研究所 2016 における後期I～IV期表記と紛うこととなったが、ただ五時期の細分を目途としたのみ他意はなく、その旨御寛恕の程。
- (4) 『年表 後編』 p.4
- (5) 『金沢城史料叢書1 御造営方日並記 上巻』 石川県教育委員会文化財課金沢城研究調査室 2004(以下『日並記 上巻』と表記)p.197
- (6) 「石川県災害時受援計画」(2019.5)が援用するところの「地方公共団体のための災害時受援体制に関するガイドライン」内閣府(防災担当)(2017.3)等にみられる一災害時の各局面(フェーズ)：初動～応急～復旧～復興—に従えば、発災直後の初動～応急期に相当するものといえるが、それに留まらず、既に「復旧」を越えて、表向において宝暦の大火以前の姿が描かれる一方、豈図らんや、居間廻りの(居間先)土蔵が後期オリジナルとなっているとは。
- (7) 18・19・20・34の4点が②類(相当)であるとの断定はできないが、その場合でも(即ちそうでなくとも)、少なくとも裏口門が再建仕様で描かれている段階であろうことに疑いはない。
- (8) 「第十一編 文化七年」『加賀藩史料』 p.918
- (9) 「第十二編 文化十四年」『加賀藩史料』 p.555
- (10) 「第十一編 文化七年」『加賀藩史料』 p.918
- (11) 『年表 後編』 p.56
- (12) 第9図1～3(第4図1～3の説明参照)が孤立史料群〔①35、②37・30〕の属性だとして、②類30・37では、5にはI-ii a(②20)以降、4にはI-ii b(②33・36)以降それぞれ描かれる階段が描かれぬ一方、6(広式御膳仕立所の東)にのみI-iii a古③24(及び③31)と同じ形状の鬘斗立が描かれる、となると、30・37の②類階段配置が確と時点修正されたものとみるより、未だ③類に更新されていない可能性の方を高くみることになるだろう。
- ところで、1「段橋無し」が〔35、37・30〕との、7「動線遮断鬘斗立」が〔37・30〕との共通属性となっている本稿では割愛した史料44「二の丸部屋間取図」について：2「井戸」・3「番所無し」= I-ii a(20)景観の元図に、8「井戸」= I-ii b(33・36)景観が(とはいえ4・5「階段」が、他は総て南からで竣工しているのにたいして、ともに北から上がるよう提案されたまま書き足され、その上にそれが北西(左下)に移動する(I-iii a・b(24～29・31・32)の位置に近い)形の貼掛け(提案)がなされている(3「番所」が貼り込まれていないのは、それが8「井戸」の移動に僅かに後出するためか)ともみられるもので、諸々孤立属性を有するため慎重な取扱いを要するが、現状、8「井戸」のかかる位置ずれが造替えの結果であることを直接窺わせる唯一貴重な史料となっている。

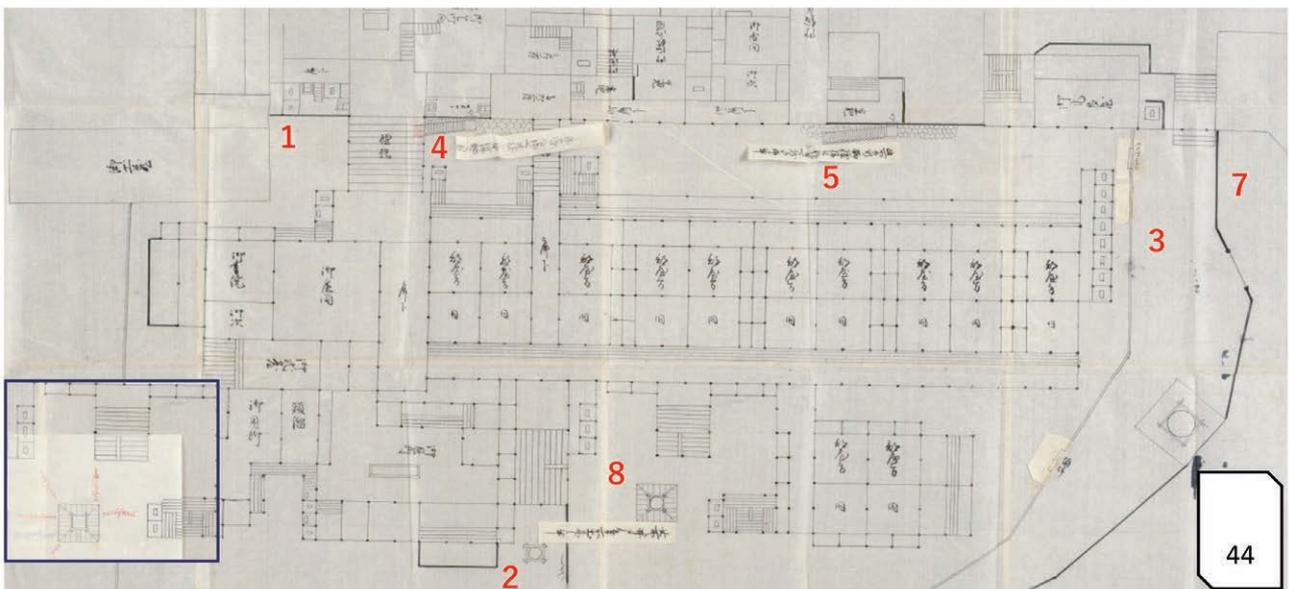


図1 復旧から復興3(44)

- (13) が、当該作業の前提として、50が(一部不具合が認められるとしても、原則)43に後出するII期景観図であることが、仮説としてであれ、以下のごとく措定されていなければならない。というのも、49・51・他との4枚組図であ

る50は、確かに風呂屋が(二ノ丸居間廻りには)ないⅡ期図ではあるが、風呂屋が降りた先の数寄屋屋敷の図51(確かに風呂屋が描かれている)の部屋方が、Ⅰ期(現状では最新の)43で既に総二階となっているにもかかわらず、それよりも複数段階古い総平屋であることが、従来その評価を難しいものにしてきたからである。

さても当該平屋景観は、今日的に(本稿では)、数寄屋屋敷(51)だけでなく、(二ノ丸)広式御膳仕立所東の熨斗立●(直線)や同御仏間の東縁◎(建継前)を含め、Ⅰ-iii a 新(文化7~8年(1810-11))のそれであり、それらは奥向(51+50)全体に及んでいる可能性があるが、一方では、風呂屋が降りた後の(二ノ丸)居間廻り(50)、降りた先の数寄屋屋敷南側(51風呂屋周辺)や奥向/広式対面所南側周辺(50)は、(Ⅰ期最新の)43に後出するⅡ期景観となっている(本文にて後詳述。因みに、いずれにしても本稿では表向の検討は行えていない旨、御了承の程)。

これらは、時期の異なる複数景観のハイブリット図という(甚だ宜しくないものであるが、これまでに例がないわけではなく^(註)ここで具体的な内容にふれることはできないが、「好例」として『金沢城内絵図』が挙げられる、総じて扱いに能々窮することがあるという)ものではなく、(50はただ)入手済の過去のある時期の景観図を、その都度都度、所要等箇所を更新(時点修正)してきた結果、一部(というには相当程度に広範囲に亘る可能性がある)が古い景観のママになっている図という類の(現代でも間々見かける)ものではなからうか。

かかる図が作成された経緯等については、別途、様々に詳しく検討されるべきものと考えているが、本稿では、当該組図が藩の御大工であった清水家に伝来したものであることが大きいとみている。(一般的にみて)藩全体で共有している情報(景観)も当然あるのだろうが、即ちこのように更新される情報(だったとしてそれは)、同家が過去に(作事を担当するなどして)取得したものや、その時々(同前)必要となったものであったりしたのではなからうか。本稿では、こうした見方(仮説)の蓋然性をより一層高めるものとなることを期して、鋭意、検討を進めた。

(14) 加えて、52の現況と能く照応する50の当該居間廻り景観は、奥向のそれ(註(13)参照)とは異なり、それこそ能く時点修正が行き届いている(実際、50は、52から窺えるもの以外、48より以前として比較対照が可能な、現状20景観(Ⅰ-i 21~Ⅰ-iii b 23)のどれとも異なっている)ものとみられ、結果、現状Ⅱ期最古の居間廻り景観をも具に浮かび上がらせることとなったそのことの意義は更に大きなものがある。

(15) これまで、Ⅰ期-Ⅱ期の界線は文化末年頃かとされ、文政元年(=文化15年(1818))12月25日の御居間寝所舗理居間住居替「御寝所御舗理御居間御住居替御用主付相勤候二付~」『清水又十郎相統以来二ノ丸造営其他主付御用之時拝領目録』金沢市立玉川図書館清水文庫と連動した可能性も示されてきたが、文化の火災後、二ノ丸裏口門脇に居住した重教の側室慧照院の死没(文化14年(1817)3月)等を念頭に、いわば下限が示されていたのであって、前述したように、慧照院の二ノ丸退去は文化7年(1810)5月(以降)であり両者の間に直接の関連はない。

因みに、寛姫は文政10年(1827)、小倉藩主小笠原忠徴に嫁すため真龍院(齊広正室)の養女となり、同12年(1829)金沢を発興しているが、どこからかは定かではない。50・52と48とでは、前者の寛姫居間の床が後者では(部屋に寛姫の記載もなく)押入となっており、いずれにしても、この間に他所へ移ったということなのだろう。

(16) こうして、註(15)「御寝所御舗理御居間御住居替御用主付相勤候二付~」は、50と48の間となるが、寝所・居間のどこがどう変わったのか、この間に別の改修が介在するからなのか判然としない。

(17) 加えて、奥向/広式の御囲(茶室)も、48では消されて「無い」ことから、この間に移設等されたとみられるが、註(13)で縷々述べたとおり、50の奥向(に依然御囲(茶室)が描かれてはいるが)の景観年代に課題があり、結果、現状では、御囲(茶室)の存在は43(Ⅰ-iii c:文化10年(1813)頃)までしか追えず、確証を得るに至っていない。

(18) 本来、54「二ノ丸万年樋絵図」において③か④が確認されるところ、その階段配置は何と①(のまま)で、主に地面より下を扱う設備系絵図(?)としては宜なるかなであるが、そのため、③→④が①・②、③、④・⑤のどの段階に当たるのか(現状、史料的には④・⑤出現時が上限)を巡って、本稿では、48の黄色塗範囲の事跡への関わりを積極的に解し、②及び⑤出現の背景、即ちそれぞれ慧照院及び真龍院関連に倣って、①・②の前(枉げて同時である場合を排除しない)を第一としたものの、Ⅱ-iv期の始まりを何に依るとすべきかは厳密には保留となっている。

(19) 本稿における第1類絵図群~第5類絵図群の各景観存続期間は、それぞれ(境界を重複して数えているが)、7、11、24、20、5年となる一方、各絵図群の景観点数はそれぞれ22、3、6、11、8点を数え、1群及び5群が年<点:年/点=0.32及び0.63、2・3・4群及び全体が年>点:年/点=3.67、4.00、1.82及び1.26となる。

1群(0.32)と3群(4.00)とでは実に12倍超の密度差があり、それらはそれぞれ時代背景と深く関わっているのだろうが、それにしても、本稿対象期間の三分の一を超えてやがて四半世紀に及ぶにも関わらず、個々の絵図への関心やそれに基づく分析・研究の進展はともかく、景観はそれぞれ明瞭であるのにたいして、諸々事跡との照応が十分でないのか背景はぼんやりといった感もあり、本文とこれまた重複するが一層の事跡探究が求められている。

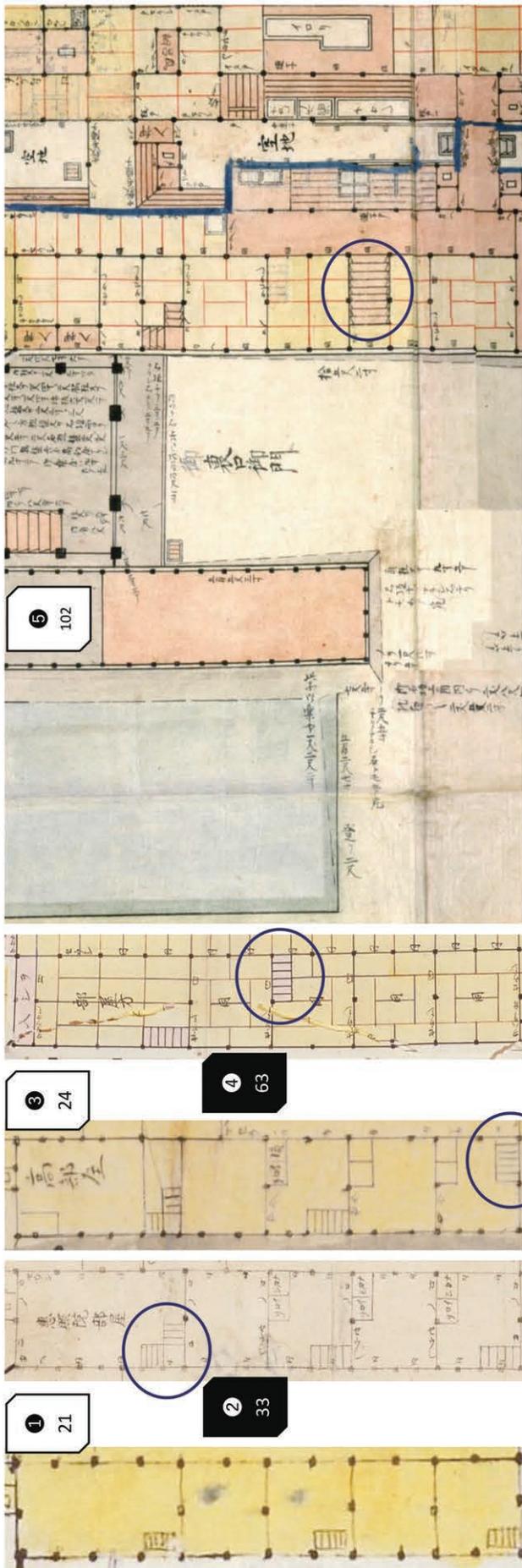
附表 年表(抄) 1 : 文化5年~文政7年 (1808~1824)

和暦	西暦	月	事 跡	絵 図 群	五 期 区 分	細 分 案	階 段 配 置	絵 図											
文化	5	1808	1 15二ノ丸御殿全焼(文化火災)	1 群	I	i	①	21 ・ 22											
			2																
			3 28齊広帰国(本多邸仮住居)																
			4 13造営奉行任命(8人)																
			21 「御間絵図」出来																
			5																
			6 28木作り始めの儀																
			6 : アミ掛; 閏月、以下同じ																
			7 25柱建ての儀																
			8																
			9																
			10 27幕府より再建許可老中奉書																
	11																		
	12																		
	6	1809	1			2 24二ノ丸御殿上棟式	内装等覚	II	ii	②	20・18 ・ 19・34 / 33 ・ 36								
			3																
			4 3裏口門二階上り口付方裁可『御造営方日記』																
			26齊広二ノ丸移徙																
			5																
			6 裏口門棟札納め(3月~着手) 文化8年(1811)正月提出:																
			7																
			8																
			9																
			10																
			11																
			12 18-23裏口門出来																
	7	1810	1 7治脩没			地指図	III	a	古/新	③	24 ・ 31 / 25~29 ・ 32・38								
			2																
			3																
			4																
			5 2慧照院金谷に移るべき旨『齊広様御伝略等之内書抜』																
			6																
			7 引渡(造営方閉鎖)																
			8																
			9																
			10																
11																			
12 「二之御丸御殿建物指図」:																			
8	1811	1 『二之御丸御殿御造営内装等覚及び見本・絵形』(提出)	地指図	III	b		③	23											
		2 規式能																	
		2 慰能																	
		6 御大工篠田弥三兵衛「二 御丸広式・部屋方二階建揚等補理主附」																	
		8 御大工篠田弥三兵衛「二 御丸奥御舞台・御見物所等補理主附」																	
		文化10年7月12日: 御大工清水又十郎白銀拝領文化九年秋施工済漸く																	
9	1812	8 御大工清水又十郎「二 御丸御広式御対面所御建継被仰付」	III	c	(古)	+													
10	1813	「御広式之分、□(文)化十酉年出来被仰付~」: 43					(新)	43											
11	1814	12 23「二之御丸御居間先御亭鳥籠等御普請御用相動候二付 文化十一年戌十二月廿三日 於御次拝領被仰付 御作事奉行中引請御用番小堀牛右衛門殿 被相渡候 御目録」							I	i	③	50							
12	1815	4 御大工清水又十郎「二 御丸御広式御対面所御建継被仰付」											II	ii	+				
6 (齊泰同母の妹)寛姫誕生	III	iii														+			
元																	1818	12 25御寝所御鋪理御居間御住居替御用主付相動候二付~	III
3			1820	6 13(二ノ丸)勝千代就相殿	III	iii											+		
5			1822	11 21齊広隠居齊泰家督相続許可			III	iii										+	
12 16齊広竹沢御殿に移る			III	iii					+										
1										1824	23齊泰に三月を以って国元に帰る許可が下りる旨	III	iii	+					
3 13齊泰に国元に帰る許可が下りる	III	iii									+								
4 4齊泰金沢城に着す(3月18日に江戸を発す)															III	iii			+
7 12齊広の喪を発す(10日卒去)					III	iii											+		
8 19栄操院二ノ丸広式に移る							III	iii										+	
9			1824	8 19栄操院二ノ丸広式に移る					III										
9				1824						9		III	iii	+					

群	景観	No.	時期	題名	所蔵者等	請求番号等	寸法 (cm)	
1	群	1	18	後期1	二の丸御殿絵図	金沢市立玉川図書館 (加越能文庫)	16.18-30	80×54
		2	19	後期1	文化六己巳御造営之御殿図	石川県立歴史博物館 (篠原一宏家文書)	館蔵2-223 4-20	54×80
		3	20	後期1	金沢城二之丸御殿図	金沢市立玉川図書館 (加越能文庫)	16.18-31	100×52
		4	21	後期1	金沢城二之丸図	石川県立図書館	K391 -69	74×129
		5	22	後期1	金谷御殿間取図 (金沢城二ノ丸御殿間取図)	富山県立図書館	T092.75-3	74×125
		6	23	後期1	二の御丸惣絵図 (三步基)	金沢大学附属図書館	5-40-160	75×144
		7	24	後期1	金沢城二之御丸御殿明細図	金沢市立玉川図書館 (郷土資料)	K2-839	140×70
		8	25	後期1	金沢城二ノ丸絵図面	金沢市立玉川図書館 (郷土資料)	090 -776	87×137
		9	26	後期1	金沢城二の丸絵図	金沢大学附属図書館		150×77
		10	27	後期1	金沢城二ノ丸絵図	石川県立歴史博物館 (村松コレクション)	村松コレクションA	66×144
		11	28	後期1	金沢城二之丸御住居殿間図 (二ノ丸全図)	金沢市立玉川図書館 (氏家文庫)	13.0-84-①	80×168
		12	29	後期1	金沢城二之丸御住居殿間図 (二ノ丸全図 (三分割))	金沢市立玉川図書館 (氏家文庫)	13.0-84-②	165×80 (3枚計)
		13	30	後期1	金沢城二之丸御殿之図	金沢市立玉川図書館 (後藤文庫)	19.9-75	103×118
		14	31	後期1	金沢城二の丸絵図	石川県立歴史博物館	館蔵2-18-2-947	75×130
		15	32	後期1	二ノ丸御殿図	照円寺		121×73
		16	33	後期1	二ノ丸御屋形図	前田土佐守家資料館	絵図6	272×140
		17	34	後期1	金沢城二ノ丸諸建物図	石川県立図書館 (森田文庫)	K391 -15	90×53
		18	35	後期1	金城営中図	西尾市岩瀬文庫	子-351	54×94
		19	36	後期1	金沢城二ノ丸之図	金沢市立玉川図書館 (加越能文庫)	16.18-32	140×260
		20	37	後期1	二ノ丸御建物平面図	石川県立図書館 (富田文庫)	1	78×132
22	21	38	後期1	於表御舞台御規式御能被仰付候御補理御絵図	金沢市立玉川図書館 (大友文庫)	大1115	74×155	
22	22	43	後期1	御広式向御二階之分絵図	金沢市立玉川図書館 (加越能文庫)	16.18-42	80×100	
保 留 ・ 割 愛		39	後期1	加賀金沢城表御殿中之図	(公財) 三井文庫	c825-48	40×27	
		40	後期1	金府敷面之図	石川県立歴史博物館 (村松コレクション)	村松コレクション96	78×109	
		41	後期1	金沢城二之丸御殿間取之図	金沢市立玉川図書館 (清水文庫)	18.6-39	28×40	
		42	後期1	二ノ丸表向座敷等之図	石川県立歴史博物館 (大鋸コレクション)	大鋸コレクション⑤	56×48	
		44	後期1	二の丸部屋方間取図	松井建設	撮影番号04	103×76	
		45	後期1	二の丸竹の間付近平面図 (付屋根伏せ図)	松井建設	撮影番号07	56×67	
		46	後期1	二の丸検垣之間・松之間・奥御書院等平面図 (付屋根伏せ図)	松井建設	撮影番号05	51×70	
		47	後期1	二の丸御殿御居間付近の図 (付水道路線)	松井建設	撮影番号09	60×56	
2	群	23	48	後期2	金沢城二の丸地図	石川県立歴史博物館	館蔵2-18-2-1355	130×255
		49	後期2	二之丸御殿並御広式下部屋等絵図 (表御式台ヨリ竹之間迄、御台所ヨリ柳之御間迄)	金沢市立玉川図書館 (清水文庫)	18.6-49-①	40×54	
		50	後期2	二之丸御殿並御広式下部屋等絵図 (滝之御間・波之御間ヨリ御居間廻り御広式廻り迄)	金沢市立玉川図書館 (清水文庫)	18.6-49-②	52×55	
3	51	後期2	二之丸御殿並御広式下部屋等絵図 (御広式下壇廻り)	金沢市立玉川図書館 (清水文庫)	18.6-49-③	33×43		
3	群	25	52	後期2	二之丸御殿御補修絵図	金沢市立玉川図書館 (清水文庫)	18.6-36	67×88
		26	53	後期2	金沢城二ノ丸御殿御次内巨細絵図	金沢市立玉川図書館 (加越能文庫)	16.26 -24	176×243
		27	54	後期2	二ノ丸万年樋絵図	大友佐俊氏		188×98
		28	55	後期2*	御城中亭分基絵図	横山隆昭氏	絵図3	151×137
		56	後期2	金沢城御城内外御建物絵図 (表向)	(公財) 前田育徳会		82×143	
		57	後期2	金沢城御城内外御建物絵図 (御居間廻)	(公財) 前田育徳会		104×115	
		58	後期2	金沢城御城内外御建物絵図 (御広式)	(公財) 前田育徳会		96×125	
		59	後期2	金沢城御城内外御建物絵図 (御台所廻)	(公財) 前田育徳会		79×125	
6	群	60	後期2	竹沢御座敷総絵図二之丸並金谷御殿絵図 (二之御丸御台所辺)	大友佐俊氏		119×75	
		61	後期2	竹沢御座敷総絵図二之丸並金谷御殿絵図 (二之御丸御表廻)	大友佐俊氏		128×76	
		62	後期2	竹沢御座敷総絵図二之丸並金谷御殿絵図 (二之御丸御居間廻)	大友佐俊氏		91×100	
11	31	63	後期2	金沢城二の丸奥部絵図	石川県立歴史博物館	館蔵2-18-2-1022	110×78	
4	群	32	64	後期3*	御城分間御絵図	(公財) 前田育徳会		155×213
		33	-	101	城中絵図	石川県立図書館	大型絵図72	
		34	65	後期3	加州金沢城二ノ丸之図	(公財) 三井文庫	c825-47	80×145
		35	66	後期3	金沢城二之御丸三步基図A	石川県立図書館	K391 -7	143×83
		36	67	後期3	金沢城二之御丸三步基図B	石川県立図書館	K391 -7	142×83
		37	68	後期4	二ノ丸御殿図	青砥文庫		-
		38	69	後期4	金沢城二之丸御次内嘉永年中修補図	金沢市立玉川図書館 (清水文庫)	18.6-40	56×80
		39	71	後期4	用番方御絵図⑩松之間席絵図	金沢市立玉川図書館 (大友文庫)	大1117 - ⑩	28×49
		40	72	後期4	用番方御絵図⑮御用之間江被召候節出所等絵図	金沢市立玉川図書館 (大友文庫)	大1117 - ⑮	30×21
		41	74	後期5	姫君様御着輿之節御供落シ絵図 (御守殿御門内外御供落シ個所)	金沢市立玉川図書館 (加越能文庫)	16.15-110	48×36
11	42	75	後期5	金沢城二之丸御守殿御供建方絵図 (姫君様・初姫様御建込非常之節御立退御行列御供建方絵図)	金沢市立玉川図書館 (加越能文庫)	16.15-111	108×79	
5	群	43	70	後期4	金沢城二之丸軋席方絵図	金沢市立玉川図書館 (加越能文庫)	16.26 -25	55×78
		44	-	102	二之丸御殿絵図	金沢市立玉川図書館 (加越能文庫)		189×133
		45	下	103	二之丸御殿修築指図	金沢市立玉川図書館 (加越能文庫)		54×82
		46	中					
		47	上					
48	下	後期4						
8	49	73	(中)	-	金沢城殿中図	(公財) 前田育徳会	77×55	
4	50	上	後期5					
55		76	後期5*	金沢旧城廓総図	石川県立図書館		68×78	
		77	後期5	金沢城廓内絵図面	石川県立図書館		140×77	

第1表 金沢城後期二ノ丸絵図の変遷

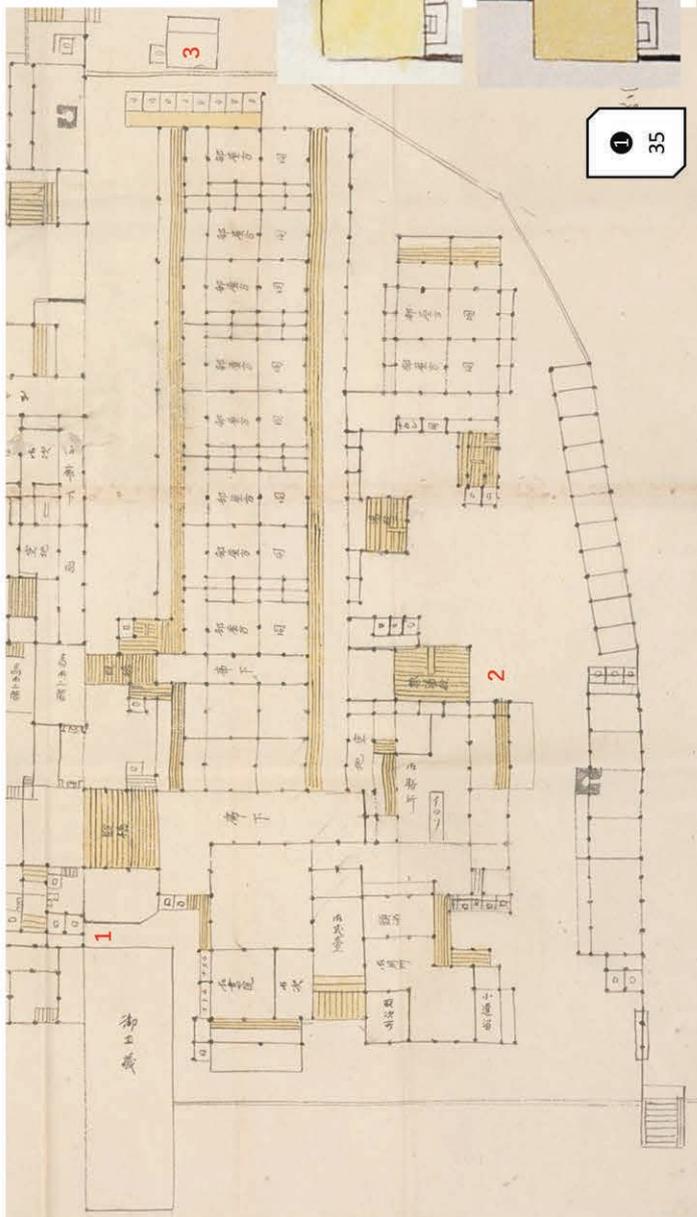
群	五時期区分	細分案	裏口門南脇長屋階段配置	※	景観年代等	絵図等(太数字: 階段配置判明)	備考						
1	I	二ノ丸	東から北西隅に L□□□(上が東)	井戸1	文化5(1808).1	21 裏口門仮 初動 志急	松ノ間西熨斗立 二重直縁/鍵+直 (重縁)						
					文化6(1809).3	22 裏口門無 [35]							
					文化7(1810).5	20 18 19 34 復旧 初期							
					文化8(1811).6頃	33 36 復旧 中期							
					文化9(1812)頃	24 31 [30・37] 復旧 復興							
					文化11(1814)頃	25 ~ 29 32 38 復旧 初期							
					文化13(1830).10 = 天保4-9(1833-8) =	23 部屋方順次二階化 中期							
					弘化4(1847).2	+ 部屋方 総二階化 復興							
					嘉永6(1853).7	43 = 文化10(1813)頃 終期							
					2	II		風呂屋	東から北西隅に(□) L□□□・南西隅に二 (上が東)	井戸1	文化12(1815).4	50 52 文化12(1815).4 49・51	裏口門南脇長屋: 慧照院部屋仕様 数寄屋敷惣湯殿周辺 斜樋状構造物? 鍵形 一重 鍵形 形
文化14(1817).7	+ 48 49~51↑は組図												
文政3(1820).6	+ 54 = 階段配置①のまま要注意												
文政5(1822).12	53 = ①②+納戸土蔵の西に③庭籠Sの設置												
文政7(1824).7	55 = 文政8(1825)~[天保3.8追記]												
天保4-9(1833-8) =	58 56 57 59 56~59組図												
弘化4(1847).2	63 60 61 62 60~62組図												
嘉永6(1853).7	101 嘉永元~[嘉永3(1850)改正]												
安政2(1855).1 = 安政5(1858).2-7	66 嘉永4(1851)-5(1852)頃												
文久3(1863).4	67 嘉永4(1851)-5(1852)頃												
3	III	数寄屋敷	東から北西隅に L□□・南東隅に□□ (上が東)	↑	嘉永6(1853).7	(+) = 奥向/広式・奥居間・部屋方 の改修: ④→⑤期の可能性を想定しているが確定できていない	松ノ間西熨斗立 居間廻廊所前空地北辺 西直縁 東 西直斜直縁 東						
					安政2(1855).1 = 安政5(1858).2-7	71 →安政2.4広式-松ノ間間土蔵(再)出来(102付箋)→ (折曲二重) 72 = 「安政五年御補理替後」 73 = 居間南縁直縁化・居間先土蔵解体→72 = 「安政五年御補理替後」 74 = 文久元(1861).7.9 「御居間先に成りたる噴水」~ 75 = 文久元(1861).7.9 「御居間先に成りたる噴水」~ 76 = 文久元(1861).7.9 「御居間先に成りたる噴水」~							
					文久3(1863).4	74 = 文久元(1861).7.9 「御居間先に成りたる噴水」~ 75 = 文久元(1861).7.9 「御居間先に成りたる噴水」~							
					慶応2(1866).4	70 : 73(中)→上に対応する書込み (慶応3.9.7?<70<慶応4.6.25?) (御興置↓(・物置)) 103 下 明治2(1869).7.18 : 付箋貼付 102 御興置(・物置) ↑「御廊下」付箋							
					慶応4(1868).8晦日	+ 「~松の御間に家令御附頭席相建居候間、可為是迄之通事」明治2年(1869).9.27 『御用方手留』							
					明治2(1869).9.28	103 中 ↑建継等様子を窺わせている							
					明治2(1869).10.14?	73 (中) ※最下限は明治3.閏10.29か							
					明治2(1869).11.18?	73 上 =明治3(1870).3 ※							
					明治3(1870).2?	77 76 =明治5(1872).3(実質組図)							
					明治4(1871).7	77 76 =明治5(1872).3(実質組図)							
4	IV	御守殿門成	東から北西隅に□□ L□□・南東隅に□□ (102—階参考、上が東) (□: 階段のない部屋)	?	慶応2(1866).4	103 下 明治2(1869).7.18 : 付箋貼付 102 御興置(・物置) ↑「御廊下」付箋	表小書院下壇東 から鍵形に折曲 表瀧ノ間から直 縁的に連絡する						
					慶応4(1868).8晦日	+ 「~松の御間に家令御附頭席相建居候間、可為是迄之通事」明治2年(1869).9.27 『御用方手留』							
					明治2(1869).9.28	103 中 ↑建継等様子を窺わせている							
					明治2(1869).10.14?	73 (中) ※最下限は明治3.閏10.29か							
					明治2(1869).11.18?	73 上 =明治3(1870).3 ※							
					明治3(1870).2?	77 76 =明治5(1872).3(実質組図)							
					明治4(1871).7	77 76 =明治5(1872).3(実質組図)							
					5	V		広式門	東から北西隅に□□ L□□・南東隅に□□ (102—階参考、上が東) (□: 階段のない部屋)	?	慶応2(1866).4	103 下 明治2(1869).7.18 : 付箋貼付 102 御興置(・物置) ↑「御廊下」付箋	表小書院下壇東 から鍵形に折曲 表瀧ノ間から直 縁的に連絡する
											慶応4(1868).8晦日	+ 「~松の御間に家令御附頭席相建居候間、可為是迄之通事」明治2年(1869).9.27 『御用方手留』	
											明治2(1869).9.28	103 中 ↑建継等様子を窺わせている	
明治2(1869).10.14?	73 (中) ※最下限は明治3.閏10.29か												
明治2(1869).11.18?	73 上 =明治3(1870).3 ※												
明治3(1870).2?	77 76 =明治5(1872).3(実質組図)												
明治4(1871).7	77 76 =明治5(1872).3(実質組図)												



第2図 金沢城後期二ノ丸裏口門南脇長屋階段配置 (1~5類)



第3図 1-i : 初動から応急1 (1 : 21・22)

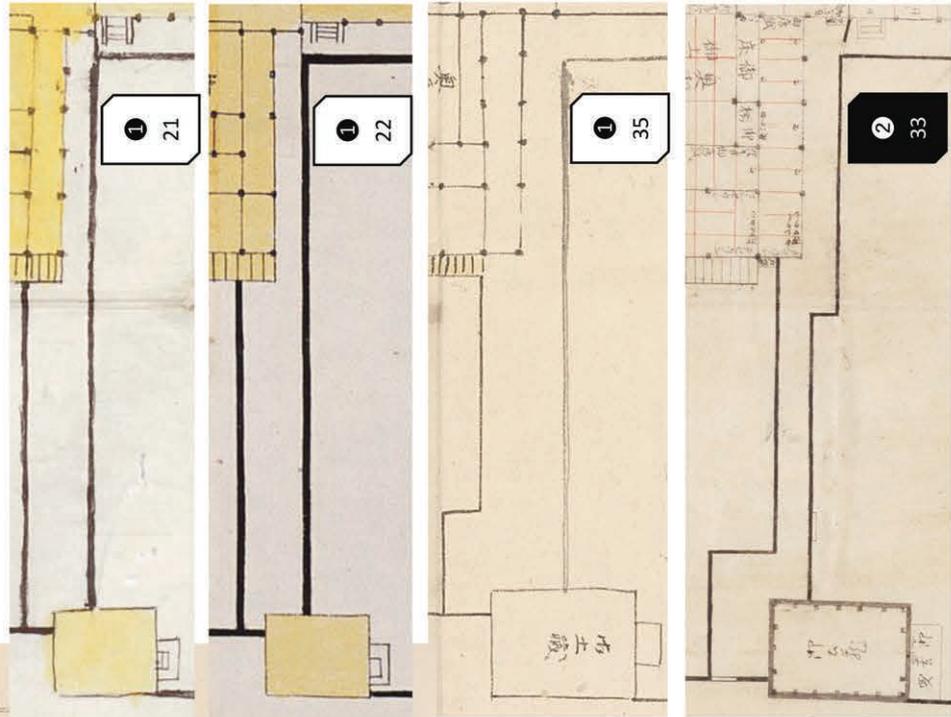


第4図 1-i : 初動から応急2 (①:35)

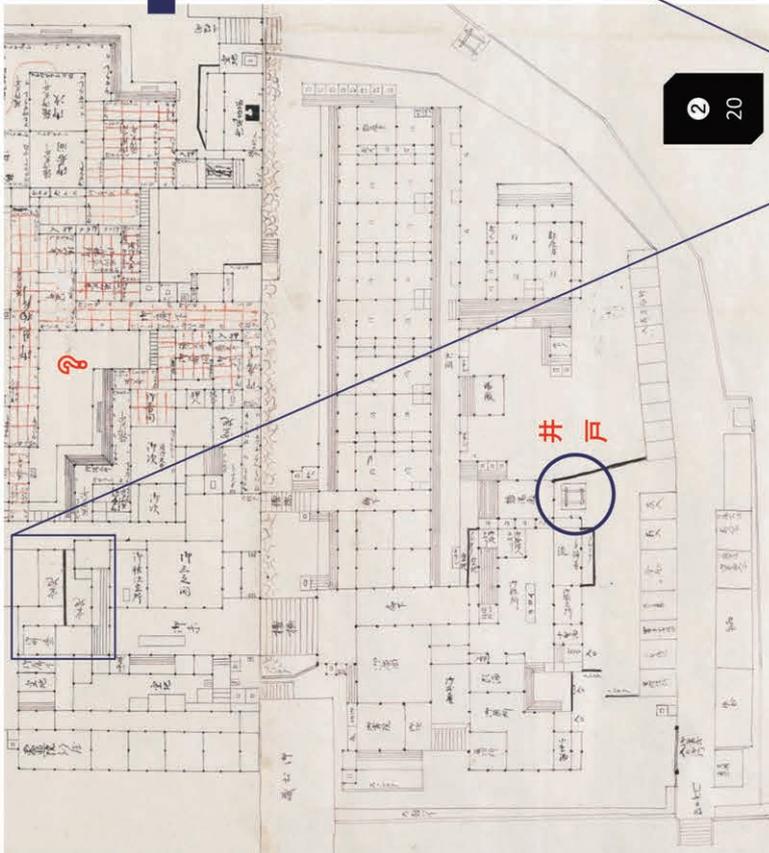
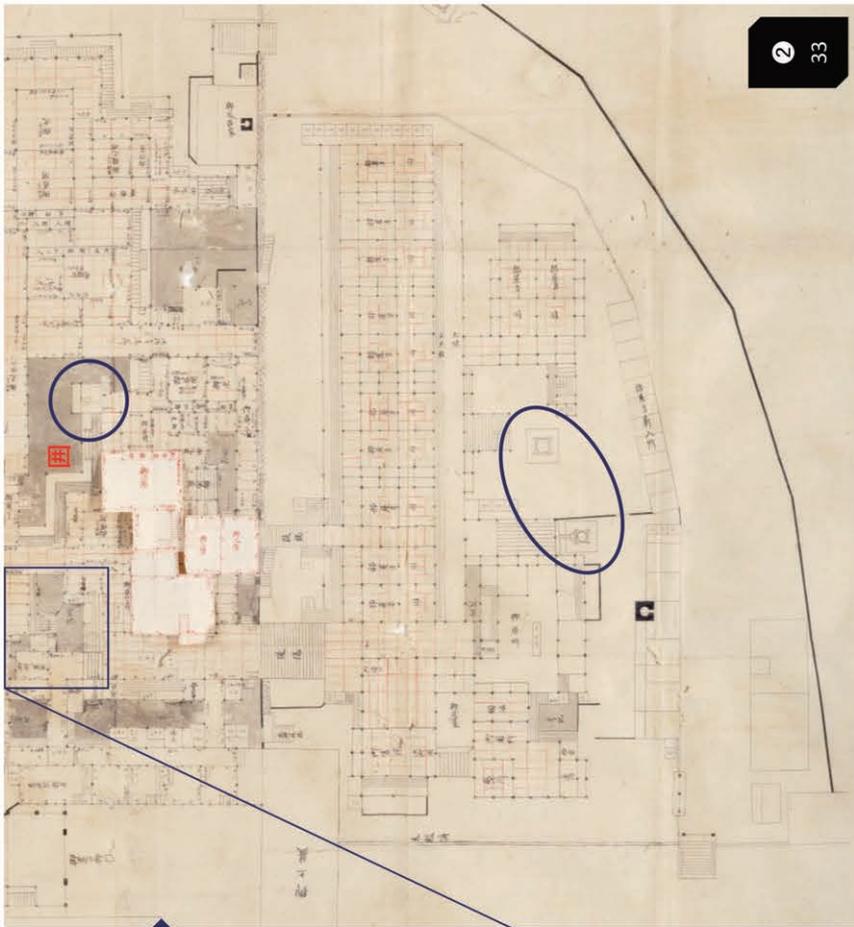
第2表 金沢城後二期二ノ丸裏口門南脇長屋の文字記載等

	裏口門南脇長屋階段配		記載箇所	区画	
	位置	内容		東	西
i	21・22(.35)	①	-	5東	4・2・2・2・2・2 4:2間X4間
	18・19・20・34	-	東から1部屋目		
ii	33	②	慧照院部屋		内装等覚 2:2間X2間
	36	-	-		
I	24・31	-	高部屋	6東	3・1・2・2・2・2・2 3:2間X3間
	32	-	-		地指図 1:2間X1間
	25・26・27・28・29	③	東から3部屋目		
iii	23	-	高部屋		
	(古)	-	-		
c	(新)43	-	部屋方	5東	4・2・2・2・2・2

- 1 数寄屋屋敷 北東 御(雛)土蔵南(水掛)段橋:
西中央 井戸:
1群(I期); 35・30・37を除く15点総てで描かれる
- 2
- 3 数寄屋屋敷 南東 建物軸に並行する番所:
1群(I期); 35・30・37を除くI-i~ii 5点では描かれず、I-iii 9点では斜向する番所が描かれる

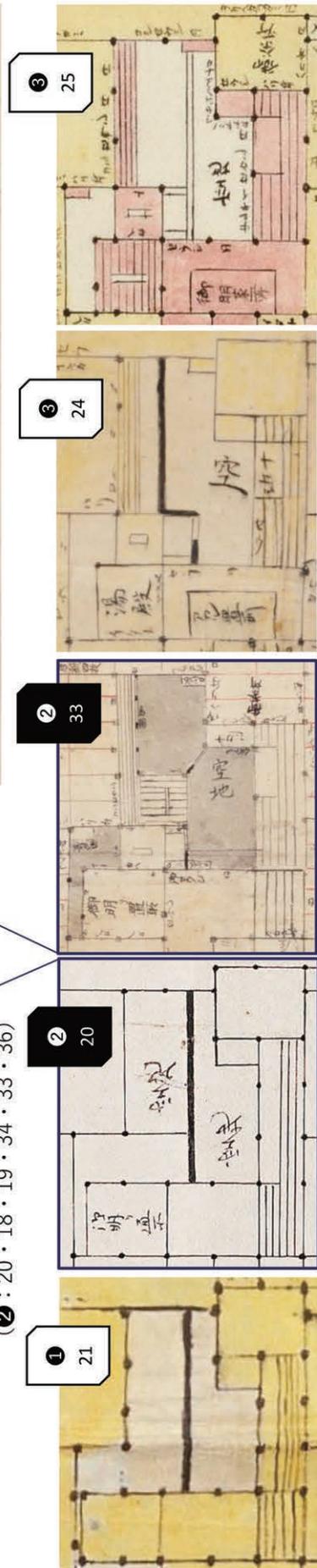


第5図 1-i~ii: 表向/松ノ間西熨斗立

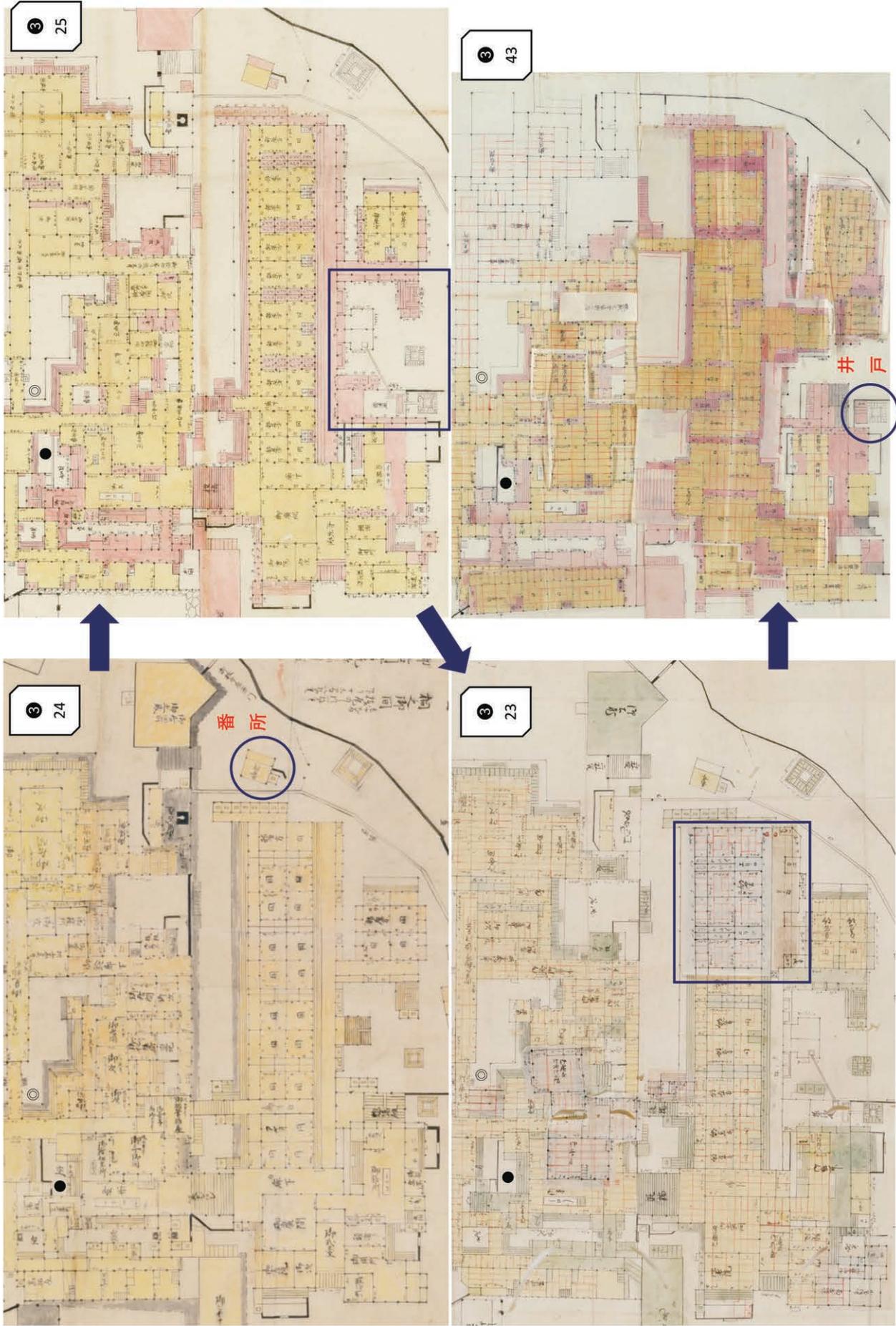


第6図 I - ii : 応急から復旧

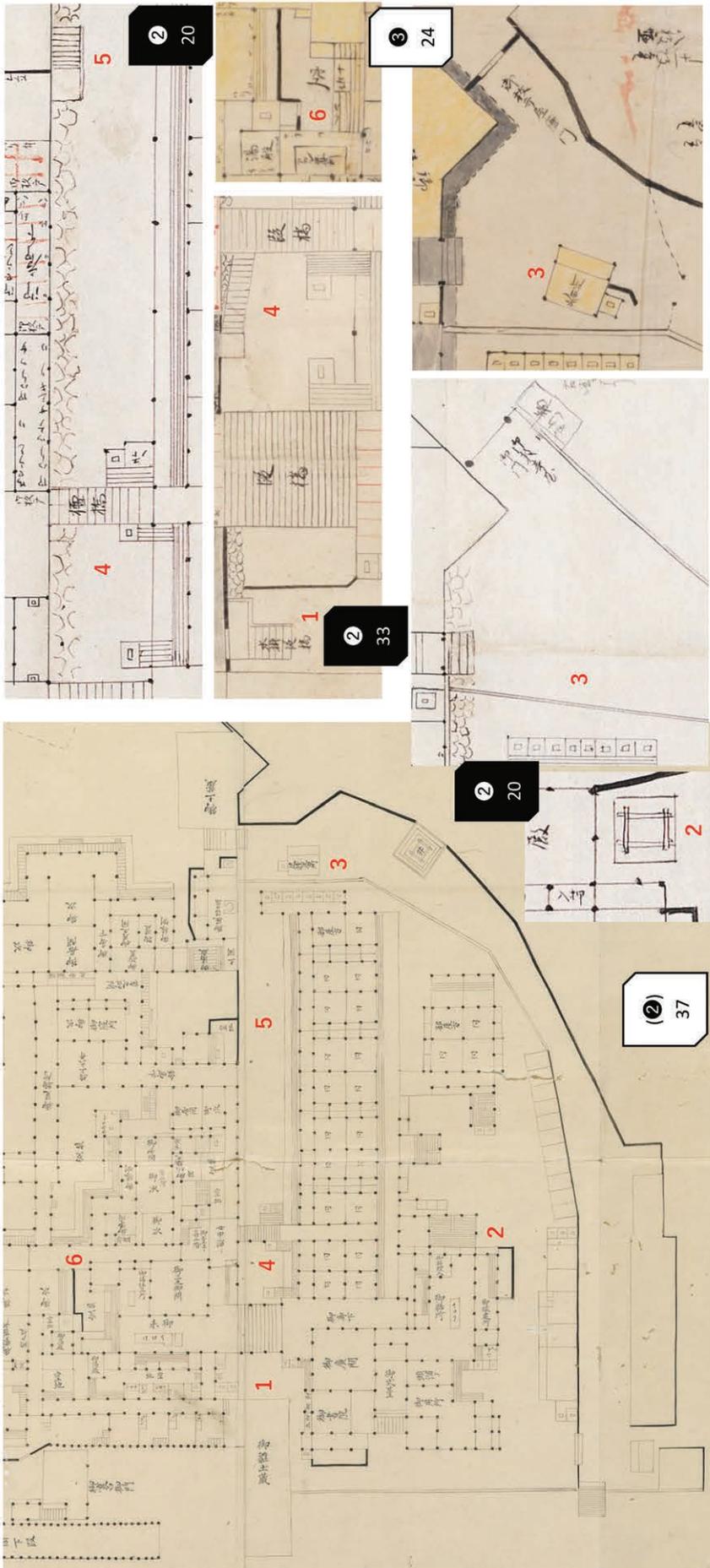
(2 : 20・18・19・34・33・36)



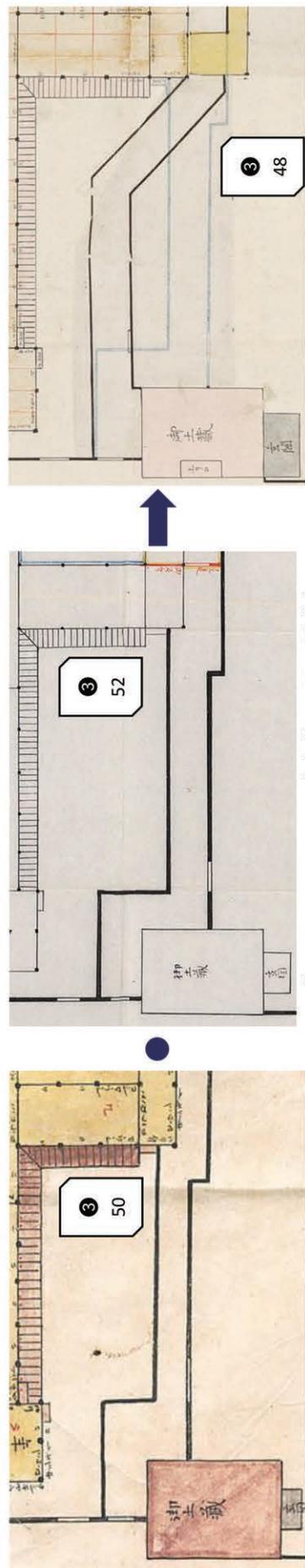
第7図 I - i ~ iii : 広式御膳仕立所東側熨斗立



第8図 I - iii : 復旧から復興1 (③ : 23~29・31・32・38・43 ; 11) (● 広式御膳仕立所東側廻斗立・◎ 広式御仏間東縁建継)

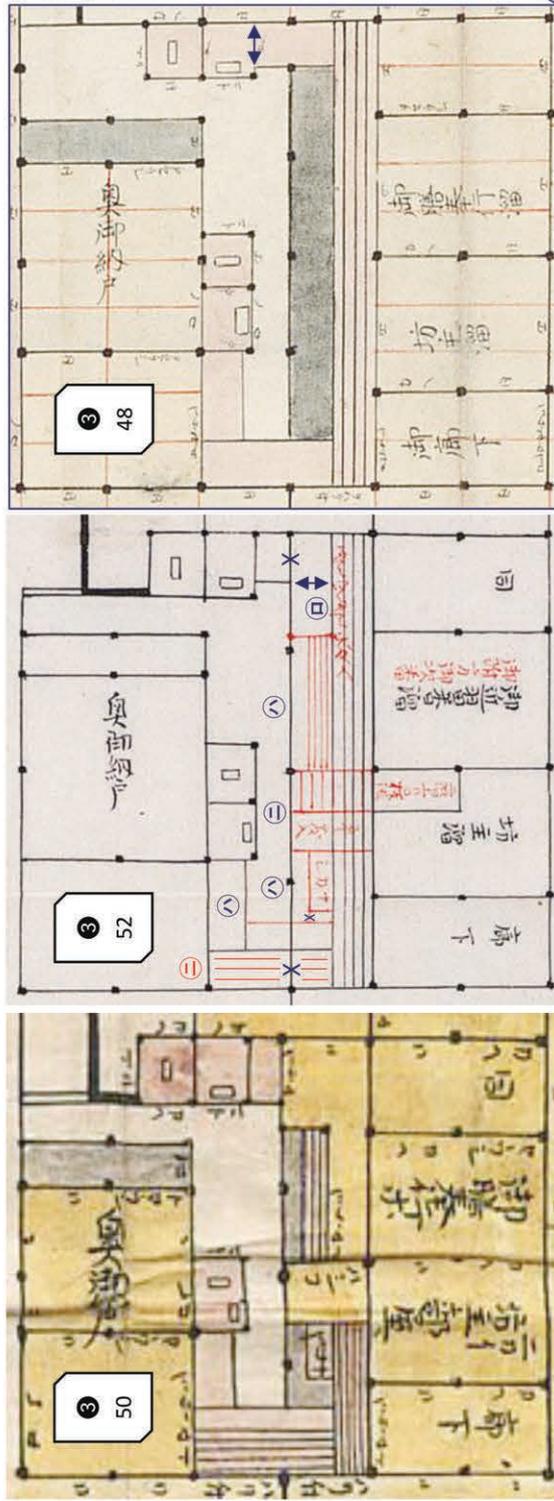


第9図 I - iii : 復旧から復興2 ((2) : 30・37)

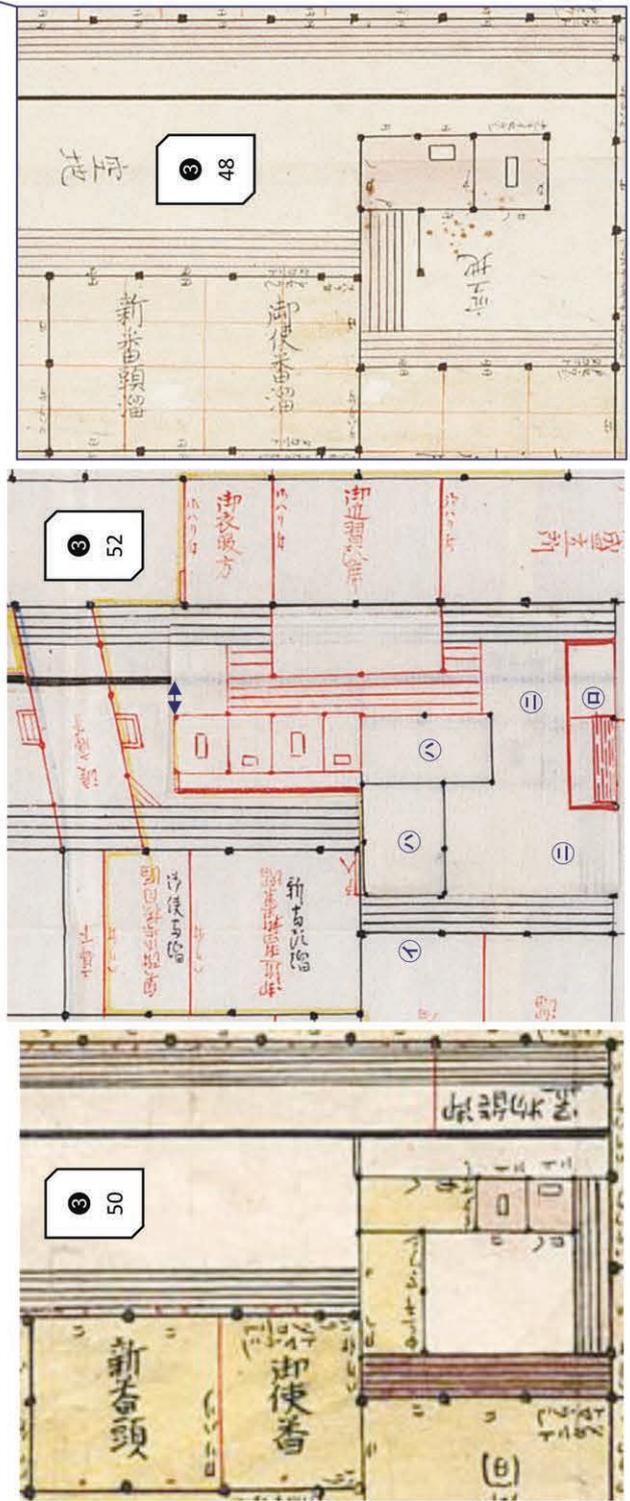


第10図 II - i ~ iii : 表向/松ノ間西熨斗立

現況：④・㊦／改修：⑤・㊧
 ⑤：「墨」新たに設えるもの
 ④：「一」現況で残すもの
 ㊦：「朱」現況で撤去するもの

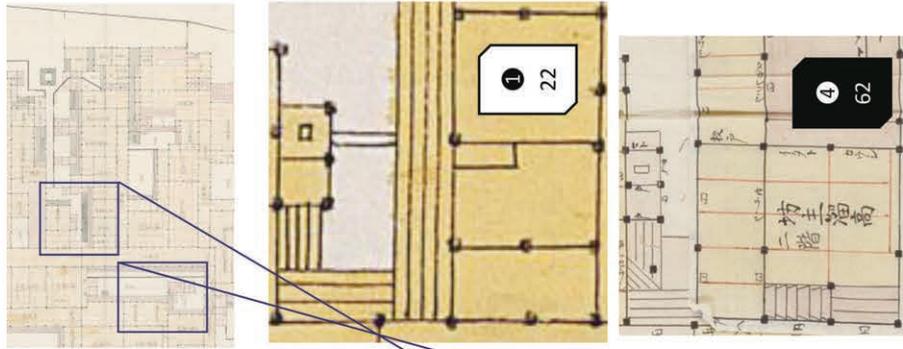


第11図 Ⅱ-i~iii：居間東北端/(南から)御膳奉行溜～坊主溜～廊下の東(一部表現に不具合。その旨加筆)



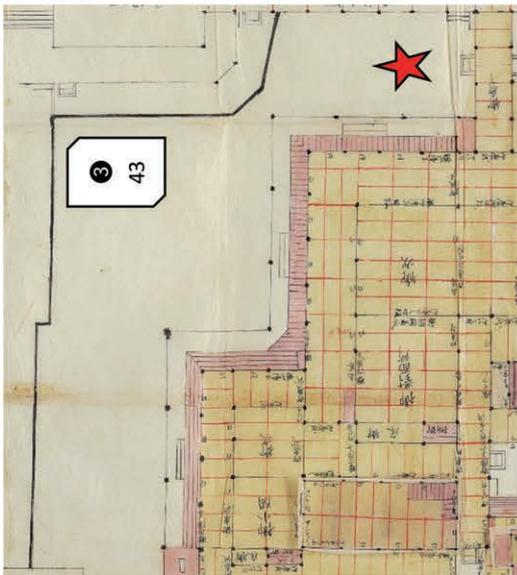
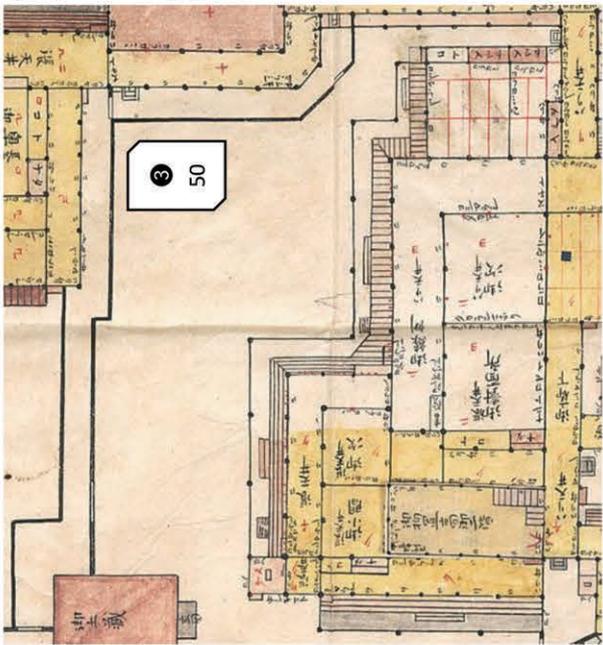
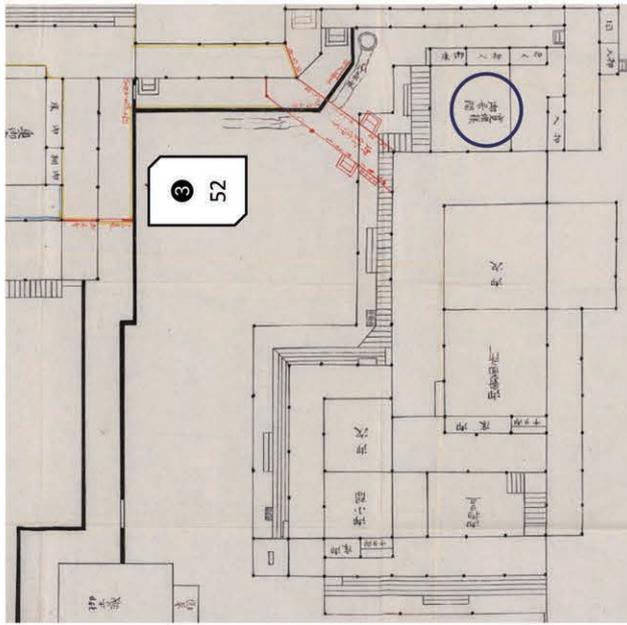
第13図 Ⅱ-i~iii：表向/蔦之間～(檜垣之間南の)御使番・新番頭溜の南の空地(一部表現に不具合。その旨加筆)

現況：④・㊦／改修：⑤・㊧
 ⑤：「墨」新たに設えるもの
 ④：「一」現況で残すもの
 ㊦：「朱」現況で撤去するもの

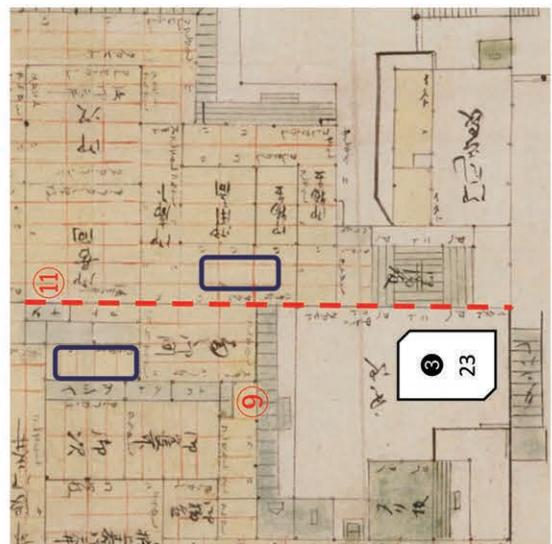
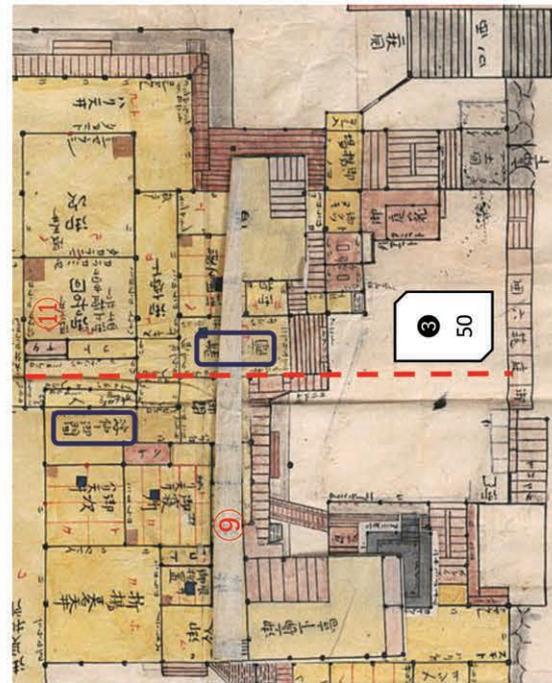
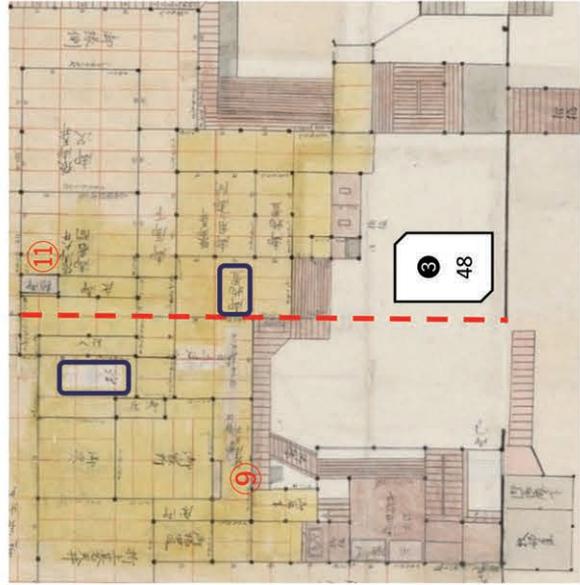


第12図 居間東北端「二階上り口」坊主溜4・廊下8

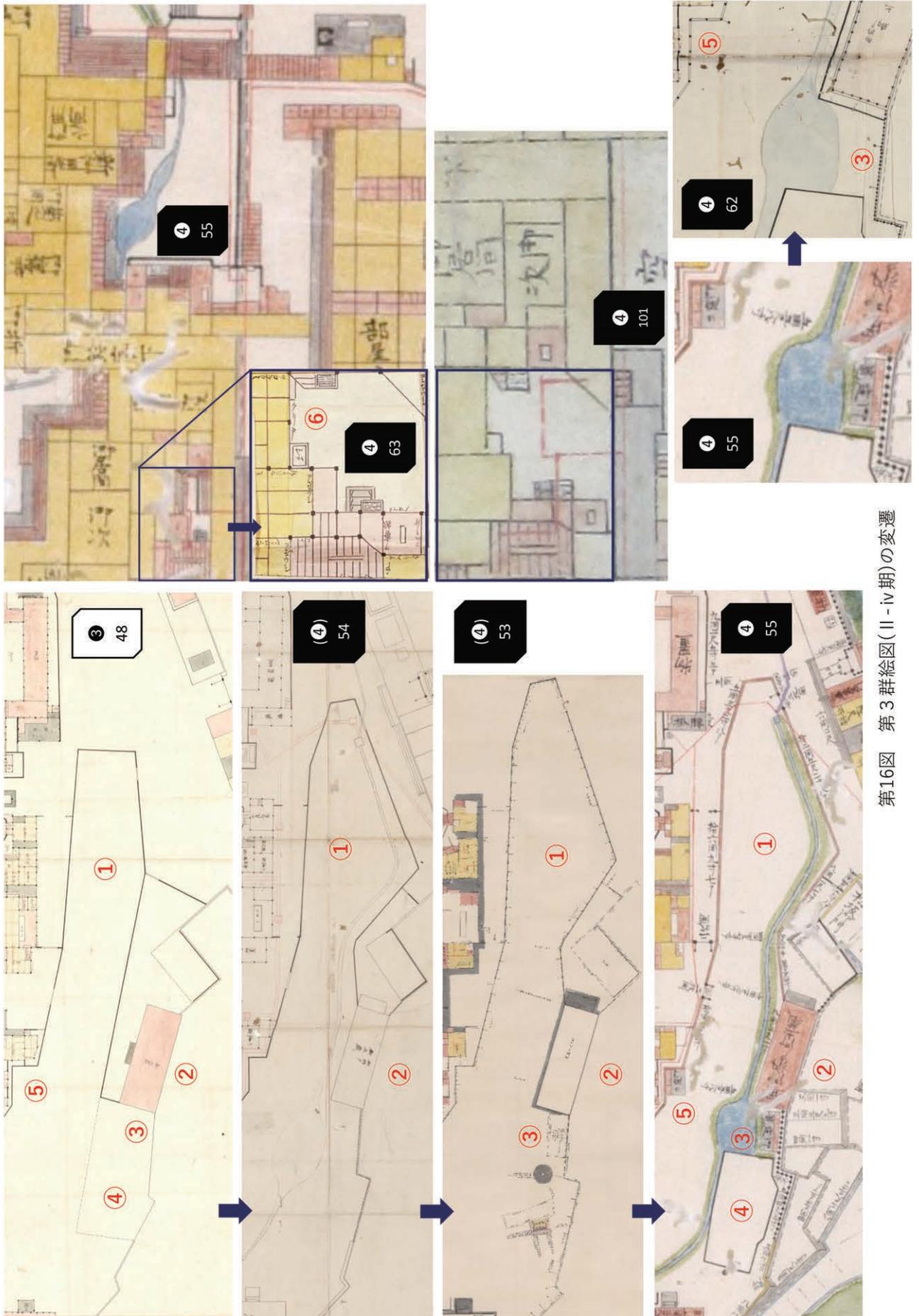
④：現況(に紙を貼り)⑤・㊦・㊧
 ⑤：「朱」新たに設えるもの
 ㊦：「墨」現況で残すもの
 ㊧：「一」現況で撤去するもの



第14图 I - iii c (43) → II - i (50) → II - ii (52) : 奥向/広式対面所南侧周辺



第15图 I - iii b (23) → II - i (50) → II - iii (48) iv : 居間廻り(部分)



第16図 第3群絵図(II - iv期)の変遷

近世前期加賀藩主前田家の疱瘡と藩士の動向

池田 仁子

一、はじめに

近世の疱瘡に関しては、酒井シヅ氏らの研究があるなか⁽¹⁾、筆者はこれまで加賀藩の生活文化・医療・医者・儒者らの知識人について攻究してきた⁽²⁾。しかし、これらはいまだ不十分であることはいうまでもない。これらのうち、本稿では、藩主前田家の疱瘡と藩士の動向について、試みに管見に触れた未刊史料を中心に翻刻・紹介しながら考察していきたい。

因みに、近世前期加賀藩主前田家の疱瘡をみると、文禄4年(1595)京都にて前田利政(孫四郎)が、また、4代光高は江戸龍ノ口邸において寛永15年(1638)正月に、同様に光高正室清泰院は同年2月に同藩邸にて疱瘡に罹患している⁽³⁾。ところで、5代綱紀の疱瘡罹患の時期に関して、『国事雑抄』では「松雲公御疱瘡」として、正保3年(1646)と年代比定し、3月「十□」付、今枝民部から宝幢寺御同宿中宛て、3月17日付、奥村因幡守和豊から宝幢寺宛て、5月13日付、葛巻蔵人・岡嶋市郎兵衛から宝幢寺御同宿中宛ての3通の文書を収録している⁽⁴⁾。

しかし、中山家文書(金沢市立玉川図書館近世史料館寄託文書)より以下紹介するように綱紀の疱瘡罹患は慶安3年(1650)であることがわかる。なお、「大猷院殿御実紀」慶安3年4月29日条に「松平犬千代丸疱瘡平癒をほぎて女房御使し。清泰院御方始め。犬千代丸其外女房等まで。銀糸。綿つかはさるゝ事若干なり」と記されている⁽⁵⁾。さらに、『加賀藩史料』も慶安3年としている(「松雲公夜話」「夜話之抄」)⁽⁶⁾。因みに、寛永16年(1639)前田利常は隠居し、嫡男光高が4代藩主と成り、二男利次に富山藩を、三男利治に大聖寺藩を分封するが、正保2年光高が急逝したため、幼少の孫綱紀が5代藩主と成り、利常が後見役として、隠居政治を行っている⁽⁷⁾。

こうした、前田家の子弟が疱瘡等の病気に罹った際、加賀藩側・富山藩側・大聖寺藩側の前田家の人々の動向をはじめ、江戸藩邸や金沢城・小松城勤務の藩士、宮腰等の町年寄はどのように動いたか、また、前田家の医療・病における、いわば家政の問題、藩士の動向などの一端を知ることが肝要であろう。因みに、慶安期の金沢城代についてみると、前田貞里が正保2年9月12日同職を拜命し務めている⁽⁸⁾。

さて、綱紀は寛永20年(1643)11月16日龍ノ口邸(江戸城大手門外に位置する。近世初期加賀藩の上屋敷)にて生まれ、前記のように正保2年(1645)3歳にて襲封、慶安3年疱瘡罹患時は8歳。金沢城に初入城するは寛文元年(1661)である。以下、綱紀の疱瘡につき史料を紹介しよう。

二、未刊史料の翻刻

【史料 1】中山家文書 140-6のうち〈慶安3年3月〉綱紀疱瘡に付折封上書〔一紙〕

これは、後世の中山家の人か不詳だが、以下の文書の全体を整理したときの折封とみられる

(前田綱紀)
犬千代様慶安三年三月

御疱瘡被為 成候付、為御伺

江戸飛脚指上候節、会所御印 十二通

并今枝民部(前節)殿等御返事等

【大意】

犬千代様が慶安3年3月疱瘡に罹り、御見舞を江戸へ差上げた節、会所御印並びに今枝民部らの返事等12通である。

上記に「十二通」とあり、綱紀の疱瘡に関するものである。後世の者が折封に仕立て入れたものとみられる。ともあれ、以下、整理番号・文書番号順ではなく、日付順に紹介しよう。なお、上記に「会所御印」と記されていることから、会所が「利」という利常の印の押印を担当していたのであろうか。また、今枝民部直恒は江戸在勤の綱紀の傅で、寛永14年より家老を務める。綱紀の父で先代の光高の傅

も務めていた⁽⁹⁾。慶安4年65歳にて没する。

【史料2】中山家文書 140-3〈慶安3年3月10日〉綱紀疱瘡罹患に付会所御印〔切紙〕

(前田綱紀)
犬千代様御疱瘡被遊付、
宮腰町中の飛脚
指越候通 (前田利常) 中納言様
相立 御耳候、此段
可被申渡候、以上、
(印字「利」)
(黒印) 〔天地逆ニテ押印〕
(慶安三年)
三月十日 会所
(重治、宮腰町奉行)
小川八郎右衛門殿
福嶋清兵衛殿

【大意】

犬千代様の疱瘡罹患に付、宮腰町中より飛脚が差し越したとおり中納言様の御耳に入れました。この事を（家中に）申し渡すように。

史料1にも関係する会所は、『加能郷土辞彙』によれば藩主や藩の物品の出納などを取り扱う役所で、その奉行の初見は、有沢孫作であるという⁽¹⁰⁾。同人は「諸士系譜」（玉川図書館近世史料館加越能文庫、以下特記しない場合は同文庫）によれば、俊澄といい、父の死（寛永8年）ののち、遺知のうち300石、大小将、光高御部屋詰より御付となり、慶安3年会所奉行を務め、寛文4年高岡町奉行、延宝4年隠居、同年没、71歳と記されている。この文書のように、3月10日段階で、有沢孫作が会所の役職を担っていたかどうか不詳であるが、可能性も否定できない。また、福島清兵衛は「諸士系譜」によれば、慶長19年利常に出仕。元和5年頃の「先代侍帳」（16.30-37）では大筒打衆、150石と記されている⁽¹¹⁾。

【史料3】中山家文書 140-4〈慶安3年3月10日〉綱紀疱瘡酒湯に付宮腰主計宛伴八矢返書〔折紙〕

(貼紙、朱勅)
「御疱瘡 二
伴八矢殿 』
(前田綱紀)
犬千代様御疱瘡
被遊付而、去四日之
御飛札、同十日到来、
令披見候、御疱瘡
打続、弥輕被遊、
二・三日御勢申付而、明
十一日御酒湯被為掛
首尾二候条、氣遣二
有間布候、尚以御酒
湯被為掛、吉左右
可申入候、恐々謹言、
(慶安三年)
三月十日 (長正、長之)
伴八矢
(花押)

【大意】

犬千代様の疱瘡罹患に付、去る4日の御飛札が10日に到来し、拝見しました。軽症であったゆえ、明11日には酒湯を行う予定で、御氣遣いなく、酒湯の御祝を申し入れます。

宮腰
主計様
返報

この文書のみでなく、全体的に酒湯に使用された酒の生産地はどこか、例えば加賀宮腰・鶴来・江戸のいずれかであろうか。今後の課題である。なお、吉相はめでたい事、良い事を意味する。さらに伴八矢は御使番、御中小将番頭、足軽頭などを歴任、明暦元年没。さらに、宮腰主計は同町年寄の三代目の成嗣。実は唐仁屋七右衛門三男。承応2年（1653）没、67歳である⁽¹²⁾。

【史料4】中山家文書 140-5 〈慶安3年3月10日〉 綱紀疱瘡酒湯に付山崎長兵衛返書〔折紙〕

(點紙、朱書)
「御疱瘡 三

山崎長兵衛殿」

尚以、雪部様へ到来候
へ共、我等病中故、此度
返事不申入候間、御心得置
可被下候、以上、

御状令披見、則

(富山藩主前田利次)
淡路守様相立

御耳申候、

犬千代様御疱瘡

被遊候へ共、一段とかるく

(前田利常)
中納言様・淡州様

御機嫌之御事二候、

右之通、拙子方へ

可申入候旨 御意ニ

御座候、明日にも御酒

湯可被為懸候旨ニ候、

恐々謹言、

山崎長兵衛
(花押)

(慶安三年)
三月十日

宮腰
主計殿
御返報

【大意】

尚さらに、雪部様より（書状が）到来したが、私は病中のため返事が出せなかったため、御承知ください。以上、御手紙を拝見し、淡路守様の御耳にも入れました。犬千代様が疱瘡に罹患されましたが、軽症で、中納言様も淡州様も御機嫌のようです。このように、私より申し入れることは、（淡路守様の）御意であります。明日（11日）にも酒湯を行うとのことです。

山崎長兵衛は富山藩士。寛永4年200石。慶安3年当時は江戸詰とみられる。史料中の雪部氏は不詳。淡路守は前田利常次男、初代富山藩主前田利次、当時富山藩邸は、加賀藩本郷邸の東側に隣接する地である（編外備考）。また、慶安3年3月29日の類火により利常は、本郷邸（当時下屋敷）から大聖寺藩主前田利治邸（本郷茅町、現東京都台東区池之端）に仮住する⁽¹³⁾。

【史料5】中山家文書 140-6 〈慶安3年3月10日〉 綱紀疱瘡酒湯に付会所御印〔切紙〕

(折封、上書)
「 犬千代様慶安三年三月ニ
御印 御疱瘡被為成候ニ付覚書
江戸へ飛脚上ケ申御返事 」

〔貼紙、朱書〕
「御疱瘡 一
会所御印 〕
(前田綱紀)
犬千代様御疱瘡被遊付
飛脚被指越候通、
(前田利常)
中納言様相立 御耳候、
上而 御書可被遣旨 被
仰出候、明日御酒湯被為
懸候、弥御機嫌之
御事候、以上、
(印字「利」)
(黒印)
(慶安三年)
三月十日 会所
宮腰町
主計

【大意】

犬千代様の御疱瘡については、飛脚にて情報もたらされた通り、中納言様の御耳に達しました。仰せ出されましたので、このように御達します。明日酒湯を行います。ますます御機嫌の良い事であります。

この会所は類火に遇う前ゆえ、江戸藩邸のうち綱紀の後見役利常のもとの本郷邸にあったのであろうか。

【史料 6】中山家文書 140 - 7 (慶安 3 年 3 月 12 日) 綱紀疱瘡酒湯実施御祝に付今枝民部書状 [折紙]

〔貼紙、朱書〕
「御疱瘡 四
今枝民部殿 〕
当四日之飛札到
来候、則
(前田綱紀)
犬千代様入御耳候、
御疱瘡いかにも軽々と
少々無御滞、仍而御
酒湯御懸被成、千秋
万歳目出度、御国中
安堵不可過之候、謹言、
(慶安三年)
三月十二日
宮腰
主計との

【大意】

4日の御手紙到来しました。このことを犬千代様の御耳に入れました。犬千代様の疱瘡は軽症であり、酒湯を行いました。誠にめでたく、御国中においてはこれ以上の安堵はないと思います。

今枝民部
直恒 (花押)

文書の差出人の今枝民部直恒については前出。

【史料 7】中山家文書 140 - 8 (慶安 3 年 4 月 2 日) 綱紀疱瘡酒湯御祝に付横山右近書状 [折紙]

〔貼紙、朱書〕
「御疱瘡 五
横山右近殿 〕
去月十九日之
書状令披見候、
(前田綱紀)
犬千代様被為掛
御酒湯為御祝
儀、飛脚上之旨、

尤候、猶期来書候、
謹言、

(慶安三年)
四月二日
中山主計殿

(横山) 横 右近
守知 (花押)

【大意】

去月(3月)19日の書状拝見しました。犬千代様は御疱瘡の酒湯を成され、その御祝儀として献上の旨承知いたしました。

差出人の横山右近は6000石、長知の子、康玄の弟。万治元年(1658)寺社奉行、延宝2年(1674)没。

【史料8】中山家文書 140-2 (慶安3年4月3日) 綱紀疱瘡酒湯、藩邸類火の義等山崎長兵衛返書 [折紙]

(貼紙、朱書)
「御疱瘡 七

山崎長兵衛殿」

尚々 中納言様

(前田利次) 淡路様へ申成 御座候付、

何かと取込有之故、

早々申入候、以上、

(前田綱紀)
今度 犬千代様 御

疱瘡被遊、早速

御機嫌能御酒湯

御懸被成候付、飛脚

を指上候報、其趣

(行々)
示令披見候、則

御状之通、

(宮山藩主前田利次)
淡路守様相立

御耳申候、両状

被指上候へ共、御下屋敷

火事ニあい申候由

も具申上候、早々

飛脚之事、両状被上、心入

御満足ニ思召候旨、拙子

方々可申遣由、

御意ニ候者、廿九日

御下屋敷近所を

火事出来、

(前田利常)
中納言様御屋形

類火いたし候、其段

飛脚可申入候、取

込有之故、早々申入候、

仍而召分へ(昆布)こんぶ

式やき被下、過分

之至ニ存候、恐々謹言、

【大意】

尚々、中納言様が淡路守様へ申す義がありますが、何かと取り込み申ゆえ、早々に申し入れます。以上。この度犬千代様が御疱瘡にかかり、(無事)酒湯を成された御報拝見しました。すぐに御状の通り淡路守様の御耳にも達しました。両状差し上げましたが、加賀藩の下屋敷(当時本郷邸)の類火のことも(淡路守様に)詳しく申し上げました。また、拙子方より申し遣わした由、(淡路守様の)御意であり、(前月、3月)29日御下屋敷の近所より出火し、中納言様は類火に及び、飛脚で書状を申し入れたことでしょう。取り込み申ゆえ、早々にお伝えします。私どもへ昆布を二やき下さり、過分の至りです。

(慶安三年四月)
卯月三日

(山崎)
山 長兵衛

(花押)

宮腰
主計殿
御返事

この時、中納言利常は類火ののちゆえ、大聖寺藩邸に仮住していた。差出人の山崎長兵衛は前記の通り富山藩士であるゆえ、淡路守前田利次のもとに居たものとみられる。

【史料9】中山家文書 140 - 9 (慶安3年4月4日) 綱紀疱瘡酒湯祝儀献上に付浅野藤左衛門書状 [折紙]

(貼紙、朱書)
「御疱瘡 六

浅野藤左衛門殿」

(前田綱紀)
犬千代様御疱瘡被
遊御酒湯被為懸候
以飛脚御祝義指上
申附、去十八日之御札
令拜見候、最前上ケ
申候へとも、今程之御
祝儀ひと上り被申候、
神子八左衛門可申入候、恐々
謹言、

浅野藤左衛門
(花押)

(慶安三年)
四月四日

宮腰
主計殿

【大意】

犬千代様御疱瘡酒湯御祝儀献上の旨を申付け、去る18日の御手紙拝見しました。最前上げましたが、この度の御祝儀も確かに進呈されました。神子八左衛門からも申し入れると思います。

浅野藤左衛門は「諸士系譜」には、利常に出仕、1000石、御使番、中小将番頭、足軽頭、御子小将才許、正保元年小松支配、万治2年没、と記。また、浅野藤左衛門に関し「三丸後口ニ浅野藤左衛門 御家不詳」と見える。さらに寛永17年「金沢より引越之人々書上」(「梅花無尽蔵」8、加越能文庫)の中に同人が記載されている⁽¹⁴⁾。続いて寛永19年「小松侍帳」(小松市立図書館蔵)中、馬廻として「一、千石、三ノ丸・町奉行 浅野藤左衛門」と記。馬廻の軍事的職として、役方の職町奉行を万治2年6月まで兼務したことがわかる⁽¹⁵⁾。なお、これらに示された内容は「諸頭系譜」・「小松城記録二十三種」に依っている。また、当時浅野は利常につき従い仮住先の大聖寺藩邸にいたのであろうか。

つぎに「神子八左衛門」につき、「諸士系譜」(玉川図書館近世史料館郷土資料、090 - 836、18巻)によれば、神子田八右衛門の弟五兵衛は慶長19年利常に仕えるが、大坂の役で討ち死にし、その弟彦左衛門が300石で出仕したと見え、この下に少し空白があり、この人物が八左衛門を名乗ったかに解釈されるような記載の仕方が成されている。これによれば、「神子八左衛門」は、この神子田彦左衛門と比定できる。しかし、加越能文庫「諸士系譜」では大坂で討死した五兵衛の弟彦右衛門の子が八左衛門と記載されている。すなわち、彦左衛門イコール八左衛門ではなく、上記の郷土資料の「諸士系譜」に記されているように、彦左衛門と八右衛門の間に線が抜けているとの解釈も成り立つであろう。因みに神子田彦左衛門に関しては、元和5年頃の「先代侍帳」(加越能文庫、16、30-37)に「三百石 神子田彦左衛門」

と記載されている⁽¹⁶⁾。

【史料10】中山家文書 140-10(慶安3年4月5日) 綱紀疱瘡酒湯、藩邸類火謡道具の事等原田又右衛門書状〔折紙〕

^(貼紙、朱書)
「御疱瘡 十

原田又右衛門殿」

色々書状飛脚

参候事、民部殿・^(今枝直恒)弥平次殿^(今枝近義)

能御聞候さたと歎哉

可申入と存候、先々

火事ニ付而、何もかも

とりこみ打過申候

と而ハ、御物語可申入候、

先飛脚何も申候、

我等も謡道具申遣ニ

さんへの仕合ニ候、

御前躰別条無之候間、

定御心安候、親父へも

与兵へ酒や八右衛門

御心得可給候、

八右衛門書状給候、承様ハ、

到紛返事不申候間、

御心得たのミ申候、以上、

^(前田綱紀)
犬千代様御酒湯為

御懸候ニ付而、為御

祝儀飛脚被

指越候、尤存候へとも、

少おそく候故、上り

不申候、其上俄火事

ニ付て、弥談合可仕様も

無之候様子之儀申候、

八左衛門ニ申含候、今枝

^(近義)弥平次殿・^(直恒)民部殿も

よく御聞候間、其段ハ

可御心安候、

一、^(ママ)神子方へ^(切 昆 布)きりこんぶ

式百枚呈給、大慶ニ

存候、四五十枚程喰

申候所、不残焼払申候、

重而之便^(重)キ式三百

枚可給候、いかにも

よき(良 昆 布)こんぶ(選)御より
にて可被下候、残多候而、
申入候、
一、公儀へ上り申(昆 布)こんぶ・
かつ(数 の 子)のこ箱ニ入、我等
方ニ置にて不残焼
申候、我等御屋敷へ有之
申候故、道具不残
焼申候附而無之候
様子と飛脚之もの
見申候間、御物語可申候、
一、爰元用御事ニ者、
御申越可有之候、恐惶
謹言、
(慶安三年)
四月五日 原田又右衛門
長幸 (花押)

中山主計様

【大意】

色々書状が参りました。民部殿・弥平次殿より御指示があったとか、申し入れがあったことと存じます。先々の火事のことにつき、何もかも取り込んでおりますが、お伝えしたいと思います。謡道具を申し遣わすのに、さんざんな成り行きでした。御前も別条なく安心されたことでしょう。親父(詳細不明)へも与兵へ・酒や八右衛門へも取り計らい下さい。八右衛門より書状をいただきました。何かと取り込んでおり、承知の返事は出しておりませんが、宜しく頼みます。以上。

犬千代様疱瘡酒湯御祝儀の飛脚が参りました。少し遅くなりましたので、書状を進上しませんでした。その上、火事については、話し合いもない様子です。八左衛門に申し含めます。今枝弥平次殿・民部殿もよく指示がありますので、安心して下さい。

一、神子(拙子?)方へ切昆布200枚いただき有り難うございました。40から50枚程食べたところ、残らず焼けてしまいました。重ねて200から300枚程、良い昆布をいただきたく存じます。

一、公儀へ献上の昆布・数の子を箱に入れておいたところ、残らず焼けてしまいました。御屋敷(江戸本郷邸)は(大事な)道具は焼けていないようなのでお伝えします。

一、こちらの用事については、何かあれば、申し出て下さい。

原田又右衛門は500石、物頭。正保3年(1646)宮腰町奉行、万治2年(1659)6月から小松町奉行、寛文2年(1662)11月足軽頭を務める。この時、江戸詰であろうか。なおかつ、類火の様子が詳しく記されていることから、原田は利常につき従い、或いは類火前は本郷邸に居たのであろうか。神子(或いは拙子カ)・神子八左衛門については前出。文中で神子方と解説するなら同方へ切昆布を呈したとあることから、神子は原田の配下にあったのであろうか。一方、弥平次は今枝近義で直恒の子、慶安4年から延宝3年まで綱紀の傳を務めていることから⁽¹⁷⁾、綱紀のもと、龍ノ口邸に居たのであろう。民部は前出。

つぎに「謡道具」等に関連して、「大猷院殿御実紀」慶安3年4月3日条に「小松黄門利常卿別墅さきに焼ければ。茶壺。肩付。衾蒲団。蚊蠅、并に雪舟及土佐某の画屏風二双つかはさる。御使は阿部豊後守忠秋なり」と記載されている⁽¹⁸⁾。

【史料11】中山家文書 140-11(慶安3年4月5日) 綱紀疱瘡御見舞受取に付青木弥三右衛門返書[切紙]

(貼紙、朱書)
「御疱瘡 九

青木弥三右衛門殿」

御状被啓上候、然者今度

(前田綱紀)
犬千代様御疱瘡被遊付

為御見廻、自分々

飛脚被指越候、爰元

所、首尾よく

(前田利常)
中納言様相立 御耳条、

可御心安候、爰許

取込申候付、早々申渡候、

尚追而可申入候条、不能

濟候、恐惶謹言

(慶安三年)

四月五日

青木弥三右衛門
(花押)

ミヤのこし
主計殿
人々御中

【大意】

犬千代様疱瘡の御見舞の書状が届きました。中納言様の御耳に達しましたので、御安心ください。こちらは何かと取り込んでおりますので、追って申し入れます。以上申し上げます。

差出人の青木弥三右衛門に関しては「諸士系譜」や加越能文庫の各種侍帳に見えず、詳細は不明。「爰許取込」と見えることなどから青木は当時江戸詰か。しかも仮住の利常のもとにあったのか。

【史料 12】中山家文書 140 - 13(慶安3年4月5日) 綱紀疱瘡酒湯、下屋敷類火に付井上市右衛門書状 [折紙]

(貼紙、朱書)
「御疱瘡 十一

井上市右衛門殿」

尚々御家中京衆とれ

へも其節々延候故

ハ御進物上り不申候間、

被御心得尤ニ存候、

御飛脚被指上通ハ

ハレへ存候、(今枝近義) 弥平次殿へ

申入候、(今枝政領) 民部殿へも具ニ

可申入候間、可御心安候、

三月十九日書状、卯月四日

令拝受候、然御酒湯

被為懸答ニ御請取、飛

脚御指上候刻、原田

又右衛門殿相届申候、何も

後々参候飛脚之分ハ、

御耳ニ相立被申、貴殿

御飛脚被指上候通、

今枝弥平殿へハレへ

具ニ申入候様候、民部殿

へ御越可申入候而之段、

可御心得候、とく承候者、

何とそ才覚心得候ヲ

と拗たのミ候、

一、(前田綱紀) 犬千代様御機嫌能被成

御座候間、可御心安候事、

一、去廿九日亥ノ上刻

御下屋敷近類同五町

火事出来ニて、御下屋

布御処不残やけ
申候、され共、大事之御道
具ミな へ 出申候、
(前田利常)
中納言様御機嫌能被為
成御座候故、可御心安候こと
かと見計候、可被仰上候、
尚追而可申入候、恐々謹言、
(慶安三年)
四月五日 井上市右衛門
(花押)

中山主計様
まゐる

【大意】

尚々、京衆の方々も御進物を献上していませんので、御気持は尤もと思います。弥平次殿へ申し入れましたが、民部殿へも詳しく申し入れますので御安心ください。
3月19日の書状は4月4日に受け取りました。犬千代様痲瘡酒湯のこと、原田又右衛門殿が届けてくれました。いずれも（中納言様の）御耳に達しました。御手紙の通り、今枝弥平次殿へは詳細に申し入れるよう、民部殿への御越しを申し入れることについて、お話しがあるでしょう。何卒才覚をもって御承知されますよう御頼みます。
一、犬千代様はお元気になられましたので、御安心ください。
一、去る29日亥の上刻江戸下屋敷（本郷邸）が類火に遇い、残らず焼失しました。しかし、大事の御道具は避難させました。
中納言様はお元気ですので、御安心の事と存じます。

「御家中京衆」とは藩の京都屋敷詰の藩士で、当時は二条油小路の屋敷に詰めていたのであろう（編外備考）。なお、差出人の井上市右衛門に関しては、前出の青木弥三右衛門と同様「諸士系譜」や各種侍帳で確認できないが、下屋敷の類火の際、大事の御道具は避難させたと見えることから、3月29日当時利常の居た下屋敷（本郷邸）詰であったのではなかろうか。

【史料 13】中山家文書 140 - 12 (慶安3年4月5日(15日カ)) 綱紀痲瘡・火事に付青木弥三右衛門書状 [切紙]

(貼紙、朱書)
「御痲瘡 八
青木弥三右衛門殿」
(前田綱紀)
今度 犬千代様御痲瘡
被遊候て、宮腰惣代 御
見廻ニ被指越候、御当地
浅野藤左・原田又右など令
(前田利常)
相談、 中納言様相立
御耳所、首尾能候条
可御心安候、火事ニ見、
取込申候哉、早々申入候、
恐惶謹言、
(慶安三年)(十五カ)
四月五日 青木弥三右衛門
(花押)
ミヤのこし
主計殿

【大意】

このたびの犬千代様痲瘡については、宮腰惣代より御見舞が届きました。御当地では、浅野藤左・原田又右などと相談し、中納言様の御耳に達し、首尾よく行いましたので、御安心ください。火事に遇い、何かと取り込んでいるのでしょうか、早々申し入れます。

前記史料 11 に 4 月 5 日付の青木弥三右衛門の書状があり、この史料は、史料 11 の内容に続いて出されたものとみられる。すなわち、日付の 4 月の下に「十」の文字がわずかではあるが、読み取ることができる。ゆえに、4 月 15 日と解説するのが妥当とみられる。なお、当時青木及び浅野藤左衛門・原田又右衛門も江戸詰とみられる。龍ノ口邸か、本郷詰かなど詳細は今後の課題である。

三、おわりに

以上、慶安3年3月江戸上屋敷龍ノ口邸における幼い5代藩主前田綱紀の疱瘡罹患をめぐる史料につき、若干の考察を加えながら紹介した。ここでは、同下屋敷本郷邸に居住していた後見役の3代藩主で祖父前田利常の類火の問題も含め、支藩富山藩・大聖寺藩及びそれぞれの家臣、さらに国元加賀宮腰の町年寄中山主計らの動向を垣間見ることが出来た。しかし、いまだ課題も多く残された。

〔註〕

- (1) 酒井シヅ『日本の医療史』東京書籍、1982年、51・103・364頁、同『病が語る日本史』講談社、2002年、154～163頁、前川哲朗「疱瘡・コレラの流行と対策」『市史かなざわ』6、2000年、青木歳幸「近世の西洋医学と医療」（新村拓編『日本医療史』吉川弘文館、2006年、193頁）など。また、2021年加賀藩研究ネットワーク大会において、萱田寛也氏は「享保改革期における江戸幕府の流行病対策」と題し、疱瘡などにつき報告された。
- (2) 池田仁子『金沢と加賀藩町場の生活文化』岩田書院、2012年。同『近世金沢の医療と医家』岩田書院、2015年。同『加賀藩社会の医療と暮らし』桂書房、2019年。同『加賀藩知識人の躍動——近世社会と学者たち——』ペリかん社、2022年、同「加賀藩領内疱瘡の流行と種痘」（木越隆三編『加賀藩研究を切り拓く II』、桂書房、2022年）。
- (3) 池田、前掲註(2)『近世金沢の医療と医家』三章、同『加賀藩社会の医療と暮らし』一章・三章。
- (4) 『国事雑抄』上編復刻、石川県図書館協会、昭和46年、27頁。
- (5) 黒板勝美編輯『新訂増補国史大系第四十卷 徳川実紀第三篇』吉川弘文館、1998年。
- (6) 前田育徳会『加賀藩史料』3編、清文堂出版、1980年復刻。なお、加賀藩邸や富山藩邸・大聖寺藩邸の位置については、同書編外備考に依った。
- (7) 寛永から慶安期の利常隠居政治の概要については、石野友康「金沢城代とその職務」（『金沢城代と横山家文書の研究』石川県教育委員会金沢城研究調査室、2007年、27頁）。木越隆三「元和～寛文期の金沢城修築について」（『研究紀要金沢城研究』創刊号、2003年、62頁）。因みに、同『隠れた名君 前田利常——加賀百万石の経営手腕——』吉川弘文館、2021年、によれば、慶安期利常の手足となって領国支配に最善を尽くしたのは、津田正忠・葛巻昌俊・横山忠次・奥村栄政・前田貞里・長連頼の6人衆であったという（166～167頁）。なお、慶安期の政治情勢に関しては、木越隆三氏に御教示いただいた。
- (8) 『金沢城総合年表 前編』石川県金沢城調査研究所、2018年、63頁。
- (9) 前田家の子育てと傳・御抱守・御守の成立については、池田、前掲(2)『金沢と加賀藩町場の生活文化』16～19頁に詳しい。なお、同書で、今枝直恒に関しては、綱紀の傳の在職時期を「?～慶安4」としたが、「正保2年～慶安4」と訂正し、同様に、光高の傳の就任時期に関して「天和5年」としたが、元和9年に訂正したい（日置謙『改訂増補 加能郷土辞彙』、北國新聞社、昭和48年、「今枝直恒」の項）。
- (10) 前掲(9)『加能郷土辞彙』「会所」「会所奉行」の項。
- (11) 『加賀藩侍帳 上』金沢市立図書館近世史料館、2017年。
- (12) 『旧宮腰町々年寄役中山家文書目録』金沢市立図書館、1985年、245頁。
- (13) 『金沢城編年史料 近世一』石川県金沢城調査研究所、2019年、312～314頁。
- (14) 『新修小松市史 小松城編』小松市、1999年、159頁。
- (15) 前掲(14)、241頁。
- (16) 前掲(11)。
- (17) 池田、前掲(2)『金沢と加賀藩町場の生活文化』17頁。
- (18) 前掲(5)。

「金谷御広式御鎖口勤方帳」について

袖 吉 正 樹

はじめに

金沢城金谷出丸にあった金谷御殿（金谷御居宅・金谷御屋敷など、居住する主人が代わる度に名称が変わったが、ここでは金谷御殿とする）には、藩主の側室や子女の屋敷、隠居した前藩主や世嗣の御殿として使われていた。その金谷御殿の中に鎖口が設けられ、そこに鎖口番人が置かれ、鎖口通行の際改めがなされていた。本稿では、その鎖口番人の勤め方を具体的に示す史料を紹介するものである。

1 金谷御殿の住人

まず、はじめに金谷御殿にどのような人物が居住していたのか、何例かを見ていくことにする。

5代前田綱紀は、金谷出丸に貞享元年（1684）に5棟あった文庫に古筆・書物を入れるために文庫をもう1棟加えた。また、綱紀の娘豊姫は、貞享4年に生まれ、元禄6年（1693）に金谷出丸に入り、元禄2年に同じく敬姫が、元禄6年には直姫が、それぞれ金谷御殿で誕生している。そのことから、遅くとも元禄初年には藩主子女の居住空間として整備されたものと思われる。

6代吉徳の時は、側室智仙院とその子喜六郎が居住し、真如院（吉徳側室）の子八十五郎も金谷で蟄居の身であった。宝暦の大火で二ノ丸御殿が焼失すると、藩主の仮御殿となった。その後、明和8年（1771）には隠居した10代重教の隠居所、また世子斉敬の居住ともなっている。斉敬は、重教の嫡男で11代治脩の世嗣となる。寛政4年（1792）から金谷御殿に居住したが、寛政7年に早世した。斉敬は、二ノ丸御殿で誕生したあと、金谷御殿で隠居した父と一緒に暮らしていた。

真龍院（斉広正室）が入る前の金谷には、12代斉広の子延之助の居宅であったので、金谷御居宅と呼ばれていたが、天保5年（1834）に14歳で没すると金谷御屋敷と改称した。天保9年真龍院が入ると再び金谷御殿と改めた。弘化2年（1845）に世子慶寧が入ると、松の御殿と金谷御殿の2つの名称で呼ばれた。慶応2年（1866）13代斉泰は隠居して、金谷御殿に移っている。このように、主人が代わる度に名称を変え、改築が繰り返されたのである⁽¹⁾。

なお、享保以降（享保10年から慶応3年まで）の金谷出丸と金谷御殿については「金沢城全域絵図の分類と編年」として、出来事と金谷住居の主人の一覧があるので参照されたい⁽²⁾。

2 金谷御殿の役人

金谷御殿に関わる職制として「諸頭系譜」によると、金谷御膳奉行・金谷奥御納戸奉行、金谷御近習番、二御丸・金谷御広式御用達、金谷御広式御用達、金谷御広式番などの職制が見られる⁽³⁾。

金谷御広式番

金谷御広式番については、享保20年（1735）に萩原覚左衛門他13名が就任している。このことは、前年享保19年6月16日に金谷御広式が出来し、勝丸様（7代宗辰）が金谷に移ったことによるものと思われる。

二御丸・金谷御広式御用達

二御丸・金谷御広式御用達は、元文6年（1741）に小塚雲平（200石）の名が見え、二御丸御広式

御用達と金谷御広式御用達にその区別がなく、御広式御用として、双方の事務を勤めていたようである。その後、文政8年（1825）10月11日に金谷御広式御用達兼帯が指止となっている。なお、「藩国官職通考」では⁽⁴⁾、金谷御広式御用達について、その始まりは一切分からないとし、元文6年に小塚雲平の名が見えるとしている。

二御丸・金谷御広式御用達は、嘉永7年（1854）6月4日に真龍院が二ノ丸へ引移と共にその名目が指止となり、二ノ丸広式御用達となり、金谷御広式御用達は兼帯となる。

文久3年（1863）4月25日に容姫（齊泰正室）が二ノ丸御着輿に付、名目を御守殿二御丸御広式御用達と改称している。

慶応2年4月22日（1866）初姫（13代齊泰娘）が金谷御広式へ引き移りに付、役名も金谷御広式御用達と改名する。

金谷御広式御用達

嘉永7年9月26日に、前田齊泰の子豊之丞（大聖寺13代利行）居住のため金谷御広式の内を改築し、南之御住居と呼ばれ、嘉永7年10月21日に中山義平（190石）他7名が新たに金谷御広式御用達を仰せ付けられている。

慶応2年4月22日多慶若様（15代利嗣）が二御丸御広式へ引き移りに付、役名を二御丸御広式御用達と改名する。

このように、二御丸御広式御用達や金谷御広式御用達は、金谷御殿と同様、主人が代わる度にその名称を変え、存続していった。

金谷御近習番

金谷御近習番は、泰雲公（10代重教）御隠居後の天明5年（1785）11月朔日に、高山弥五郎・野村伝兵衛など19人が任命されている。

金谷奥御納戸奉行・金谷御膳奉行

金谷奥御納戸奉行は、文久3年正月10日（1863）に田辺九兵衛が、金谷御膳奉行には、文久3年3月28日（1863）に奥村冬四郎が就任している。

3 金谷御広式御鎖口番人

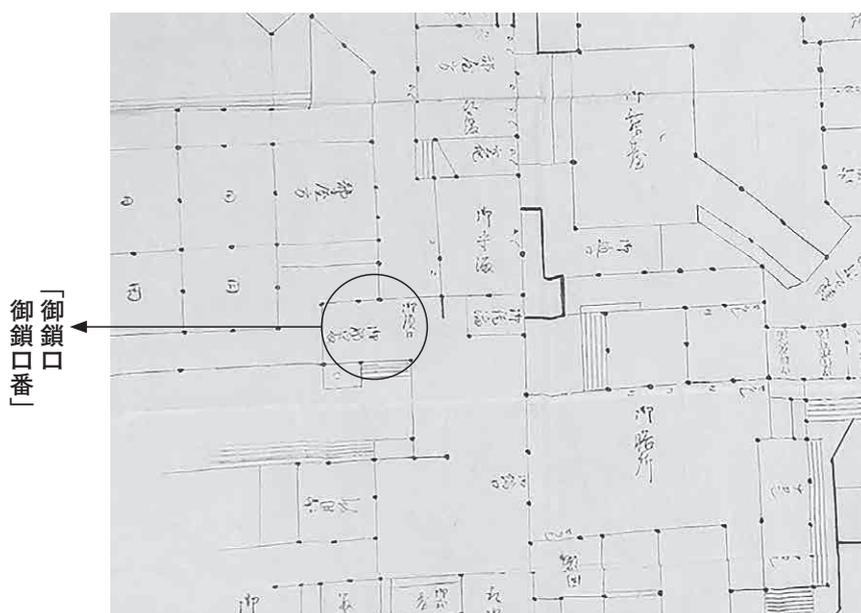
金谷御広式御鎖口は、金谷御殿の奥向に通じる場所に位置し、鎖口番人は、そこを管理したのである。

番人については、享和3年（1803）2月「金谷御広式御鎖口勤方書上」によると⁽⁵⁾、山本喜平以下、黒川平右衛門・児玉八郎・山下順之助・大町宗蔵・吉川半左衛門・浦山十郎兵衛の7名の鎖口番人の名が記されており、当時7人の鎖口番人がいたことがうかがえる。その中で由緒が確認出来た人物に児玉八郎と浦山十郎兵衛がいる⁽⁶⁾。児玉八郎は、寛政9年（1797）5月に金谷御広式御鎖口番加人となり、扶持は切米40俵（文化2年閏8月にも金谷御広式御鎖口番加人となり、その後人多に付御用無之となっている）。浦山十郎兵衛も、享和2年（1802）9月に金谷御広式御鎖口番加人となり、扶持高も40俵である。また、文化4年（1807）の「仁岸宗右衛門遺書」によると⁽⁷⁾、父八郎右衛門の役儀御用の御褒美として、嫡男である宗右衛門が、天明5年（1785）12月定番御歩に召し出され、御切米40俵を拝領し、翌6年2月に金谷御広式御鎖口番となっている。これらの事例からではあるが、他の番人たちも扶持高40俵が扶持され、御用を勤めたものと思われる。

享和3年(1803)と明和9年(1773)の金谷御広式御鎖口勤方定書が残されているが⁽⁸⁾、ここでは享和3年の定書により鎖口番人の主な勤め方を見ていくと、鎖口番人は、基本的には昼夜2人一組でその任に当たり、男女往来時の改め、鎖口開閉及び往来時改めを受ける、出入りする長持や葛籠など御用文通の改め、広式頭・御用達・医師など往来時の改め、御居間廻御用御普請時の縮方、部屋方御普請時における職人や掃除人の縮方見廻り、裕次郎殿(利命・齊広の養子)が二御丸御出の節の先供御用、全性寺・観音院の御護符の受け取り、部屋方火の元の見廻りなどとなっている。以上のように、鎖口番人は、文字通り鎖口を通行する人物や荷物を改める御用を勤めたのである。



(全体)



(部分)

金谷御殿絵図(金沢市立玉川図書館加越能文庫)

絵図には、「観樹院様之時分之御間取」とあり、観樹院は、10代重教の子で齊敬。絵図は、菅原(前田)貞道が文化3年(1806)に書写したものであるが、天明期の御殿の様子を描いたものと思われる。

今回紹介する史料は、「金谷御広式御鎖口勤方帳」であるが、「金谷御広式御鎖口勤方帳」と標題が記されている通り、金谷御広式鎖口の勤め方に関わるものである。その中から、享和3年(1803)と明和9年(1772)の金谷御広式御鎖口勤方を紹介するものである⁽⁹⁾。

なお、表紙に「金谷御広式御鎖口勤方帳 松原」とあり、この史料を記した松原氏について確定は出来ないが、松原弘静(之寿)と思われる⁽¹⁰⁾。松原弘静の由緒を見てみると、文化9年(1812)7月に定番御歩に切米40俵で召し抱えられ、文化13年6月には金谷御広式御鎖口番御横目兼帯となり、その後文政12年(1829)8月に江戸御広式御鎖口番御横目兼帯となる。天保9年(1838)8月真龍院様(12代前田齐広正室)の御国入りの際、道中切の御供御用を勤め、その関係からか天保11年正月に真龍院様附御鎖口番御横目兼帯となっている。このような経歴を持った松原弘静が、役務遂行のために書記したものと思われる。

(表紙)

「金谷御広式御鎖口勤方帳 松原」

史料1 享和3年 金谷御広式御鎖口勤方書上

- 一、御鎖口番昼夜式人充勤番仕、男女往来相改申候
 - 一、御鎖口開閉并往来之義、年寄女中・表使等之内ノ断受相通申候
 - 一、御鎖口出入長持・葛籠等御用之文通、頭御用達之内ノ断受相改相通申候
 - 一、御広式頭・御用達・御医師等、御鎖口往来之義、定番頭ノ押紙面私共へ直ニ相渡置申候、指懸申候義ハ、御広式頭ノ仮押紙面請相通、追而定番頭本紙面与取替申趣ニ御座候
 - 一、御奥為御用御医師等罷通候節、頭御用達断誘引にて相通申候、右頭御用達指支候節ハ、私共御鎖口当番之内より誘引仕候
 - 一、御居間廻御用御普請等御座候節、為御縮方私共之内ノ壱人充相詰罷在申候
 - 一、部屋方御普請ニ付、職人并掃除之者等入候節ハ、三番梁ノ出入仕候ニ付、取次足輕付置、為御用縮方当番之内ノ折々見廻申候
 - 一、夜中御広式懸り下人等、御用ニ而金谷七拾間両御門往来之節ハ、私共受取置候両印札・片印札之内、御用達印章之紙面を以時々相渡、御用相济候得ハ、印札数相改受取、帳面相返申候
 - 一、部屋方又下女等、金谷御門往来之義、年寄女中之通切手を以御門相通候、右通切手之日切ニ御門番より私共江指越候ニ付、相改御用□□□相渡候
(利命 治脩嫡男齐広養子)
 - 一、裕次郎殿二御丸等江御出之節、私共之内兩人宛御先供ニ罷出申候、若御近火ニて裕次郎殿御立退之節者、私共之内四人宛御先供罷出申候、其際之相詰罷在品々御用相勤申候
 - 一、毎月十三日御前様御護符、全性寺江受取罷越申候
 - 一、毎月朔日裕次郎殿御護符、観音院江請取罷越申候
 - 一、毎夕私共之内、取次足輕壱人召連、部屋方火之元見廻り申候
- 右私共勤方先如此御座候
御鎖口以前御定書茂御座候様伝承仕候得共、当時無御座候ニ付、私共誓詞御前書、且先役ノ之伝承を以相勤申候

享和三年二月

山本喜平 判
黒川平右衛門 同
児玉八郎 同
山下順之助 同
大町宗蔵 同
吉川半左衛門 同
浦山十郎兵衛 同

史料2 明和9年 金谷御広式御鎖口勤方書上

金沢表御広式御定書御鎖口番へ被相渡置候処、先年御類焼之砌焼失仕候ニ付、明和九年御定書被渡下候様ニ仕度段、頭中へ相達候勤方□趣大概左之通

一、御鎖口番昼夜式人充勤番、男女出入可相改候事

一、頭中初、御用達御鎖口往来之義、年寄女中并表使御鎖口罷出改を受相通候事

但、毎夜御用相濟御鎖口立申節改有之、御鎖口縮之義見届申趣也、江戸表にてハ毎朝改有之候、尤明日頭衆初、往来前々之通相通候之様口上被申述候事

一、朝六時過御用見斗御鎖口明ケ、夜中年寄女中等改相濟、御用見斗御鎖口立可申事

一、頭中初、御用達・御医師等、御鎖口往来之義、定番頭中押紙面を以相通候事

但、押紙面之外ハ堅ク不相通候事

一、御用并部屋方用事長持・葛籠・大キ成箱之類、時々其品使々之御用、或ハ部屋方用事之趣以、御用達改受御鎖口出入承届相通、其段御番所帳面記置候事

一、封付文箱相改御用通路、或ハ年寄女中初、惣女中宿々之通路之分、頭中ハ被相渡置候通路帳面之通、取次所改を受可相通候事

但、通路帳面ニ無之方到来之文箱ハ、時々御用達改を受相通候、且又風呂敷包等軽キ品ハ無構相通候、此義も品ニ御番人心得可有之也

一、御広式御近火之節、泊御番之御用達申談、当番足輕・小者召連早速御鎖口内へ□□御退立御用意仕、御道具等夫々相仕廻、惣女中又下女相しらへ、御鎖口御歩横目御縮ニ指添可罷出候事

一、部屋方等出火并変事出来候ハ、当番之御用達ならひ御鎖口番御歩横目早速欠入取捌可仕候事

一、頭中被有合之節ハ、指図可有之事

一、御次男様御鎖口内御刀入り不申御定之事、勿論其外刀相通不申御定之事

一、七歳以上之男子御鎖口相通不申御定之事

一、女中宿々之上ケ候小兒・女子・御医師等之様、小兒之分ハ頭中并御用達改次第相達候、女ニても大人之分ハ御用通路ニ押有之外ハ不相通候、格別之趣にて頭中改有之候得ハ、承届御鎖口相通候事

一、御医師御奥へ罷通候節、頭中并御用達之内誘引改有之、御鎖口往来相通候事

但、部屋方病用同断、御用達指支候節ハ、御歩横目誘引罷通候事

一、年寄女中始、御寺詣参之節、御用達改有之御鎖口相通候事

一、年寄女中初、惣女中宿下り宿上り、御用達改承届御鎖口相通候事

一、御奥或ハ部屋方へ諸職人・掃除者等入候節、裏口ハ入取次指添、御鎖口壺人充為御縮方相詰罷在候、部屋方ニ御鎖口当番見廻候事

但、詰切ニ相請候節者、当番之外壺人宛不時出申請相詰候事

右裏口明キ候砌、御用達取捌之所御用有之節、御鎖口番江申談、明立并封前所取捌御用達之封印指越付置候事

付札

此裏口明立并封印之義、流例ニ付来候処、様子有之任之上、以来御用達中之取捌安永三午年三月の相極リ候事、依而朱書加置候也

- 一、御鎖口兼役御横目御庭等之御出之節、御縮御用相勤候事
- 一、御鎖口番人之内壺人充兼役御横目明キ不申様ニ相勤候、御番割振分相勤候事
- 一、御扶持方大工棟梁并棟梁大工之分、御鎖口帯刀不相成候事
- 一、御身鏡餅飴同引候節、御料理人并御台所同心御用達改、誘引御鎖口相通候事
- 一、御追難御用之節、御台所同心壺人右御用相濟候、御鎖口御歩横目又ハ御用達改誘引御鎖口相通候之事

(吉徳側室)

- 一、智仙院殿被上候節ハ、御用達より改右之御鎖口乗用之事
但、御鎖口敷居之内迄昇人御番人ハ見通候、下乗之所見通ニ候事
 - 一、御半下宿の逢ニ来候節、取次所の改有之切手御門辺罷出為致対面候、女吏迄男使之義不相成候事
但、一日ニ一兩度ハ承届、三度不承届趣也
但、右切手御門へ御半下罷越候砌、定小遣壺人指添候御定も有之由申伝之事
 - 一、御鎖口前灯火付候而、又下女出入不相成候、無抛用之節、御用達ハ改を受出入為致候事
- 右安永二年癸巳五月右御鎖口番勤方如此ニ候事

以上

〔註〕

- (1) 『よみがえる金沢城1』(金沢城研究調査室編 2012年)
- (2) 『研究紀要金沢城研究第2号』(金沢城研究調査室編 2004年)
- (3) 「諸頭系譜」(金沢市立玉川図書館近世史料館郷土資料)
- (4) 「藩国官職通」(金沢市立玉川図書館近世史料館加越能文庫)
- (5) 「金谷御広式御鎖口勤方帳」(金沢市立玉川図書館近世史料館郷土資料)
- (6) 「先祖由緒并一類附帳」(「兄玉直次郎」「浦山茂太郎」金沢市立玉川図書館近世史料館加越能文庫)
- (7) 「仁岸家文書」(金沢市立玉川図書館近世史料館郷土資料)
- (8) 前掲(5)
- (9) 前掲(5)
- (10) 前掲(6)「松原弘藏」

金沢城シンポジウム「金沢城調査研究 20 年の歩みとこれから」

一、令和3年10月23日（土）石川県文教会館ホールにおいて、石川県・石川県教育委員会の主催で開催したシンポジウム「金沢城調査研究 20 年の歩みとこれから」の基調講演、および講演1・2、パネルディスカッションの記録である。 *肩書きについては、シンポジウム当時のもの

基調講演 「金沢城調査研究の 20 年」

木越 隆三（前石川県金沢城調査研究所所長）

講演1 「日本の近世城郭と金沢城」

千田 嘉博（奈良大学教授）

講演2 「石垣からみた金沢城跡の魅力—この 20 年とこれからの期待すること—」

北野 博司（東北芸術工科大学教授）

パネルディスカッション「金沢城調査研究 20 年の歩みとこれから」

パネリスト 木越 隆三 千田 嘉博 北野 博司

司会 秋本 和美（フリーアナウンサー）

二、このシンポジウムは、平成14年度より進めてきた金沢城調査研究事業の研究成果を一般県民に広く公開したものである。

三、この記録は、当日配布したパンフレットおよび録音データをもとに、基調講演・講演、パネルディスカッションの内容を収録したものである。

基調講演「金沢城調査研究の 20 年」

木越 隆三（前石川県金沢城調査研究所所長）

今日は三つぐらいのことをお話できればいいかと思っておりますが、金沢城の調査研究 20 年を振り返ると、とにかくいろいろなことをやってきております。皆さんの手元に二つの冊子、「金沢城調査研究 20 年の歩みとこれから」、「調査研究の 20 年」が届いているかと思えます。金沢城調査研究の仕事を、半年ほど離れてみて、客観的に見ますと、改めて本当にいろいろやってきたのだなと思っております。「調査研究の 20 年」をご覧いただければ、いろいろな調査成果を 40 冊の報告書にまとめたことが分かります。

「金沢城調査研究 20 年の歩みとこれから」の表紙には四つの写真が載っています。よく金沢城を見ていらっしゃる方は分かると思いますが、色紙短冊積石垣が下段に載っています。右上には本丸附段の調査の写真が載っています。左上には「御城中壺分碁絵図」が載っています。これは横山隆昭さんがお持ちの絵図です。この絵図の話は後で紹介したいと思っております。



金沢城の調査研究 20 年、たくさんのことをやってきましたが、今日お話しするのはそのごく一部になります。私が特に深く関わった事柄を四つぐらい拾い出してお話します。石垣の構築技術の探求、絵図の分類・編年、総合的な調査研究（全国視点での石垣技術比較、城郭庭園での総合研究）、『金沢城編年史料』の刊行です。総合的な調査研究に関しては、石垣の構築技術について全国的視野で、大坂城や名古屋城、熊本城など全国各地を比較して歩いた研究でしたが、私自身非常に多くのことを学び、さらにその成果を発信もできました。さらに最近では城郭庭園の総合研究も行い、庭園というものに非常に深い関心と興味を持ちました。さらに私の専門は

文献の歴史、古文書や記録を読むということでしたから、『金沢城編年史料』という史料集を刊行できたということも心に深く残っていることです。そういったことを中心に紹介してまいりたいと思います。

1. 金沢城の調査研究の始まり

20年前、研究調査室として調査研究が始まった頃、今でもそうかもしれません、城郭の学術調査を行うための県立の機関というのは極めて少ない状態でした。佐賀県の肥前名護屋城の県立博物館あるいは滋賀県の安土城の調査研究所などがあったのですが、そういう中に金沢城が入ったということです。ただ、その設置目的は、前田家は加賀百万石といわれる大大名ですが、地方の一大名のお城のための調査研究と普及啓発で、これが調査研究所あるいは研究調査室の使命でありました。このような一大名の城跡に限定した研究機関はなかったのです。大体は国の特別史跡や国の法律の保護の下でできたというケースが多いのですが、金沢城の場合、20年前は国の史跡にもなっていない段階でした。そのような中で専門の調査機関をつくったのは本当に英断だったと思います。そして、最初は小さく、文化財課の中の一つの調査室であったものが、その後、北垣（聡一郎）先生をお迎えして、2007年には出先機関として独立しました。県立の調査機関として発展してきたのです。そういう始まりであったということ、あらためて深く感じているところです。

2. 調査研究 20年の歩み

2-1. 金沢城関係絵図の調査、分類・編年

さて、当初20年にわたる立派な事業計画を、平井先生はじめ金沢城の調査研究委員の先生方が知恵を出し合って作っていただきました。第1期10年、第2期10年、合わせて20年間の計画を作りました。第1期の課題は金沢城の移り変わりがどうであったか、そしてその時代ごと、城の構造がどうであったのか、そういったことを研究してきました。第2期は、それに加えて、城と城下町の関係や他の城との関係も調査研究するとうたっていましたが、実は、第1期の課題をこなすだけで多くの時間がかかり、積み残しがあり、さらに深く調べることが次々と出てまいりました。第2期の城下、他の城というところにはなかなか手が付かないまま、第2期も引き続き、金沢城の変遷と構造の調査・研究を進めました。総合的な視点でいろいろな形でこれを深めてゆきま

した。ただ、部分的には城下町の調査研究あるいは金沢城と他の城の比較もできたのではないかと思います。

そういう中で私が主に担当した調査研究として、金沢城関係の絵図が600点ほどあるのですが、その絵図を所蔵機関の方々にお願いして電子データとして取り込み、これをパソコン画面上で分析するというをやってきました。パソコンで多くの写真画像を分析することになってゆきました。これはパソコンの画像技術の発展があったからだと思います。サーバー上でたくさんの大型絵図を見ることができるようになった、そういう情報化の進展という恵まれた環境の中で絵図の比較研究ができたということは大きな推進力だったと思っています。

その一例を幾つか見ていきます。いろいろな金沢城関係の絵図があるのですが、「加州金沢城図」は初期の金沢城の縄張りを想定した絵図です。兵学者などが作成したものです。黒い太い実線で金沢城の縄張りを描いた点の特徴です。そういう中から初期の金沢城の姿を推定する議論など、いろいろ行われるようになりました。



それから、今度は藩の方で作った絵図です。藩の作事所に属する御大工などが作成した絵図がございます。この絵図は江戸時代前期の金沢城を描いているのですが、この絵図のいいところは、よく見ると水色の線が入っています。これは城内に入ってきた辰巳用水の水路を非常に正確に描いているのです。発掘をしてみると、この水路がかなりよく残っているということが分かって、発掘の際にも役に立ちました。藩のお役所の方で、御大工たちが建物あるいは排水路、水路、用水路のメンテナンスや管理をするために精度の高い絵図を使っていたということで、

われわれにとっては大いに役に立った絵図です。

それから、金沢城は何度か火災に遭っていますが、特に1759年（宝暦9年）、江戸中期に、宝暦の大火で金沢城がほとんど燃えるということがありました。その焼失範囲が明確に記載された絵図もありました。それから、近世の城郭絵図というのは、大体いつの時代の絵図かということを絵図自体には書いていないものが多いのです。先ほど紹介したものは、大体のことは推定できるのですが、絵図そのものに、いつ、なぜこの絵図を作ったのかという理由などは書いていない場合が多いのです。そういう中で、加賀八家、つまり前田家の家老をしていた横山さんのお宅に残っていた絵図史料を見させていただき、「御城中壺分碁絵図」という面白い絵図に出会いました。実はこれと同じ図柄の絵図は既に2点ほど成巽閣や御大工をしていた家に残っていました。しかし、これは「御城中壺分碁絵図」というタイトルが面白いのです。「御城中壺分碁絵図」と書いた絵図が出てまいりまして、われわれにとって非常にありがたかったのは、絵図を入れた袋があったのです。この袋の表書き、あるいは裏書きに極めて大事な情報が書いてあったものですから、新聞の方に情報を出しました。2004年の正月の新聞記事に載りました。「二の丸変遷に標準図」という見出しで新聞社は注目しました。確かに二の丸の変遷を知るための標準図でした。同時にわれわれは、これが1830年（文政13年／天保元年）に作られた絵図であると分かったことが非常にうれしかったのです。1830年にできたということがその袋に書いてあったからですが、裏面には色分けの凡例、堀の種類、建物は何色にした、堀は水色にしたといった6種類の凡例が書いてありました。特に表紙に、これは文政13年に作事所の奉行が横山隆章という金沢城代にこれを差し出す、ただし、金沢城の絵図は大きいから2枚にして出せと言われていたのに1枚にして出してしまったということも書いてあります。その後、水樋、水路の部分の記載が足りないということで、改めて天保3年（1832）に水路部分を追加して差し出したということが書いてあるのです。これは天保元年に一度作り、天保3年に追加修正をした、1830年の絵図だということが分かったのです。そこに御殿の部分もあったので、これは1830年の二の丸御殿の姿だと言えることになりました。現在、県が進めている二の丸御殿の復元のための事業に当たっても、二の丸御殿関係で約60点の絵図が残っているのですが、

その年次変化をみると、1830年の御殿の姿の基準になっていったわけです。そういう面でも非常に役に立った絵図です。

ところで、この絵図のことを「壺分碁絵図」と呼んでいますが、この「碁絵図」とは一体何かということにふれておきます。碁絵図とは分間図のことであることが分かりました。江戸時代に、城下町、城郭など、いろいろな場面で分間図が作成されていますが、分間図とは簡単に言えば60分の1の縮尺図のことをいいます。1間の長さを1分に縮尺した図なのです。1間=6尺=60寸=600分で、1間は約1.8m、1分は約3mmです。江戸時代の絵図の世界では、このような壺分が1間の図面を分間図、あるいは壺分測りの図、壺分系と呼んだりします。1間を2分で表した場合は二分測り図、1間を3分で表現すると三分測り図といえます。金沢城では壺分碁絵図の他に三分碁絵図も出てきました。何分碁絵図という碁絵図をこの間の調査で十数点確認することができました。分間図を碁絵図というのはなぜかという、1間の幅を約3mmとし格子状に方眼紙のように線を入れて図面を書いたからで、碁盤目のような格子線を入れた絵図だから「碁図」といったようです。

碁盤目と同じ格子線をもつ絵図が前田育徳会にありました。嘉永3年（1850）の「御城分間御絵図」です。しかし、こちらの絵図は「碁絵図」とは言わず、「分間絵図」と表現されています。横山さんの壺分碁絵図には、実は碁盤の目のような格子はないのです。恐らく城代に出すから碁盤目のある原図は使わずに、図柄の分かりいいものを出したのではないかと思います。ところが、前田育徳会にあった「分間絵図」というのは、これを見てもらうと、本当はもう少し精細な画像であれば碁盤の目の赤い格子の線が見えるはずですが、本当に細かい線がたくさん入っています。10間単位で少し太い赤い線が見えています。本当にこれは方眼紙のような図面なのです。これを見て初めて分間図とはこういうものだと分かりました。横山さんの絵図も本来はこういうものを原図にして作られたのだということなのです。

金沢城では、金沢城の石垣修理、建物修理をするために、江戸幕府に絵図を次々としています。そして、横山さんの家には、もう一つ江戸前期の作事所が描いた建物を色分けした図も残っていました。

2-2. 文献調査

われわれは文献調査の中で^{ほんこく}翻刻、古文書を現在の常用漢字や平仮名に直すという作業をしましたが、最初に取り組んだのがこの「御造営方日並記」という史料です。

2-3. 建造物調査

建造物の調査では、名古屋工業大学の麓先生や京都国立博物館の久保先生らにお願いし、金沢東照宮、今の尾崎神社の調査に取りかかっています。拝殿の天井を見上げたところに八双金具を確認しております。家康をまつた神社なので、葵の御紋が随所に使われています。

本殿にはふつう入れてもらえないのですが、調査のため尾崎神社の本殿の中を特別に見せていただいて、金銅花慰斗型釘隠などを確認し、写真を撮らせていただきました。この花慰斗型釘隠は、調査した久保先生によれば、二条城の内装に使われるものに匹敵するもので、非常に質のよい金具を使っているということでした。恐らく金沢城の御殿などでも、こういったものが使われていたことが類推できます。

2-4. 埋蔵文化財調査

初期の埋蔵文化財調査は、本丸を中心にして、本丸の初期の縄張り、寛永の大火以前の姿を調べるための発掘調査を行いました。石垣の表面を観察する中で石垣のデザインが変わるところを見つけ調査をかけました。初期の石垣の上に寛文期の石垣が載っていることを観察し、この下でどういう施工があったのかというテーマを設け掘ってみたら、直線に入る通路があったことが新しく分かりました。本丸の東ノ丸附段の前の入り口のところです。このように近世初期の石垣調査を本丸で行った結果、文禄元年（1592）の石垣普請の開始から慶長7年（1602）の天守焼失、そして元和の本丸拡張を経て寛永8年（1631）の大火の後、現在見るような金沢城の姿ができたということを解明してまいりました。

2-5. 「石垣の博物館」と石垣の分類・編年

さらに、石垣の構築技術の探求をいろいろな面で展開させてゆきました。その結果、金沢城石垣は、あの広大な城内に約500面の石垣面があり、その実面積は約3万平米、恐らく大半が戸室山からの戸室石ですが、10万個程度の石材が持ち込まれたとい

うことが分かりました。そういった石垣の現況を確認する石垣カルテ、あるいは測量図面の作成なども行いました。石垣カルテ作成ではこの500面の石垣の創建時期や来歴、修理履歴などを丹念に記録していきました。そして、これらをもとに石垣が造られていった経緯を編年にしました。この外、石材を産出した石切丁場での分布調査や確認調査、石引道の調査などによって7期にわたる石垣の分類や編年を進めてきました。金沢城の石垣編年は、発掘調査だけではなく、文献で分かったことまでも検証に用いており総合的で面白いのではないかと考えています。

石垣のスタイルが1期から7期、前期から幕末にかけて七つのスタイルに変わるということが、詳細な石垣観察によって分かってきたわけですが、それが時の藩主、初代利家から、利長・利常・光高・綱紀、重教・治脩・斉広という11代、12代までの藩主の変化に対応し姿を変えながら石垣が変遷していったことが分かりました。その他に石垣が造られた時代に活躍した石垣職人を「穴太」と金沢で呼んでいますが、中には近江坂本出身の「穴太」もいます。そうではない石工たちもいるのですが、穴太家、後藤家、戸波家、正木家など、さまざまな来歴や系譜を持った技術者がこういった石垣の変遷に関わったということが文献を通し知ることができました。これはやはり、金沢ならではの長所であり良さだったのではないかと考えています。



1～4の写真は、金沢城石垣の時代的変遷をわかりやすく示した四つの画面です。文禄・慶長・寛永・寛文とちょうど石垣技術が発展した最初の60年間の石垣の変遷を示しています。自然の石を積み上げた文禄の石垣から、規格化された石材が横目地を通して並ぶという形へと発展していく様子が金沢城内でよく見られます。

それから、戸室石切丁場の分布調査も行っています。石引道が延びていった先にはキゴ山や戸室山、清水村とか田島村たのしまがあります。そこに約1300の採石坑があり、その面積は660haにわたり、群に分けると52あるということでした。

いくつかの場所を選んで確認調査を行いました。少し表面を掃除すれば、石材が今でも残っています。こうした石材は、本当は金沢城に行って役目を果たすべきところ、なぜか理由があって残されてしまった石材です。それらを割ってゆく加工の痕跡は戸室の山で具体的に確認できました。

こんな形で初期の五年あるいは六年間の足跡を画像で振り返ってみました。その間、初代の北垣所長に存分に活躍をしていただきました。われわれの金沢城調査をリードしていただいただけでなく、文化庁の石垣研究会（正式名称：全国城跡等石垣整備調査研究会）のお世話をずっとされてきました。そのこともあり、金沢で2回この全国的な集会が行われています。

また、金沢城調査研究所の所員ほか、専門委員をつとめられた方などが参画し、文化庁が2015年に「石垣整備のてびき」を作成した際、北垣先生を中心に、金沢城の関係者も協力し立派な手引き書ができたのではないかと思います。私もこの「てびき」作成のおりの議論に参加させていただいたことを意義深いことだったと思って、振り返っています。その議論の中で一番話題になったこととして、昭和までの文化財石垣に対する修理、保存の在り方は、傷みが激しく危なくなった石垣はまず解体・修理を優先に考える傾向が強かったのですが、そこから脱却したいと北垣先生が盛んに主張しておりました。われわれもその考え方に共鳴し、この「てびき」を作ったということを思い出し、研究所が今取り組んでいる文化財石垣の保存修理技術の調査研究の先駆けであったと感じております。

3. 総合的な調査研究の推進と課題

3-1. 石垣構築技術の総合調査

さらに、北垣先生の指導のもと、全国的な視点で金沢城の石垣造りの技術を位置付けてみようということで、大坂城はじめ、江戸幕府が行った公儀普請の場で諸大名がどんな形で自らの技術を発揮し、そこからお互いにどういう影響を受けたのかということ調査研究する総合研究を行いました。

大坂城の調査では、大坂城には64の大名が3回

に分けて動員され、3回目の第3期普請では3代目の前田利常が中納言として参加し、将軍家との良き関係を背景に大坂城で責任を果たしたということ、そして64の大名の中では、やはり西国大名の石垣技術が優れており、前田氏や東国の大名は簡単に言えば下手くそだったのですが、ここで刺激を受けて、国元で、西国大名から学んだ技術を3代利常の時代に金沢城の石垣造りに生かしていった、ということが分かってきました。大坂城の石垣普請の4分の1の面積は前田家が担当していますが、城の北側の比較的低い石垣を担当しているのではないかと思います。目立つ高い石垣は黒田家、池田家、あるいは加藤清正、石垣上手の細川家なんかもいますが、そういう西国大名が担当しています。それでも前田家は、玉造口の枳形門のところ、門脇の高石垣を造っています。このとき学んだ技術が、金沢城でどう生かされたかということについては、金沢城の滝川さんが重要な所見を示しています。この大坂城の普請のための図面も全国にたくさんあり、それらを全国の博物館へ行って見ることもできました。

金沢城調査研究の第一期に、前田家の石垣、金沢城の石垣編年というものができた結果、幕末まで金沢城では1～7期という形で変遷があったのですが、他の大名、例えば、加藤家は早く改易されていますが、細川家など、多くの大名は江戸時代の中期以降、専門職人もいなくなったりして石垣技術に明らかな衰退傾向が見られ、町石工などに委託する方向に転換していきました。しかし、前田家では専門の石垣技術者をずっと抱えながら、衰退傾向にはありながらもⅡ期、Ⅲ期と、つまり江戸初期、最初の70～80年の発展期が衰退した後も、石垣造りの技術を変換してゆきます。庭園周りで造られる装飾性豊かな石垣の代表、色紙短冊積石垣はこのⅡ期に出てくるのです。これはⅠ期すなわち初期の石垣ではないのです。庭園の石垣あるいは見せる石垣、そういったものが金沢では顕著に見られる、それは「衰退」と見るのではなく、Ⅱ期として新しい転換があると見た方がいいのではないかとということで、二つ目の石垣技術のピークを考えました。

江戸時代の後期になると、後期は後期で、前田家では、Ⅱ期やⅠ期にあった素晴らしい石垣を復活しようと熱心に努力する後藤彦三郎という石垣職人が出てきます。Ⅰ期やⅡ期のいいところを江戸後期に再現しようと調査研究するグループが出てきます。石垣ルネサンスと言っていいかもしれませんが、そ

ういう穴生たちも出てきますので、これはこれで新たな動きと見ていきたいと考えて、三つ目の波だと捉えています。

I期は石垣技術の草創発展期で、どこの城でも目覚ましい発展があり、20m近い高石垣が扇の勾配をつくってできました。その衰退の後、II期、III期が17世紀の後半あるいは18世紀、19世紀に起こってくるのではないかとことです。

20年間を振り返って感じているのは、好奇心を刺激する調査研究は、われわれ自身やっけて楽しいですし、成果をまとめ、皆さんにご紹介するときも共感を持って迎えられる、ということです。本日のようなシンポジウムなどに、大勢の方が集まっていたいただきましたが、これが大きな支えになりました。

20年間取り組んできたが、まだまだ解明できなくて、今後もっと究明しなければならないと思っている点をここで三つ挙げてみます。1点目は、石垣について、あの大きな巨石をどうやって運んで、あんな高い石垣に積み上げたのかというのは、20年調査に関わってきたのですが、やはりまだ謎は解けていないという感じがします。しかもなぜ200年以上もそれらが健在であったのか、歪みながらも、なぜ構造体として安定を保持してきたのか、ということも本当のところはまだ解明できていないのではないかと思います。今後さらに深めていきたいと考えています。

2点目は、玉泉院丸の色紙短冊積は誰が命じたのだろうかということです。5代綱紀の頃といわれるのですが、綱紀が本当にこの石垣を造れと言ったのか、ということも謎であります。誰かそうアドバイスした人がいたのか、担当した技術者が助言することはないのだろうかと思いつつ、いまだに謎だと思っています。

3点目は、大坂城ほか金沢城のような大きな地方大名の城でも、1年くらいで城石垣を建設するとき、作業場を分担してやらねばならず、分担して一斉に工事することを割普請といいますが、担当現場が細切れにされているのに、仕上がったものは統一性がきちんとあるわけです。短い工期の中で、なぜあれだけ統一性あるものができるのか。黒田家と細川家は隣同士で作業していますが、黒田と細川は非常に仲の悪い大名であることで知られています。仲の悪い大名が隣同士で一つのまとまった仕事できたのは、なぜか。非常に不可解であり、解明したいという気持ちを持たせてくれる課題であります。

3-2. 『金沢城編年史料』の刊行

それから、『金沢城編年史料』の刊行にも取り組んでまいりました。戦前に刊行された『加賀藩史料』という、すごくいい史料集があるのですが、信頼できる史料を補充し、新しく確認できた史料も入れて、もっと信頼できる編年体の近世史料集を刊行するというを目的に調査研究を進めました。

文献調査をすすめる中で、近世の城とは一体何なのだろうかということも感じております。近世の最初はともかく、寛永以降、大坂の陣以降はずっと平和な時代が続きます。平和な時代のお城の役割とは一体何なのかということも最近考えています。とくに二の丸御殿など、御殿という空間は近世の政治や文化、経済にどういう影響を与えたのかということも掘り下げたいという気持ちがあるのですが、一つの答えとして、近世城郭の御殿空間とは、政治文化の拠点ではないかと考えています。近世初頭には天守・櫓が御殿と共にそのような役割を果たしたのだと思いますが、江戸時代の寛文期以降になると、政治文化の拠点として、御殿の役割が大きくなったのではないかと考えています。

政治文化の拠点とは何かというと、領民の畏敬や憧憬が集まる場所ではないかと思つきます。そのことを代表する事象として、江戸前期は城内の山里丸、数寄屋丸で茶会をしています。金沢城の初頭、前田利家が奥州の大名の南部氏の家老、北信愛を招いたとき、やはり数寄屋で茶会を開き能楽を見せ、金石の港で地引き綱をやり、そして鷹狩りにも誘いました。鷹狩り・茶会・能楽、この3点は政治文化のシンボルとして、とても大事なものでした。

とくに、二の丸御殿が再建された翌年、文化8年(1811)閏2月に、祝賀のための規式能・慰み能を12代の斉広が行っています。6日間と5日間、合わせて11日間にわたる能楽のビッグイベントでした。城内の表舞台の白洲の上に屋根を造って仮設の閲覧場を造り、献金した豪商や百姓代表、町人代表など1万人を招いて、たくさん寄付をしてくれた領民のため労をねぎらうお能を行い、藩主も自らシテとして舞いました。

その後、斉広は能楽にとっても自信を持ち、文化8年から10年(1811～13)まで、江戸の本郷邸で1年に35回、国元に帰って金沢城の奥の能舞台で1年半で65回、能楽を見せました。知り合いの大名を招き、また、金沢城の65回の能楽のときは家臣団に順番を組ませて見せているのです。そして、能

楽文化が城下町金沢ではこの時期に広まったということです。金沢のまちでは、植木職人が仕事をしながら謡を口ずさむので「空から謡が降ってくる」といわれるようになった状況は、殿様が能楽に狂っていたということもあって、この時期に形づくられたともいわれています。そんなことで、課題もありますが、非常に楽しい調査研究を20年間やらせていただきました。

4. 結び

最後のまとめは、古文書や発掘された遺物・遺構、そして石垣も歴史史料、石垣は歴史の証人であるということです。石垣は、金沢城跡で展開した300年の歴史、明治以降の150年の歴史を見ていたのです。そういう目で、石垣あるいは史跡文化財の保存・活用に今後も邁進していくべきだと思っています。ということで、駆け足でしたが、本日の講演を終わりたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

講演 1 「日本の近世城郭と金沢城」

千田 嘉博（奈良大学教授）

千田でございます。前所長の木越先生のお話を伺いながら、金沢城の調査研究が今日のような形で進展している、あるいは、今日、全国のお城ファンが「金沢城いいわ～」と言って見学できているのは、調査研究所が城跡の調査・研究・整備に非常に大きな役割を果たしてこられたからだ、改めて実感しました。私の方は「日本の近世城郭と金沢城」ということで引き続いてお話をさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。



1. 荒子城について

さて、この金沢城を築きましたのは、皆さんもよくご存じの前田家です。初代藩主、前田利家ということになりますが、まずは利家の城からたどっていききたいと思います。愛知県の尾張、現在の名古屋を中心とした地域の地図を出しておりますが、前田家

は荒子城という城を拠点にした地侍の一人でありました。現在は名古屋市内ということで市街地化が非常に進んでおり、残念ながら荒子城の姿がそのまま残っているということではありません。

そこで、1946年にアメリカ軍が撮影した垂直航空写真によると、少し森が残っているのですが、荒子観音の南西辺りが現在も荒子城の跡だと伝えられており、古い明治の地籍図、その他いろいろ勘案すると、荒子城はどうやら四角い形で堀を巡らせていた城であつたらしい、城というよりは館やかたじろというか、土塁も巡らせていたと思いますので、館かんじょうと城の中間的な形態、館城あるいは館城と言っているタイプのものではあつたと思います。

ですから、利家が生まれた頃はまさにこういった館城が前田家の本拠であつて、その生涯を重ねる中で、最終的には日本の近世城郭を代表する金沢城にまで達しているということになります。本当によくここから金沢城までたどり着いたなということで、改めて城の姿をたどっていくと、この戦国の時代、大きく世の中が変化して城も変わっていったということを、まさに前田家の城、利家の城が象徴していると思います。

この荒子城は館城の形態ということで、こんなものから始まったのかと驚かれた方もおられるかと思えます。しかし、戦国時代、信長が活躍しはじめる頃の城というのは、基本的に尾張地方では館城でありました。信長が生まれた勝幡城と荒子城は非常によく似ています。文字の史料では「城」と出てくるのですが、当時の戦国の尾張の城の実態はこういうものであつたというのが見えてきます。そんなことで見てみますと、実は荒子城というのは、信長の生まれた勝幡城と規模的にもそれほど変わらない、尾張にあつたこういった館城の中では、荒子城というのはかなり大型の館城であつて、前田家が有力な武士の一人であつたことが城の形からもよく分かります。

こういった四角い館あるいは館城が当時の城だということを今見てまいったわけですが、今ご覧いただいているのは、当時の愛知県の尾張地区、尾張の国の政治的な中心であつた清須城の復元をしてみた図です。実はこの清須城という、当時守護がいた城も四角い館型の巨大な館城でした。その周りに集まっている尾張の武家の首都、政治的中心のそこに集まっている武士たちも四角い館をつくっているということで、こういったものが集まって当時の一番大

きな城下町が出来上がっていたということになります。現在、この清須へ参りますと、立派な天守が建っていますが、この天守のイメージで信長の頃を考えると、大きく間違ってしまうということが生じるわけです。



城館が立ち並んだ姿は石川県内でもほぼ同じ状況にあったと考えられます。今ご覧いただいているのは、石川県内の七尾にあった能登の国の守護所の様子を、明治時代の古い地図である地籍図で復元したものです。ちょうどこの図の中央です。少し黒っぽくなっている、畠ですから一段高くなっているということが分かります。これが恐らく能登の国の守護所、能登畠山の本拠であります。それに守護代所が脇に付いています。二つの大きな館があって恐らく周りにはたくさんの武家屋敷が立ち並んでいたものと考えられます。先ほどご覧いただいた清須城と、地形など若干違いはありますが、基本的には同じ構造をしていたことが分かります。

ですから、こういったものがまさに戦国のスタンダードな城の姿であったということになります。当時の館の中については残念ながら荒子城につきましては詳しい建物の記録あるいは発掘の成果は今のところありません。しかし、先ほどご覧いただいた信長の生まれた勝幡城については、当時の公家が尋ねていて、そのときの断片的ではありますが、文字の記録などを見ると、都にあった武士の館と見劣りしない非常に立派な館であったと記されています。今ご覧いただいているのは京都にあった武家の館、細川管領邸です。上杉本洛中洛外図屏風が描いている様子です。主殿と呼んでいるのは対面儀式のための建物です。会所と呼んでいるのは宴会や文芸活動を行う建物です。そして武家の館らしい馬屋があります。主殿と広場あるいは会所と庭園、こういった姿

が当時の武家の典型的な上級クラスの屋敷の造り方でした。恐らく荒子城もこれに準ずるような、これほど立派であったかどうかはいろいろ検討しなければいけません。このような構成を取っていたのであろうということが見えてきます。いずれにしても、本当に今私たちが見ている金沢城とは雲泥の差と言ったらいいでしょうか、全く違う、こういった非常に中世的、室町的な世界から、前田の城造りというのが展開していったことが分かります。

2. 府中城について

その後、利家は信長に怒られたり、仕官したりということで出世を果たしていきますが、利家と城ということで言うと、利家にとっても一つ思い出深いものになったであろうと思うのは府中城です。そこを府中三人衆の一人として任されたということが一つ転機になっていったと思います。近年、福井県の府中城で発掘が行われ、石垣が見つかっています。この石垣は新しいものだと発掘の所見ではいわれていますが、実は非常に興味深く、隅石が「重ね積み」になっています。長い、短い、長い、短いと「算木積み」にしない、やや古手のそういった技術で作られている様子が見つかっています。確かに全体としては後の時代に積み直されているものと思いますが、断片的に前田の時代のものも残っていると思っております。この重ね積みなのですが、例えば京都府にある福知山城は明智光秀が1579年（天正7年）から築いた城ということで、現在、戦後に鉄筋コンクリートで復元した天守が建っていますが、この天守を建てる時に石垣などの調査を行っています。

この天守台の石垣ですが、非常に興味深いことに、真ん中のところに切れ目、増築の痕跡があります。右側が先あって左側が後に付け足した石垣だということで、現在の天守にするときに元の石垣を使いながら大きくしている、天守台を大型化したということが分かっています。右側の石垣に関しては明智光秀時代に遡るものです。これを見ていただきますと、長い、短いと互い違いに積む算木積みではなく、同じような長さの石を重ねて積んでいる重ね積みという特徴的な積み石の処理をしており、先ほどの府中城に見られたような石積みというのはやや古めかしい技術で出来上がっていったというのが見えてまいります。

3. 七尾城について

その後の利家ということになります。ここで石川県との関わりがはっきり出てくるわけです。能登の国を任されて七尾城に城主として入っていくということになります。七尾城も国の史跡になっておりますが、山の上の城あるいは麓の城下に至るまでの遺構が大変よく残っています。本丸と長屋敷の間の空堀を撮った写真を見ると、これもとんでもない空堀です。ものすごいものです。七尾城につきましては能登の畠山氏の時代からすごい城が造られていて、上杉謙信の猛攻を何年にもわたってはねのけるという、戦国の城攻め中の城攻め、大激戦を戦った城です。その一方で、七尾城内の桜馬場の西端には、大変大きな石垣を積んだ枡形があります。これは復元してみると、手前側は残念ながら崩落してしまっていますが、元々は石垣が外へ出っ張っていた形の枡形を造っていたことが分かります。これは外枡形といい、信長の安土城などに認められる枡形の造り方です。こういったものを七尾城の中心部の随所に見ることができます。

こういった巨石、大型石材を使った石垣に関しては、能登畠山氏ではなく利家の時代あるいは利家以降に前田氏の手によって改修が進められた石垣と考えるのが、石垣の積み方などから見てもよいと思います。前田の城と言えば七尾城となりますが、県内で前田の城造りを伝える、さらに言えば金沢城以前の前田の城造りを考える手がかりとしては能登の七尾城があるということになるかと思えます。

航空レーザー測量図を基に山の上を見てみると、本当に険しい山の地形をうまく巧みに使いながら非常に大きな城を造っていたのが分かります。さらに山の上だけではなく、山麓のところを見てみると、元々は畠山氏の館にさかのぼるであろうといったところを含めて、幾つかの大型の館があって、そこを中心に城下側に直線道路が伸びています。その周辺には武家屋敷や町家、職人などが住んでいたところがあって、それらを最終的に、これは利家の時代に整備が進められていると思えますが、惣構えの堀で守っています。後に金沢城の城下町も二重の惣構えで守られていくということになります。それに先立つ戦国末のこういった非常に整った城下町遺構が今も良好に残っているということになります。

これらの七尾の城下町ですが、文書の史料、文字史料などから明らかに金沢城と並行する時期にも、最終的には七尾の城下町がまだ使われているという

ことが分かるので、やはり前田の城を考えると、七尾の持っている歴史的意味は非常に大きいと思います。従来、畠山の城下町、前田以前という形での評価がもっぱら大きかったと思いますが、その辺は近年の調査成果ではっきりと修正が必要であろうと思います。

この七尾城がいかに大きいか、同じ縮尺で各地の城あるいは金沢城と比較してみました。もちろん金沢城は城だけです。本来、城下町を入れれば七尾の城下町を圧倒する大きさではあるのですが、例えば愛知県の小牧山城は城下町までその範囲を入れています。それと比べても石川県の七尾城は、もちろん山が大きいというものもあるのですが、面積的には非常に巨大だということが分かります。

それから、中国地方で戦国時代に5カ国を治めた毛利元就あるいは毛利輝元の本拠であった広島県の吉田郡山城と比べても、その周りに城下町はもちろんさらに広がりますが、城の規模ということでも七尾城は実は戦国の城として屈指の大きさだったということが、こうやって比較してみると分かります。信長の安土城の中心部よりも大きいです。石川県は能登の国と加賀の国がくっついてできた県ですから、能登の国を代表する城である七尾城をどのようにこれから調査して整備して生かしていくかは、能登においてはまさに七尾城が金沢城に相当する役割を果たす城だと言ったいと思います。これからの石川県行政の大変大きな課題だと思います。

さて、利家の城をたどっていきます。利家は豊臣秀吉を支えて豊臣政権の中核のメンバーとして活躍していきます。秀吉が肥前名護屋城を造って、文禄・慶長の役で朝鮮半島あるいは唐へ出兵するのだから、対外侵略戦争を引き起こすわけですが、それにもやむを得ず従って肥前名護屋に陣を築くことになりました。現在整備が進んでいる佐賀県の肥前名護屋城の本丸の様子で言うと、木が生えている奥の辺りが天守が建っていたところです。この肥前名護屋には全国から豊臣政権に加わっている大名が陣をつくって、あたかもここが臨時の首都のような形になりました。肥前名護屋城から非常に近い良い場所にやはり政権を支える中核の武将ということで利家が陣をつくっています。

ここについても、佐賀県の肥前名護屋城の博物館によって調査が行われています。本丸より一段下の大きなところにお庭や数寄屋のおもてなし空間が設

けられていたとことが発掘で分かっています。山の崖面を利用して、背後の山を築山に見立てており、手前に池があって、池とセットになった大型建物群です。それから、それと関係したいろいろな付属建物群が立ち並びます。現在の金沢城で申しますと、玉泉院丸庭園の原型になるようなものがこの肥前名護屋の利家陣で認められているということです。

そして、肥前名護屋の戦いと同時並行で豊臣政権の本拠の城としては、京都の伏見にあった伏見城があります。それも一度は指月にあつて、慶長地震を経て木幡山の伏見城に移りました。今ご紹介したいのは後半の木幡山伏見城の表道に面して建てられていた前田利家の屋敷です。ここは残念ながら完全に市街地化が進んでいるので、利家の屋敷の跡が見られるわけではありませんが、何年か前に幸いと言うべきか、(今は破壊されたので不幸にしてというべきか)、発掘される機会がありました。その様子を見ると、現在でもこれほどの範囲は、普通の方のおうちとしては超巨大、邸宅と言ってもいい広さなのですが、利家邸に比べるとこれは本当にごく一部の小さい敷地で、残念ながら広大な前田利家の屋敷の全貌を明らかにすることはできませんでしたが、幸い利家が暮らしたであろう御殿の一部を発掘で見つけられました。

これをご覧いただきますと非常に面白いことが分かります。実は見えている地面そのものが人工的な盛り土です。全面的に土地改良を行って地盤を突き固めて建物を建てる基礎工事を行っています。そして柱を建てる場所は、礎石、石の基礎を置いて柱を建てていたと考えられるのですが、その場所だけではなく、その周りで、大きいところでは2m四方ぐらいのものすごく大きな穴を掘っています。そして石混じりで突き固めて、大きな石も下に置いておいて、そしてその上に礎石を据え付けるという大変丁寧な工事をしていたことが分かりました。

調査をされた方々にお伺いすると、城が移ったのも慶長地震による被害を受けてということになりますので、慶長地震に学んで最先端の耐震構造にしていたのです。なんととっても基礎を固めないとはやはり駄目だということで、そういったことをしっかり行って御殿を建てていたのです。前田利家が城造りがうまかったというだけではなく、未来の災害にもどう備えていくかをしっかり考えて、城を、この場合は御殿ですが、建てていたということが大変よく分かります。

4. 金沢城について

そして、その先にいよいよ金沢城ということになります。金沢城は木越先生のお話にもありましたが、さまざまな変遷があった後、調査研究所ができて、その調査研究を基礎にして今日では見違えるように当時の城がよみがえって、全国のお城ファンも、どこに行きたいといったら、金沢城に行きたいと言う魅力的な城になりました。

以前から残っていた石川門、そして近年の整備の中で、橋爪門や五十間長屋は初期に整備が進みました。玉泉院丸庭園は最初拝見したときは体育館で、この下にお庭が埋まっているのは絵図で分かるけれども、それがどうなるかしらとと思っていたら、いまや見事な兼六園に先立つ城内庭園によみがえりました。それから河北門、この嚴重な桁形の構造。そして最近では鼠多門です。こういった素晴らしい一連の建物が復元されて、まさに金沢城の姿を体感できるようになりました。



しかし、金沢城というのは利家の時代以降、火災などを契機にして大きく造り替えられているのも特徴で、いろいろな絵図を基に利家時代の金沢城はどんなふうになっていたのだろうかというのを今回考えてみたのですが、いろいろな記録を見ていくと、本丸というのはどうやら二つに分かれていたと考えた方がよいだろうと思います。奥の空間と表の空間はどちらも本丸としておりますが、奥の建物が建っている方が詰丸というところで、こういった本丸を二重にするというのは例えば信長の安土城、秀吉の大坂城もそうなっていましたので、恐らく金沢城も、信長や秀吉の城造りと準じるような形で、当時の天下人の城の格式の詰丸を持つ城という形で中心部ができていたに違いない、そして詰丸に所属する

形で天守も建っていたということになろうかと思えます。

そこから大手門の方に向けて、本来は幾つもの外柵形、連続するかぎの手状になった石垣が連なっていく、これも信長、秀吉の城造りをさらに発展させた城と見ることができますが、そういう形で成立していたのではないかと、絵図などを現地地形に合わせながら考えていくと評価できるのではないかと思います。ですから、利家時代の金沢城というのはまさに天下人クラスの城であって、当時の最先端の城郭として出来上がっていた。今日、加藤清正が造った熊本城は非常に嚴重な城として知られていますが、その熊本城に勝るとも劣らない城であったとイメージできるのではないかと思います。

金沢城は、本丸ではなく二の丸を中心とした城へ、江戸時代の間に変わっていています。これは全国の城の中でも非常に特筆すべき金沢城の特徴であり、火災などを契機として、まさにそれぞれの時代に城を最適化していくという動きがずっと行われているのです。そういう形で変遷していった、二の丸を中心とした城としての形が今日私たちが見ている金沢城であるということになります。

そういった中で、例えば近年復元された橋爪門は見事で、手前に柵形があって奥に櫓門が建つという構造です。そして、この櫓門を通過すると今は長いスロープが続いています。これはまだできていないときの計画図面から持ってきていますが、橋爪門の前に柵形があって、そして二の丸へ入っていく。柵形というのは戦国末、近世の城に普遍的に用いられた城の出入り口の守り方で、その姿をしっかり橋爪門は取っていた、そしてその二の丸に入っていくようにしているということが分かります。これはその計画どおり立体復元されました。今日も午前中に見てきたのですが、見事にその様子を体感することができます。

しかし、本来の橋爪門というのは、今、復元されている橋爪門の前の柵形、これを仮に柵形のAとしておきますが、橋爪門を越えた後にもう一つの柵形があって、それで90度曲がって二の丸の中に入っていくという二連続の柵形で、その中央に橋爪門が建っているという、非常に驚くべき複雑な構造を取っていました。これは二の丸が城の中心になったということと恐らくリンクすることだと思いますが、お殿様のところに行くのはこういう嚴重な構成を取っていたということになります。これは、実は

江戸城の二の丸、將軍の城と極めてよく似ています。現代の皇居ですが、下乗門を越えてその後ろに銅門です。もう一つの柵形空間があって、外から入ってきて柵形を越えて、次の柵形を越えて、二の丸へ入るという二連続柵形になっていたのです。これを見ると、実は金沢城の二の丸の橋爪門を中心とした二重の柵形、二連続柵形というのは將軍の城に匹敵する、將軍の城の二の丸の入り方と同格の非常に格式の高い門の形を造っていたということになるわけです。金沢城はすごい城です。

ですから、そういった目で改めて見ていただきますと、金沢城の二の丸の二連続柵形は江戸城に匹敵する柵形構造だったのですが、橋爪門の復元は、現状では半分の復元で、後ろ半分ができていません。これは非常に残念です。このままでは、金沢城の本来の姿、二の丸が非常に格式の高い造りをしていたということ、現地で理解するのはまず無理です。まっすぐスロープが続いているからです。金沢城の歴史と魅力をもっと来ていただいた方に実感していただくために、これは今後の課題です。今まさに二の丸御殿を近未来に復元していこうという大きなプロジェクトが動いているので、単に建物を建てる、復元するというだけでなく、まさに御殿に行くための歴史的な道筋についてもしっかり復元していくことで、金沢城の魅力あるいは歴史のすごさを多くの方に体感していただけるようになると思います。橋爪門柵形の完全復元は金沢城にとってきわめて重要な課題です。

5. 建物復元の難しさ

金沢城でいろいろな櫓門、2階がある門が復元されているのですが、ここには謎が実はあるのです。復元してもらったから分かる謎です。橋爪門を門扉が閉まった状態でご覧いただいて、大戸の真正面に立って屋根軒裏を見上げると、非常に複雑な構造になっているのですが、この2階の櫓の壁というのは1階の柱の位置よりも外へわずかに張り出しているのがわかります。しかし張り出しているところにアールを描いた材でふさいでいて、金沢城の場合はせっかくの石落としがまったく機能していないのです。

ところが、一般の城はどうか、大阪府の大坂城の大手門を見ると、櫓門の2階をわずかに張り出して生み出したわずかなスリット状の部分がぱかっと開くようになっていて石落としになっています。門扉

が閉まっていると、敵が攻めてきたときに門扉を開けろと言って門扉の前で頑張るわけです。そうすると、2階の櫓の床下の張り出し部分を開けて真上からひどい目に遭わせるというのが石落としでありまして、城を守るためには、当然そうしておきたいというものです。

二条城を見ると、大戸をつっている鏡柱という大きな太い柱から真上に2階の壁が来るのではなく、わずかに張り出して壁を造っていて、隙間を発生させて、そこが石落としになり、門扉の真ん前にいる人が真上から攻撃をされてひどい目に遭わせようとしています。实景の写真で見ると、この部分が石落としだということになります。上に上って2階の櫓から見ると、パカパカと床が端っこだけ開くようになっていて、この真下の人を攻撃できるというものです。

京都の二条城の東大手門は、幸い江戸時代の建物が残っています。精密図面が近年の解体修理に伴って作られています。こういう形で門の正面、大戸の上のところはずっと石落としになっている、ところが、江戸時代の絵図を見ると石落としが省略されてしまっていて、実は絵図だけを見ていると石落としがあるかないかは分からないというか、絵図を見る限り石落としはなかったように思ってしまうのだけれど、実際にはあるという、非常に難しい問題が発生しています。だから、絵図だけを見ていると見誤ってしまうということになるわけです。

それでは、金沢城ではどうだったのか。実は今の石川門にも石落としはありません。しかし、これは既に研究で明らかになっているのですが、石落としがあったであろうところだけ非常に幅の狭い板で床をふさいでいます。床板の長さがそこだけ全然違うのです。これはどう考えても元々石落としがあって、その後、もう石落としをやめたので、その床を短い板でふさいで人が落ちこまないようにしているという変遷がありそうです。

ですから、今復元した櫓門に石落としがないというのは、幕末期の建物を復元するというで正しい復元が行われているのですが、最初がどうだったのかと考えると、元々金沢城のそれぞれの櫓門には石落としがあった時代が長い間あったのだと見るのがよいだろうと思います。しかし、このことが復元していただいたことで分かってくると、今まで思ってもみなかった新しいことがいろいろと課題として挙がってきます。

金沢城は、こういった建物の石落としの変遷、あったものがなくなっていくのの考えると、最終的には櫓門の大戸の上の石落としを廃止していることは間違いなさそうである、ですから、厳重に守っているように見えて、実はそこはもうやめておきましたという、厳重に守っているように見える感じの城にしておけばいいやということが起きていたことが分かってくるのです。アールを描いた材で張り出し部分をきれいにするというのは他の城では全く見ることができないので、実質的な防御の機能よりも、美しさ、技巧的であること、技術力重視です。これも非常に特異です。全国の城は幕末まで石落としの機能を維持することが一般的でした。幕末にいくら建て替えたって石落としは省きませんという城がほぼ99.9%だったのに対して、金沢城はそれはもうやめておこう、要らないよと考えた。これは、石垣が実質的なものから、石垣としてはそこまでの必要はないのだけれども見せる石垣、よりきれいな芸術的な技巧的な石垣に変わっていくこととも符号していると思われます。

近世の初め、徹底した守りを固めた利家の時代の金沢城、それから変遷をしていく中で、幕末期の金沢城というのは一体どういう役割を果たしていたのか、あるいは石垣、櫓、門が前田家の武士たち、あるいは金沢の人々にとってどんな意味を持っていたのか。今までは、なにせ橋爪門も河北門も鼠多門もありませんでしたから、石落としのことをこうやって細かく考えることはできなかったのですが、これまでの研究のご成果によって、精密な復元がされたことによって見えてきた新しい発見です。木越前所長からお話がありましたように、まさに学術的な総合的な研究の帰結でああった金沢城の整備や復元が出来上がっているわけですが、それで終わりということではなく、こういう復元ができてくると、そこから金沢城からどのように歴史を見ていくかという新たな研究課題、新たな発見が次々出てきます。こういった復元は新たな研究の始まりであると言っ

6. 全ての人に開く金沢城の整備

さて、金沢城の整備ですが、これは全国の城の整備の中で最も優れたものだと私は考えています。それは一つには先ほど以来お話がありました、学術的な成果です。調査研究所のしっかりとした総合的な調査研究に基づいた精密な復元がされている

ということです。これは本当に素晴らしいことです。そのためには調査研究所という組織が絶対に必要です。総合的な研究をしっかりとしていく機関があるからこそ、これができているのです。

もう一つは、スロープ、リフト、エレベーターを復元建物の中にしっかり整備してくださっているということです。皆さん、思い返してください。昭和の頃の城の整備というのは、城はバリアの塊であると、だから、階段があるのは当たり前、行けないところがあるのも当たり前といわれてきました。直立二足歩行ができて元気な人が城へ行って歴史を体感できればいいのだと、ずっとそう考えられてきたのです。

しかし、この金沢城の整備も、まさに市民・県民・国民の税金を原資として行われているわけで、この金沢城が素晴らしければ素晴らしいほど、金沢城が意味する歴史が素晴らしいものであればあるほど、それが健常者でなければ見られないのだと、健常者だけが見られるようにしておけばいいのだと考えることが、私たちのこの時代の城跡の整備で正しいかということ、それは、はっきりと間違いといわなくてはなりません。この嚴重なバリアの塊であった城、金沢城をいかにバリアをなくして全ての人に開いていくか、これこそが私たちの時代の城跡の整備が進んでいく方向だと思います。

実は日本の中では金沢城のような整備を徹底しているところは他にはありません。断トツ、群を抜いています。素晴らしいことです。しかし、世界を見てください。例えばイギリスのハーレフ城は、とんでもない階段を上った先に城壁があって、ようやくたどり着けるという城でした。しかし、それでは駄目だということで今あらゆる段差をなくしたスロープで堀を越えて城を見に行けるようになりました。だから、もうバリアはありません。

ハンガリーのブダ城は世界遺産です。ドナウ川の素晴らしい文化的景観を見るためにはブダ城の城壁の上に行かなければいけない。そこは城壁の上なので、階段を上ってようやく行ける場所だったのですが、その城壁を壊さずに、エレベーターを付けることでみんなが行けるようになりました。エレベーターの色も工夫して目立たない茶色い色を塗っています。

ドイツのアーレンブライトシュタインは、ライン川とモーゼル川の合流点にある、ヨーロッパ屈指の近代要塞、五稜郭のお化けみたいなものです。だか

ら、バリア中のバリアです。しかし、ここではフランス軍の爆撃によって城壁が壊されたところをわざと修復せず、壊れたところを利用して、元の城壁を戻すのではなく、エレベーターを設置することで、複雑な要塞の上の階、下の階、地下階に及んでいる要塞をみんなが見られるようにしています。

7. まとめ

このように見ていくと、実は石川県が日本で率先して進めてきていただいた、金沢城を全ての人に開いていくという整備は、まさに世界でこれから進んでいこうとしている城跡のあるべき整備を日本で先進的に示している素晴らしい整備だといえます。

これまでと違った私たちの時代の英知を示す城跡を整備していく、その姿が金沢城にあるのです。これからも、今日お話ししてきた調査研究の成果をしっかりと踏まえた整備と、この素晴らしい金沢城を世界の人、あらゆる人に開いていこうという整備を続けていきたいと思います。

講演 2「石垣からみた金沢城跡の魅力—この 20 年とこれからの期待すること—」

北野 博司（東北芸術工科大学教授）

皆さんこんにちは。昨日山形から参りました。私は元々石川県の職員でした。山形に行って、今年で 21 年目になります。金沢城調査研究所ができたのは、私が山形へ行ってからなのですが、この 20 年も、こちらの専門委員会の委員として、先ほどの木越先生のお話のいろいろなプロジェクトに関わらせていただいて、自分自身が勉強してきた、金沢城の研究で、自分の研究が育まれてきたみたいな思いがあるものですから、半分は内輪かなと思っています。



1. 史跡金沢城跡の保存と活用の現状

今ほどの千田先生のお話はとても情熱的で感動的で、金沢城は素晴らしい、全国誰もが金沢城に行き

たいという話だったのですが、本当かなというところから話を始めていきたいと思います。千田先生とは、熊本城はじめ弘前城など、全国各地のお城の委員会でご一緒させていただくのですが、千田先生はお話もうまいし、いわゆる良識派です。私はいつも千田先生に怒られてばかりで、意見が対立することが多いのです。今日は別にその恨みを晴らしたいわけではないのですが、千田先生が言ったことも皆さん、本当かなと思って聞いていただければと思います。

今インターネットで旅行サイトがたくさんあって、それをつらつらと2カ月ほど前に検索してみました。じゃらん、刀剣ワールド、トリップアドバイザーなどなど。観光客の方は、旅行するときに、結構こういう旅行サイトを見ながら行き先を決めているのです。行ってみたい日本のお城、行ってよかった全国のお城のランキングを見ると、金沢城は10位以内ぐらいに何とかかんとか入ってくるのですが、後半のものを見ていくと、ほとんど20位の圏内にも入っていないのです。これが旅行サイトの実態です。

ただ一方で、入場者数を見ると、無料で入った人も入れた数では、全国1位なのです。それはお城だけではなく、城下町都市金沢の魅力であったり、兼六園と一体となった県の観光戦略というものが大きく貢献しています。いざお城に限って見ると、実はこういう実態もあるということは、一つ知っておいてほしいと思います。

今、平成から令和になって、相変わらず空前のお城ブームだといわれています。平成のお城ブームの火付け役になった『日本100名城』、『続日本100名城』、どこに行ってもこういうガイドブックを持ったり、スタンプ帳を持って回っておられる方がいます。最近では御城印集め、皆さんの中でもお城を回るときに御城印を集めている方がいらっしゃると思いますが、そういうのはやっていますし、健康ブームで、山城ですとたくさんのハイカーが山を歩いています。若い女性だけではないですが、「城ガール」という名前もよく聞きます。

また、大学生や20代ぐらいの若い子たちの間で、コスプレの撮影会が行われています。これはお城で、いろいろなアニメのキャラクターの格好をして撮影会をします。私も自分のところの学生に連れられて、分けの分からない衣装を着せられて恥ずかしながらやってみると、意外とこれが面白いのです。仮装の

欲求を満たしてくれるような、わくわくする体験をしました。

そして、各地のお城のイケメン武将隊の追っかけの子たちもたくさんいると聞いています。それと、お城のテレビ番組が最近多いです。ほとんど毎日やっているのではないかと思います。「プラタモリ」は、木越さんが名を上げた番組で、私も大ファンです。「日本最強の城スペシャル」は千田先生がレギュラーですかね。よく仕組みが分かりませんが。あと「歴史探偵」とか、毎週、毎日のようにお目にかかります。アニメ、ゲーム、いろいろなスマホアプリとか。落語家の春風亭昇太さんが登場するテレビ番組もあります。

また、天空の城ブームというのもあります。アニメの「天空の城ラピュタ」や世界遺産のマチュピチュが火付け役になりました。日本では兵庫県朝来市の竹田城があります。これは地元のアマチュアカメラマンの方の1枚の写真が人気に火を付けたといわれています。その後、お隣の福井県の大野城であるとか、備中松山城とか、こういう写真家の活躍によってお城の魅力が再発見されています。

金沢城も多分写真コンテストなどをやっていると思うのですが、大勢の人の目でお城の魅力というもの、石垣の魅力というものが再発見されていくということも今起こっていることです。

先ほど『100名城』『続100名城』がお城ブームの火付け役と紹介しましたが、この選定委員を見ると、見覚えがある人の名前が入っています。千田先生も非常に深く関わっています。金沢城は観光客には思ったほど人気ではないというのは、まだまだ千田先生の努力が足りないとは思っていますので、今日を機にこれから金沢城の宣伝をぜひしてほしいところです。

年末の恒例になっている「お城 EXPO」というイベントも、実は千田先生が深く関わっていらっしゃるということは、調べていくとすぐ分かります。今年もこのコロナ禍で開催が決まっていますが、2019年も既にコロナの感染者がだいぶ増えていた時期でしたが、それでも2万人ぐらいが集まるという、お城の関係のファンの集いというのか、本当に大きなイベントです。こんなところも最近のお城人気を端的に表しています。

また、城郭ライターとわれわれは呼んでいますが、旅行雑誌やいろいろな本でお城の魅力を分かりやすく、かつ、専門的に伝える方々がいます。専門の研

究者だけではなく、一般の方々、お城に興味がある方々の間をつなぐ人たちです。私たちが講演会に行くと、聞きにこられていて非常に勉強熱心です。私は石垣の研究、矢穴の研究で、石切場の遺跡を結構歩くのですが、私以上に何倍も現場を知っている方などに出会って、逆に教えてもらうこともあります。こんな方の活躍が近年華々しいです。

城跡は多様な年齢層、男女を問わず人気を集めているという話をしてきました。観光的な人気は先ほどの旅行サイトに反映されているのですが、本当のお城の魅力や素晴らしさというのは、私はそれだけでは測りきれないと思っています。これから私が考える日本最強の城の条件をお話ししていきます。

1番目は、お城の資源が良好に残されているかです。土台が良くないとなかなか人を引きつけることはできません。人間も一緒ですが。金沢城は、お城の石垣を中心とした遺構があります。重要文化財の建物もありますし、整備で復元された建物もあって、城郭としての一つの歴史空間を構成するような、そこへ行けばかつての近世城郭がイメージできるような場所です。周りから見たときの景観、お城から城下を見たときの眺望が、良好に残っています。あとは、お城そのものの遺跡の価値を高めていくような、歴史資料、文献、絵図、先ほど木越前所長がご紹介されたようなものが良好に残っています。

2番目は、そのような価値や魅力がきちんと表に出てきているのかということです。これは、金沢城調査研究所の20年の調査研究によって、埋もれていた資料が顕在化してきて、歴史的な意味合いがきちんと明らかにされてきた、それが金沢城の大きな特徴でもあります。かつ、史跡公園、都市公園として、安心・安全・快適に見学できる整備がなされているのか。これも金沢城は、県の公園緑地課を中心として、こういう公園ができてきています。

3番目は、お城の保存や調査研究も含めてですけれども、整備事業、活用事業、そういうものがそれぞれ役割分担して今県が進めているわけですが、連携がうまくいって円滑に事業が進んでいるかどうかです。研究所という組織が調査研究部分では、非常に大きな役割を果たしている。これは本当に全国に誇ることです。それ以外の観光や公園部署ときちんと連携しているか。こういうことが組織・体制の観点になります。

4番目は、ここは今日皆さんにも一緒に考えてほしいのだけれども、金沢城を取り巻く石川県民、金

沢市民、そういう地域の人々の愛情と誇りを育むような保存管理や活用ができていっているのかどうか。こういうところがうまくいっているお城は、非常に魅力的に感じます。

「日本最強の城」というのは、先ほど触れたテレビ番組のタイトルなのですが、私が日本最強の城を考えると、これらを含んで三つの観点から見ます。後世にお城の価値や魅力を伝えていくための資源がきちんと保存していけているのか。その資源は、現代社会にきちんと生かされているのか。「保存」と「活用」の土台となる「調査研究」がしっかり進められているのか。文化財マネジメントというのですが、文化財、歴史的な遺産をきちんと保全、保護していくには、この三つがバランスよく実行されているのかが重要です。この観点で、金沢城調査研究所の20年、石川県が管理する金沢城の20年を、振り返ってみたいと思っています。

2. 全国に誇る石垣の遺産

2-1. 史跡金沢城跡の石垣

私の役割は、全国的に見た金沢城の石垣の特徴、魅力をお話しするということです。

金沢城の石垣は、よく「石垣の博物館」と言われます。それはどんな意味なのか、これからお話ししていきたいと思っています。

「石垣の博物館」といわれる特徴を四つ挙げます。1点目は、金沢城に来れば、石垣の全ての役割を見られることです。石垣の役割の一つは切土、盛土して作った、郭の擁壁としての機能があります。また、建造物の土台としての石垣があります。五十間長屋や菱櫓、橋爪門の櫓台などには石垣がそびえ立っています。このような実用的な機能のほかに庭園のような芸術を楽しむ空間に築かれる石垣があります。徳川の世になって平和な時代が来ると石垣は戦争のための防衛施設から次第に美的価値が重視されるようになっていきます。金沢城はこのような近世城郭の石垣の機能の変化や多様な石垣の役割が理解できるところが「石垣の博物館」といえる1点目になります。

2点目は、文禄期から慶長、その後の寛永、寛文とずっとお城を整備・修理してきた中で、江戸時代を通した石垣技術、石垣意匠が見られることです。石垣を通して築城の過程や加賀藩の歴史、近世の石垣技術の変遷をたどることができます。木越さんが発展期や変質期など、3期に区分しましたが、そう

いうことも石垣の年代や技術の違いから分かってくるのです。

これは例えば熊本城などでは、清正時代の築城期の石垣の見事さというものに、目を見張ります。あるいは安土城に行くと、信長時代の野面積みの石垣の意匠の素晴らしさに圧倒されます。名古屋城では、慶長10年代に、公儀普請で全国の大名が来て石垣を造りましたので、その時期の全国の多様な技術、多様性みたいなものを知ることができます。それぞれ素晴らしいのですが、金沢は金沢で、一つの大名家の中の石垣技術の変遷や、その背景にある政治や経済や文化の歴史を読み取ることができます。

3点目は、「アートな石垣」や「数奇の石垣」と呼ばれる、実用的な機能を超えた美的・芸術的な石垣が多々見られることです。金沢城で何が全国と比較して一番かという、これが誰もが認める一押しのところ。特に5代綱紀の時期に、多くのアートな石垣が造られているので、俗に寛文石垣とわれわれは呼んでいます。

こういう石垣は全国どこにもないですね。やはり金沢に来て、郭の地形や建物との関係、庭との関係を見ないと、なぜそこにそういう石垣が造られたかということは分からない。金沢城に来た多くの観光客は、玉泉院丸庭園をみて、石垣回廊の案内板を読んで、なるほどなと理解しています。

お城ファンのブログをネットで見ていくと、大体金沢城の写真はアートな石垣を紹介しています。よく皆さん勉強していて、私を取り立てて言うまでもなく、多分今日お聞きになっている皆さんも、そういうポイント、ポイントはご存じで、写真を見ただけでああ、あそこだとすぐイメージできると思うのです。県体育館の裏で誰にも知られず、ひっそりと眠っていた石垣が、この20年間でよくここまで定着したなというのが、率直な印象です。

アートな石垣というのは、ただ見ているだけで、人間の美というものの感性を刺激してくれます。その前でずっと見ていられる。美術館で絵や彫刻を見ているような感覚です。意外と城跡の石垣というのを美として鑑賞する人は少ないのかもしれないけれども、人間の想像力を高めてくれるのです。私は美術館という言い方をしてもいいと思うので、今回「石垣の総合博物館」というタイトルにしました。総合という修飾詞を付けただけじゃないと言われるかもしれませんが、括弧してミュージアムと書きました。ミュージアムというのは、博物館も美術館も含

んだ概念ですから、単なる石垣の博物館ではなく、こういう総合博物館あるいはミュージアムという言いの方が、実態にふさわしいのではないかと思います。

4点目は、石垣の来歴や技術を解説した史料が残されていることです。後藤家文書は、江戸後期の加賀藩の穴太が研究し書き留めた金沢城の来歴書や石垣技術書から成っています。この20年の中で研究所の皆さんが、これらの史料をきちんと翻刻して分かりやすくわれわれの前に示してくれました。石垣でも御殿でも何でもそうなのですが、ストーリー、物語があると、われわれは理解できるし、記憶に残っていくのです。こういう作業にこの20年、研究所が取り組まれたということに、敬意を表したいと思います。

調査研究によって、石垣それぞれの価値、意味が付与されていきました。当然石垣そのものは、20年以上前からあるのだけれども、それを研究しないと、これが歴史的にどんな意味を持っていて、金沢城にとってどんな価値があるのかということが分かりません。それをきちんと研究して、私たちにも分かるようにしてくれました。そして活用事業や整備事業によって、この魅力が顕在化されて、分かりやすくなっています。本当にこの20年で認知度がアップしたことに、自分もそういう研究に関わりながら、改めてびっくりしているのが、正直なところ。

あと金沢城でよく刻印が取り上げられます。みんな大きくて目立ちます。大坂城や名古屋城のような公儀普請のお城へ行くと、それぞれの大名が担当したところに刻印が打たれていますが、前田家の所は数・種類が多くて見ごたえがあります。

刻印というのは、芸術的な感性を刺激するという部分があると思います。私が今勤めているのは芸術大学なので、普段から美術やデザインを学ぶ学生たちを相手にしています。そもそも刻印そのものが元々「記号」で、例えばとんかちみたいなものや折れた松葉、鳥、植物、花などをシンボライズしたものであって、その時点で一つのアートなのですが、それが寄り集まっているのです。みているだけで楽しい。

石垣という構造物そのものも、多様な石を組み合わせて造形した作品です。我々の祖先のホモサピエンスは、生まれたときからアートを志していたといわれるのですが、石垣の前に立って黙って見ていると、訴えかけてくるものを感じませんか。刻印は生

まれたときからアーティストだと書きましたが、これをもっともっと金沢城の魅力としてPRしたらいいのではないかと考えています。

あの刻印Tシャツはどうなった？ということで、緑化フェアのときか大河ドラマのときに、金沢城の刻印Tシャツが売り出されて、私も買ったのですが、改めて家のタンスを見たらいつの間にかなくなっていて、着ないうちにどこに行ったか分からなくなりました。売っていたら買って帰ろうと思うのですが、どなたかそういう関係の仕事をしていたら、もっともっといろいろなバージョンを復活させてほしいと思います。

二十何年前に名古屋城に行ったときに、KKRホテル名古屋に泊ったら、そのの浴衣が刻印浴衣だったのです。ちょっと緑っぽい浴衣で、あまりにもうれしくて、帰りがけにくれませんかと言ったら、駄目ですと言われました。金沢に帰ってからもしぶとく電話して、そうしたら作っているところに問い合わせてくださいと言われて、1回は電話したのだけれども、その後うやむやになっていまだに手に入っていません。今でもこの浴衣を使っていてくれれば、また行ったら、今度は何とか粘ってみたいと思います。

刻印というのは、本当に見ているだけでも楽しいです。しかしその背後には石垣造りに携わった人々の組織や施工分担など金沢城の歴史を考える重要な情報を秘めているんです。

ご覧いただいているのは、大坂城の刻印です。寛永5年(1628)に作られた南外堀の石垣です。先ほど木越さんが最後にお話ししていましたが、各大名家が分担して積んだのに、なぜか横目地がきれいに通っていますよね。たかだか幅1間2尺8寸や1間5尺7寸とか、3石ぐらいしか積んでいない大名家もあるのに、どうしてきれいに横目地が通るのか。そういう疑問がありました。この辺も実は当時の史料を読んでいくと、一斉に横並びになって、待ったりせかしたりしながら、常にどこかの藩が先行しないように、大名組の組頭の奉行がきちんと指示していたそうです。

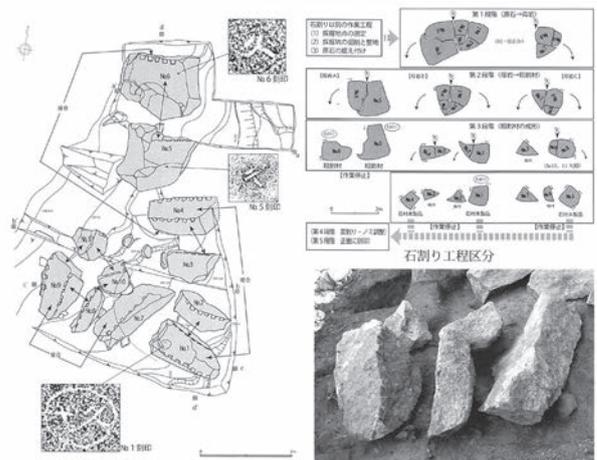
私自身がお城研究を始めたのは、金沢城の五十間長屋の石垣解体調査を、今研究所にいる滝川さんたちと一緒にやったのがきっかけでした。20年ぐらい前に、初代所長の北垣先生が書かれた『石垣普請』という本がありました。それを当時、もうぼろぼろになるまで読んだ記憶があります。今も何とかペー

ジはつながっていますけれども、そういう先代の研究所の皆さんの研究の蓄積があって、自分も今あるし、これからも次の世代に伝えるように、もっともっとうちの研究を発展させていきたいなと思っています。

いよいよ金沢城のアーテナ石垣を見ていきたいのですが、これは玉泉院丸の色紙短冊積石垣です。これは2002年、体育館がまだあったか、ちょうど壊されたぐらいの時の写真です。私がお城に関わる前、埋文センターの先輩に連れていってもらって見たときに、まだもっとうっそうとしていたと思うのですが、びっくりして、ずっとぼーっと口を開けて見ていたような気がします。今や金沢城のアーテナ石垣の代表選手です。

金沢城の石垣は戸室石を使っています。戸室石は安山岩で、赤、青、中間色、色のバラエティが結構あります。二つの代表的な色を中心に、色合いの妙で魅せるという特質を持っていたのです。花崗岩が金沢の石材だったら、またこういうアーテナ石垣の見せ方は違ったと思います。この戸室石は、加工石には割といい石なのです。平刃の工具で削りやすい部分もあるので、そういう石材の特質をうまく使って、庭園文化、こういう数奇の空間をお城の中にたくさんつくっていく。そういう前田家の城造りとマッチして、造り上げたものがこのアーテナ石垣です。

ですから、色ということも非常に大事なのですが、ご覧いただいているのは2011年ぐらいの玉泉院丸庭園の借景の石垣ですが、これが今どきになっているかという、こういうふうな色合いになっています。毎日皆さんが見ていらっしゃる、10年間でこのようにいつ変化したのかというのは分からないと思うのですが、私たちのように、2~3カ月、



1年に1回ぐらい来ると、「あれっ」と思うのです。ただ洗浄すればいいというのではなく、長期的に色の価値をどうやって伝えていくかということは、まず原因をきちんと調査するというところから始めないといけません。

私の娘が行っていたゼミの先生が山形の蔵王の樹氷を研究している方で、ちょうど退職したばかりなのですが、一昨日、私の研究室に、蔵王の山頂に昔あった測候所に石垣があったので見てほしいと来たときに、ブラックカーボンの話をされました。実は蔵王も、温暖化によって樹氷の範囲がどんどん狭くなってきて、ブラックカーボンで汚染されてきたりしているのです。温暖化の原因の一つですし、北極圏までブラックカーボンが飛んでいって、大体東アジア起源のブラックカーボンだといわれています。石炭をたいている頃は石炭だったのですが、今はほとんど排気ガスなどです。ちょうど冬型が緩んだ気圧配置になったときに、中国の華北平原からやってくるそうです。この金沢とか北陸以南の方がすごくひどいということです。

大坂城の外堀の写真を見ても、20年ぐらいかけて水面が下がったのですが、かつて水面下だったところは全然汚れていないので、色合いが違うのが分かります。今われわれが見ている石垣の色というのは、江戸時代の侍たちが見ていた石垣の色とは全然違うのです。これから金沢城でも整備の中で、石垣の色の保全ということに取り組まれると思います。

2-2. 史跡金沢城跡の調査研究

金沢城のどこかすごいかというと、先ほどの物がいいということが1番目で、2番目はこれまでの調査研究の蓄積です。これは木越先生の話のとおりなので、あまり繰り返しません、私が一番大きな刺激を受けたのが、「城郭石垣の技術と組織」という研究プロジェクトです。金沢城の石垣編年から始まり、大坂城を中心として、全国の大名家たちがどうやって公儀普請という巨大なプロジェクトを実行していったのか、その組織、公儀普請で培われた技術がどうやって各地の居城に拡散していったのか、各地の居城の石垣を変えていくのか。そんなことを総合的に研究したプロジェクトになります。石垣研究者の間でこれはバイブルになって、皆さん参照しています。

次にあげたのが、後藤家文書の研究、全国に残っている秘伝書、公儀の穴太の家に伝わった秘伝書が、

各地の大名家の穴太に伝えられていったときに書き写された秘伝書の研究が総合的になされています。私もこの1～2年でようやくこの10年前の研究を改めて学ばせてもらっていて、やっているときはそこまでこの研究のすごさというのは分からなかったのですが、最近2～3本論文を書きながら、なんとすごいことを、お二人の前所長はやってきたのかということ、改めて気付かされた所でした。

そして、『よみがえる金沢城』という本があります。専門的な研究成果の質を落とすことなく、一般の方々にビジュアルに示す本として編纂されました。これも私は常に横に置いて見えています。これは皆さんお持ちの方は多いと思います。難しい論文を読むよりは、ここに正確にそのエクスが紹介されているので、こちらを参照していただくといいかなと思います。

2-3. 石垣の保存管理

これが金沢城のすごいところの3点目になるのですが、意外と知られていない石垣の保存管理という面です。これは先ほど土台がいいという話をしましたが、いくら土台が良くても管理をきちんとしていかないと、後世に伝えていけません。今まで全国のお城というのは、石垣が壊れれば、簡単に修理していました。昭和30年代の天守築造ブーム、あるいは平成に入ってからふるさと創生などでお城の復元建造物がたくさん造られていく中で、本物の石垣が随分壊されてきました。石垣は文化財というのは今は当たり前なのですが、私が初めて金沢城の調査に携わった1998年の五十間長屋の石垣解体の頃は、なぜ石垣の調査をしなければいけないのかを県の文化財課の上司に説明しなければいけないという時代だったのです。今は、解体するときには調査するのが当たり前なのですが、その当時はまだ当たり前ではなかったのです。石垣は解体して、土木工事として積み上げればいいのか、文化財としての意識がまだまだ希薄な時代でした。

ですから、長い間、各地の石垣というのは、保存も考えずに修理され、崩れそうな石垣もほったらかしで公園として整備・活用されてきたのですが、ようやくこの災害が多い時代、あるいは都市の安全・安心があらゆるところで要求される時代になって、保存管理をしっかりとやらなければいけないという要請が高まってきました。

そのために、防災ということも最近盛んにいわれ

るのですが、この石垣の保存管理をどうやっていったらいいのか。歴史の証拠としての本物をできる限りオリジナルに残していきたい。一方で、防災という観点から人の安全を考えたときには、やはり傷んだものは修理して安全にしなければいけない。構造物として安定するようにしなければいけない。

そのときに何をやらなければいけないのか、基礎調査としてどんなことが必要なのかということに真剣に取り組んだのが、この金沢城調査研究所です。2016年に、1冊目の研究報告書『金沢城跡石垣保存実態報告書Ⅰ』が出ました。一昨日、文化庁の防災の調査官が、金沢城の三十間長屋の建造物の修理を見に来たときに、石垣も見えていったのだそうです。昨日、文化庁の調査官からメールが来て、感動しましたと。金沢城の保存管理の取り組みは全国の最先端で、文化庁が目指していく一つの理想的な姿に近いものがあるというメッセージをわざわざ頂きました。それぐらい実は全国のトップランナーとして走っているのです。これは皆さんにぜひ知っておいてほしいです。地道な活動・研究なので、ほとんど表に出てくることがないのです。

どんなことをやっているかということ、石垣カルテと健康診断です。まずは、古文書や絵図を読み解いて、過去、どこの石垣が崩れたのかを調べています。また、現状の石垣を目視で観察して、どういうところに変状があるのか、これは触ったり、舐めたりはしませんけれども、本当に五感を使って、変状を探っていきます。人間の健康診断で言えば、人間ドックみたいなものです。地下探査をやって、ボーリングをして土を取って、土質試験をしたり、レーダー探査といって、ある波長の音波を流して、その反射を見て土の質を見たり、電気を流したり、表面波探査といって、振動を与えて、振動波の跳ね返りで地下の土質を見たり、あとこれも人間と一緒にすけれども、内視鏡カメラを石の隙間から入れて、裏の栗石の密度を見たりします。赤外線画像は石垣の表面の温度を端的に表すので、背面に水分が多くて、盛り土が崩れやすいところは石垣の温度が低い、地下水が出ているところは温度が低いということが分かります。また、詳細な測量によって、この10年で石垣が零点何ミリ変形したか、そういう細かい変化もしっかり把握していく。こういうことをやってきているのです。

段彩図では、測量したデータを解析すると、どこがはらんでいるかを視覚的に見るできるので

す。今までのような経験と勘でここを直せばいいとか、ここは俺ははらんでいるように見えるけれど、別の人はまあこれでも大丈夫じゃないかと言うというのではなく、なるべく客観的なデータで変状を示す。これは今ではだいぶ当たり前になってきましたが、こういうことを先駆的にやったのも金沢城になります。

石垣というのは、メタボリックに下腹がぼーんと膨らんでいる石垣もあれば、一見立派な頑丈な石垣に見えるのだけれども、中が結構危ないぞという石垣、石が隙間だらけで危ないのではないかと思うけれども、がんと頑張っている石垣もあるのです。人間と一緒に、見た目だけでは分からないので、人間ドック・健康診断をきちんとやって、カルテで持続的に管理していくというシステムを作っているのが金沢城のすばらしい所です。

3. 石垣研究最前線

私が言いたいのは、保存・活用していく上でも、調査研究というのが常に大事であり、それが更新されてこそ金沢城の魅力や価値がまた高まっていき、それが保存面や活用面に還元されていく、ずっと循環していかなければいけないということなのです。これは金沢城の菱櫓の石垣の立面図です。寛文8年(1668)に、穴生の後藤家3代目の権兵衛が関わった石垣ですが、この石垣の勾配に注目してみます。石垣勾配の研究は、北垣先生がずっと何十年も前からご研究されて、第一人者であります。公儀穴太、あるいは熊本に伝わった秘伝書にあるノリ返し勾配といって、下から1間上がるごとに少しずつ傾斜が変わっていった、上に行くほどソリがつく扇の勾配になるものです。熊本型という言い方もします。

一方金沢では、後藤彦三郎が体系化した、いわゆる後藤流の勾配があるのです。後藤流の勾配は、そりを付けていくやり方も少し違うのですが、もう一つ大きな特徴は、下3分の1が直線だということです。直線で3分の2のところから少しずつ勾配を変えていくのです。なぜこんなものが生まれてきたかというところは、結構謎でした。これは私の仮説なのですが、『石墻書』といわれる、山口県の岩国藩の穴太家に伝わった秘伝書があります。これは公儀穴太、幕府の穴太だった戸波駿河から岩国藩の穴太の湯浅家に伝授された秘伝書になります。この秘伝書の中に、公儀のお城、二条城や江戸城、大坂城の石垣の勾配が1間上がるごとに何尺何寸そりが付く

かということが書いてあるのですが、金沢城の勾配が書いてあるのです。高さ6間の石垣の金沢城の勾配が書いてあります。不思議に思う方も多いと思うのですが、実はこの戸波駿河というのは、幕府から給料をもらっていたけれど、加賀藩からも給料をもらっていたので、加賀藩の石垣造りにも関わっていたはずですが、それが、年代からみて菱櫓の石垣台の可能性が非常に高いのです。

金沢城の6間半の石垣の勾配は、二条城と総ノリの割合は同じですが、二条城よりは少し急な勾配になっています。これを先ほどのところで見ると、左側の二つです。北面と東面とあります。ほぼ重なるのだけでも、現状の勾配はちょっと下半部が膨らんでいます。これは変形かなと私はみているのですが、こうやって見ると、後藤流も公儀穴太のやり方も、下3分の1は直線に見えるのです。彦三郎は菱櫓石垣を金沢城内随一の石垣と讃えているので、私は恐らく、これを測量して、手本に自分の勾配理論を完成させていったと考えています。そうしたことで公儀穴太が関わった石垣は下1/3が直線だろうと認識したのではないかと解釈しています。ただこれも仮説ですから、今後他の石垣で検証していく必要があると思っています。こんなことも金沢城の石垣研究の課題です。

もう一つは、金沢の戸室石切丁場の悉皆的な調査研究がなされてきました。全国でこれほど居城の石切場を丹念に正確に調査された例はありません。そのことによって積み上げた石垣の編年だけではなく、加工の仕方、採石の仕方そのものから、石垣技術の発展を跡付けたという意味で画期的な研究でした。しかし、さらに最近大坂城の石切丁場を見ていくと、実際石を割るのに、石工たちが何人ぐらいがどんなふうにならんで石を割っていたのか。1人でやっていたのか。5人、10人が寄ってたかってやっていたのか。そんなことが分かるようになってきました。

小豆島の石切丁場は、採石途中で、矢穴を掘っているうちにやめてしまったものが、何石もたくさん残っています。その矢穴の掘り方を見ていくと、狭い範囲で4人ぐらいが肩を寄せ合って、スピードを競っているのです。これは大坂城の大名組で工事をやるやり方と一緒にです。並んでやることで、遅れることができないのです。遅れば、自分が下手だと分かるし、勤務評定がありますから、「下」と評価されれば、当然働きが悪いということになるので、こういうシステムで公儀普請をしていたということ

が分かっています。

表1 秘伝書にみる石垣の勾配（1間ごとのノリ）

石垣築様目録				石垣書				
本高さ 6間				金沢城		二条城二ノ丸		
間	高さ (尺)	1間ごとの ノリ	総ノリ (尺)	間	1間ごとの ノリ	総ノリ	1間ごとの ノリ	総ノリ (尺)
0	0.0	0	0	0	0.00	0.00	0.00	0.00
1	6.5	2.4	2.4	1	2.40	2.40	2.80	2.80
2	13.0	2.3	4.7	2	2.30	4.70	2.60	5.40
3	19.5	2.1	6.8	3	2.15	6.85	2.20	7.60
4	26.0	1.8	8.6	4	1.85	8.70	1.75	9.35
5	32.5	1.4	10	5	1.50	10.20	1.20	10.55
6	39.0	0.8	10.8	6	1.10	11.30	0.85	11.40
	6.5	0.40	11.70		0.40	11.70	0.30	11.70

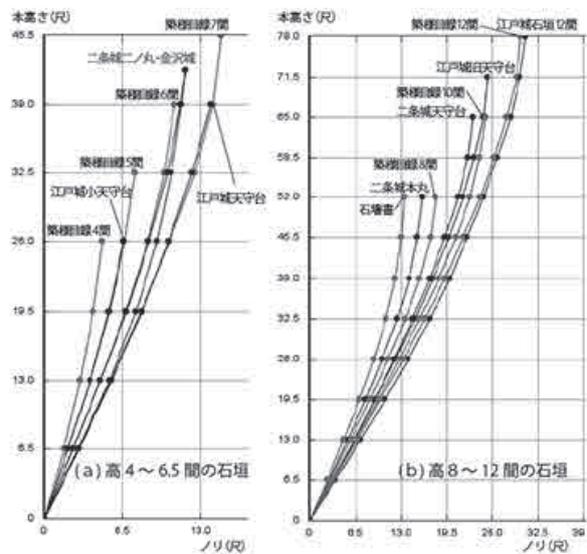


図4 公儀城郭等と石垣築様目録の勾配の比較

では金沢ではどうだったのか。それは、改めて戸室石切丁場の矢穴の開け方を詳細に見ていけば、また分かってくるのではないかと思います。これも一例ですが、このように研究というのは常にその時代時代の観点で、リセットではなく、積み上げていかなければいけない。ですから、金沢城の研究は、まだまだやるのがたくさんあると考えています。

4. おわりに

最後に、これからの20年のことを少しお話しておきます。金沢城は石川県が管理している国の史跡ですが、全国的に多いのは市町村が管理する形です。熊本城は熊本市、小田原城は小田原市、大坂城は大阪市。その中で、県が管理していることの強みと、弱みもあるのではないかと日頃思っています。

強みは、今まで紹介してきたような調査研究と保存管理。それを研究所と公園部局が連携している体

制面です。これは、ますます発展させていってほしいです。

ただ一方で、弱みもとてもあるように感じています。観光面では城跡はよく整備されてきて、たくさんのお客を全国から集めています。今日まさにこの会場にお集まりの県民、市民の皆さんと金沢城の関わり方です。全国を歩いていると、地元の方が非常に熱いお城があります。災害によって石垣が崩れると、涙を流すおじいちゃん、おばあちゃんが出て、熊本城でも地元の若者が悲しみました。それは折にふれてお城に来た時のいろいろな思い、思い出があるからです。家族との思い出がある。彼女との思い出がある。そういう形で、お城と関わることで愛着や誇りが生まれてくるのだけれども、私は金沢市民、石川県民の皆さんにとってどれくらいこの「思い」があるかというのは正直分らないところがあります。城への愛着を育む活用事業の中心となる部署はどこなのか。研究所は多々やっていますし、公園緑地課もやったり、民間の方々も関わっているのだけれども、まだまだこの辺のマネジメントが弱いように普段から感じています。

最近では、各地でNPOや民間企業などがお城の保存、管理、活用に関わるようになってきました。丸投げみたいな、外部委託のようなものもあってそれは困るのですが、やはり市民活動としてのお城の保存活用への関わり方。学校教育でも、最近では探究学習が小中高ときて、高校でも来年から必修化されますので、さまざまな取り組みがなされています。仙台城では、石垣の清掃を市民参加の活動として、3年ほど前からやっています。親子夏休みの石垣探検のような調査活動をしたり、岡山県の津山城では中学生が刻印調査をやったりしています。

私も地元の自治体がやっている、史跡の保全活動に市民らとともに学生を連れていつも参加します。歴史の道なんですけど、樹木が折れたり、水害で河川の護岸が崩れたりします。そのときに、ボランティアでみんな集まってくる。市は現場まで行くマイクロバスとウッドチップにする機械だけ提供します。お昼は地元のおばあちゃんたちがおいしい郷土料理を食べさせてくれます。意をくむ大学の先生や郷土史家がそこで自然学習や歴史のレクチャーをしてくれます。そういう多様な人たちが集まって史跡の保全活動をやっていく。そういうのが自分たちで史跡を守っていくことかなと。そして誇りや愛着をまた地元で生んでいくのです。

石垣清掃では、自衛隊が石垣の除草をしたり、子どもたちがぶら下がってやったりしています。これを見ると危ないと、否定的にすぐ言われる方がいるのだけれども、危ないのは当たり前なのですが、どうやったら安全にできるかということです。できないことを考えるのではなく、できることを考えていく。こんなことも一つの遺跡、お城に対する誇りや愛着を生む事業になります。

最後、突拍子もないことも言ったのですが、ぜひ今までのように学ぶ、見る、聞くという関わり方から、自分が参加する関わり方に転換していけると、金沢城がもっともっと魅力あふれるお城になるのではないかと思って、余計かもしれませんが言わせていただきました。ご清聴ありがとうございました。

パネルディスカッション「金沢城調査研究 20年の歩みとこれから」

パネリスト：

木越 隆三（前石川県金沢城調査研究所所長）

千田 嘉博（奈良大学教授）

北野 博司（東北芸術工科大学教授）

司会：秋本 和美（フリーアナウンサー）

（司会）お時間になりましたので、これから「金沢城調査研究 20年の歩みとこれから」と題して、お話をさせていただきたいと思います。木越先生、20年前、研究所ができたこと自体がすごいことだったというお話がありました。20年間で一番思い出深いことは、どんなことですか。



（木越） 幾つかは、先ほどの講演の中で触れることができたのですが、触れられなかったのは、後半10年の調査研究の中で、総合研究として城郭庭園というテーマを掲げて5年、さらにはいろいろなことも含めて10年近く庭園の研究を行いました。この庭園というのは、果たして研究対象となり得るの

か。私は文献の人間ですから、庭園というのは一つの景観で、景観というのは日々移り変わります。200年前にあった庭の景観は復元することもできないでしょうし、金沢や私の周辺でも、立派なお庭を造っている方がいますが、何年かしたらモデルチェンジというか風景が変わります。

庭園研究というのは、どのように取り組めば歴史研究として面白くなるのかという疑問もあったのですが、玉泉院丸の復元の経験をして、庭景というのは変わるのとは当然だと、そこは観念して、歴史的な検証は絵図や古文書で行い、下の地面の地割りについては発掘調査で、それなりに歴史性は分かるということで、地下を発掘調査などで確認しました。歴史的な史跡としての、あるいは歴史的な文化財としての価値もそこに求めていけばいいという、割り切りもできました。

また一方で、庭景については、どういう庭景が妥当なのかということになりますと、庭に対する思いとか、その庭を通してどういう政治的な交流があったのかという研究が必要になります。その辺はかなり遅れていたのですが、この庭園の総合研究を金沢城でやる中で刺激をもらい、城郭に関わる庭園はたくさんあるんだということが逆に分かりました。発掘によって本丸に二つ庭園があったということが分かったり、現在、県指定庭園になっている尾山神社の庭園も、ひょっとしたら江戸時代から連綿とつながってくるものではないかということが分かりました。

特別名勝の兼六園も、明治以降いろいろな使われ方をしているのです。メーデーの会場になったり、勸業博物館の場になったり、市民憩いの場として、まさに「公園」として使われて、姿をかなり変えてきているのだけれども、一方で12代目の殿様が造った痕跡などが、ピンポイントで見つかるのです。そんなことで、庭園もしっかり見ていけば、歴史学の対象になるということに非常に強く感じました。

庭園の研究に触れさせていただいて、前田家3代利常の娘の富姫が、京都の八条宮家にお嫁入りしました。京都の有名な桂離宮は、日本の庭園文化財の代表ですが、前田家の資金力でできたともいわれています。どんな庭かということで、この研究をきっかけに桂離宮を2回拝見する機会があり、いろいろなことを考えさせられました。

たとえば、桂離宮を造ったとき、前田利常はお金

を出したくても出せない状況にあったということが分かりました。そのとき将軍家光は、贅沢禁止令を出していましたので、八条宮家への資金助成は見送られたようです。利常が亡くなった後、5代綱紀の時代、寛文年間（1661～73）、現在の庭景ができました。

庭園研究をすることで、新しい発見があることに気がきました。庭園というのは、単に庭園があるだけでなく、御殿があるはずで、御殿があって、庭園があって、そこで人と人の交流や出会いがある。藩主がいろいろな方をもてなす。そのもてなしというのは一体何のためかということを見る。御殿や庭園、近世の城郭というのは、中心に庭園や御殿があります。天守・櫓とはまた別の、平和な時代の近世の城郭の役割みたいなものを、庭園と御殿をキーにして研究できるのではないかと、という可能性を感じたのが、庭園の研究でした。

(司会) 玉泉院丸庭園は、とても女性らしいイメージを、その名前からも庭園からも感じるのですが、そこに石垣も短冊の石垣だったりすると、それもまた女性らしいのかなと見たりするのですが、どんなふうに見たらいいでしょうか。

(木越) 戦争における防御のため強い石垣を造り、城も強固なものを造るというのが、城の本来の在り方なのですが、玉泉院丸庭園の周辺の石垣を見ると、どうもそれとは正反対の造り方をしています。城の石垣としてやってはいけないことがあったり、ルールに反したところが多いのです。金沢城の石垣の特性も、実は庭園に由来するということも、いろいろな方々が指摘されています。

城郭の中にある庭園がそういう役割をしているということを見たときに、城というものの新たな役割が見えてくるのではないかと。17世紀、18世紀の世界の城を見ても、例えばフランスではルイ13世、ルイ14世、ルイ15世がいろいろなお城を造っていますが、それはやはり「見せる」というか、国民を引き付けるには何か目立つことをしないと王権を保てないという時代だったのではないかと気がします。

そんな意味で、天守もそうでしょうが、庭園や御殿もそういう面があるのではないかと考えています。幸い日本は、国内で戦争がなかった時代なので、そ

ういう面がより強く出たのではないかということを感じて、平和な時代の城郭庭園や御殿というものの意味を突き詰めるには、金沢城はいいところではないかと考えています。

(千田) 今、木越先生から、玉泉院丸庭園など、調査の成果でいろいろなことが分かってきた、あるいは位置付けができるようになってきたというお話がありました。調査していただく前は、体育館があったり、皆さんも思い出してほしいのですが、木がわしゃわしゃ生えていて、そもそも石垣をちゃんと見るということもできなかったのです。今日も午前中、せっかく金沢に来たからということで、「ちょっとお城行ってくる」と言って見てきました。今日は朝方雨があって、その後行ったときはちょうど晴れていて、全国からの方が皆さん玉泉院丸のお庭を見ておられて、石垣も見ておられたのですが、みんな楽しそうに見ておられるのです。大体記念写真スポットになっています。これは本当にすごいことだと思います。発掘調査しているときに何度か、北野先生にも見せていただきましたけれども、高くて、お庭の池のところからで、色紙短冊積石垣のところはかなりの斜面ではないですか。あんな急斜面のところは発掘調査がすごくしにくいのです。あれ、さらっとおっしゃいましたけれども、もう根性と、木越所長が後ろでいらんではなかったですが、所員の方々の努力と、学術的な研究成果で、今の庭園が復元されているのです。玉泉院丸の庭だけではなく、今教えていただきましたけれども、全国のいろいろな城郭庭園や同時代の庭をしっかりと調べることで、誰が見てもなるほど当時こういうお庭だという、しっかりとした玉泉院丸の庭を今みんなが楽しめるというのは、素晴らしいことだなと思いました。大変なご苦心を頂きながら、一つ一つ、私自身もそうですし、木越所長あるいは北野先生のお話になった成果が、しっかり調査から生み出されてきているというところに、研究所がこの20年間積み重ねてこられた素晴らしい成果があるなということ、今お話をお伺いして改めて実感いたしました。

(司会) 先生は、金沢城は素晴らしいとまとめてくださいましたけれども、日本全国3万以上のお城があると番組でもご紹介なさっていますが、他のお城と比べて金沢城というのはどんなお城ですか。

(千田) 日本を代表する城です。なんといっても今日北野先生からのお話もありましたが、それぞれの時期の石垣が分かってきている。そしてその変遷を調べるときに、例えば発掘調査というのは全部をするわけにはいきませんから、この場所だという大事なところを選んで、これまでも研究所で調査をしてきました。それをどういうふうに城全体に位置付けるかということになると、発掘だけではなく、絵図や文字の史料が大事になります。

しかし、金沢城は今日の木越先生のお話にもありましたように、まず最初の段階で絵図なども網羅的に徹底的に調べていただいて、どの時期の絵図でどうなっていて、こうなっているということがしっかり分かっているのです。これはまだまだ研究するところはあると思いますが、その基礎は分かっています。他の城がみんなそうになっているかという、そうっていないのです。たまたま幾つかの絵図が知られているけれども、その絵図をいつに位置付けるか、これは本当は何を描いているのか、何かを写して描いたものなのかということも、実はなかなか分からないのです。そうすると、発掘で見つかったものをどう位置付けるかということも、間違えてしまったりすることもあるのです。ですから、金沢城が全国でも素晴らしい、近世城郭の代表だというのは、利家以来造られていった金沢城がそもそもすごいということがただでなく、調査研究所のこれまでの20年間の研究成果によって、一つ一つのものが学術的にしっかり位置付けられていて、金沢城が学術的に分かるということがあります。金沢城を基準に全国の城を考えることができるという、とても重要なことになっているのです。

県民の方はもしかしたらそれに気が付いてない方がおられるかもしれませんが、これはすごいことなのです。今日北野先生の話にもありました、石垣をいつ造ったかと、普通は文書に書いてないのです。これよりは古そうだとか、これより新しそうだがぐらまでは分かるのですが、金沢城のようにいつの時期の石垣がこう変遷して、今日最後に勾配の難しい図が出てきたでしょう。ああいうのが、一つ一つ位置付けられているというのは、全国でもまれなのです。ですから、すごい城だと思います。

(司会) 勾配、高さがやはりすごいなと改めて感じたときがあったのですが、近づいて見る高さもやはり高いなという感じがするのです。辰巳櫓の石垣は、

ちょうど北陸放送さんの辺りから見ると、また一段と高く見えたのです。そして、この石垣の上に櫓があって、その上に本丸があると、どんどん想像が膨らんでいくのですが、どんなお城を想像したらいいのだろうかと思ったのです。皆さんはどんなお城を想像されますか。例えば色だったり、形だったり、どうでしょうか。

(北野) 色ですか。また難しい話ですね。先ほど秋本さんがおっしゃった、北陸放送のところから辰巳櫓を見たというのは、すごく私どきとしたのです。当時あそこの石垣を修理した穴生の後藤彦三郎が、同じような方向から出来映えを見たのですが、ちょっと失敗したなということを行っているのです。あそこが、いわゆる視点場で、当時も高い石垣は目立つところに造るということがあったので、すごくいい感性をお持ちだなと思って聞いていました。

(司会) あそこから見ると、やはり城下にいた人たちは、すごいお城だなというふうに日々見たのではないかと思います。

(北野) 木越さんがおっしゃったように、お城の威厳を示す高い石垣というのは、そういう側面があって、権力のシンボルとして造ったという見方もあると思います。

(司会) そして私たちはどんな想像を勝手にすればいいのか、先生方はどんなお城を想像されるのか。色、形を。北野先生はどのようなお城を想像されますか。

(北野) 先ほどの色紙短冊積石垣は、色合いがとても重要で、今汚染されているということをお話ししましたが、もう一つ実は発掘しているときにご覧になった方も多と思うのですが、あそこは実は埋めてあるのです。元々、滝壺はもっともっと深く、滝壺の底に玉石を敷いて、飛び跳ねた滝の水を押さえるような遮蔽の石があったりして、見ごたえがある遺構なんです。れがなぜ今見えていないかというと、色紙短冊積石垣を保全するために、涙を飲んであそこを埋めて保存しているのです。

活用部分で本当は見せたいけれども、保存管理という部分で我慢しているところもあるということ

知っておいていただきたい。あの石垣の上に木があるときはあんなに汚染されなかったのだけれども、石垣を見せるために木を切ったら余計汚染された。ではこれからどうするかという。保存とお城の一番いいところの見せ方に苦勞するというのが、実際の管理している側の難しさなのです。

どういうお城と言われても、私は石垣から言うと、ありとあらゆる様式の日本にある石垣が、金沢城に来れば見ると。その中でも庭園との関わりが強い芸術的な石垣が多いというのが金沢城の魅力なので、さらにそれが浮き立つような建物が、恐らく建っていたのだろうと想像します。それは全部復元できればいいですが、なくても想像力をかきたてられるような整備を、ぜひお願いしたいなと思っています。

(司会) 例えば白鷺城は真っ白だし、松本に行くと黒いし、お城というか、天守閣はいろいろな色と形があるなと思ったのですが、千田先生。

(千田) やはり金沢城はすごくきれいな城です。白い壁に海鼠塀の姿で、多くの櫓や建物が、石垣の上にそびえているデザインが整えられています。金沢城は全国の城でも非常に美しい城だったなと思います。それから今日先生方からお話がありましたように、建物がなんといっても見事な石垣の上にそびえているということは、本当に全国の城でも美しさランキングがあったら、ベスト1には入ると思います。

もう一つは、今まさに発掘調査が続けられていて、江戸時代の金沢城にとって最も重要な場所であった二の丸の御殿が、いよいよ全貌が明らかになりつつあり、将来的にはその復元が期待されています。例えば今、玉泉院丸から色紙短冊積石垣側を見ると、色紙短冊積石垣が見えて、向こう側には空が広がっているということになりますが、実際の絵図を見てみると、庭に面して建物が幾つか建っていたり、あるいは御殿の奥の方の屋根が、あの向こう側には見えていたのではないかと思うのです。そうすると、実は自然とあの色紙短冊積石垣の立体的な庭園構成の向こう側に、人文的な建物の屋根が見えてくるということで、まさに中世以来の山水図などに描かれている美しい自然とその中に建つあずまの景観構成ですね。人間が造ったそういった建物が庭園の自然と一体となって理想の景色をつくり出す。恐ら

く玉泉院丸の庭が、本来江戸時代に果たしていたみんなが見ていた美しさというのは、そういう庭と城と石垣と一体となった美しさだったと思いますので、それが見たい。皆さんもそうでしょうか？ 今、千田が話しているのを頭に思い浮かべていただだけでも、ほぼ全員見たいとイメージして下さったでしょう？（拍手）

ありがとうございます。時節柄、拍手でありがとうございます。ですから、ぜひ発掘を。大変ですけど。夏は暑いし、冬は寒いんですけど、続けていただいて、絵図などの分析を進めていただいて、しっかりとした調査研究に基づき、復元整備をしていただきたいと思います。

（司会） 御殿というのは、よく二条城、江戸城などのお話も出ますが、それぞれやはりいろいろな影響をお互いが受け合っているということでしょうか。

（木越） 当然影響を受けていると思います。ただ、近世の城ですので、政治の中心は江戸城でした。前田の殿様も1年交替で江戸に行き、江戸城に登城するわけです。それに対して、京都にはそんなに行けない。実は京都にあまり自由に行けないというか、制限がかかっているのです。親戚があるからとか、何か理由がないと、京都の公家や朝廷と勝手に大名はお付き合いできないという制限もありました。

ただ前田家は御三家並みの扱いということもあり、江戸城内にはかなり頻繁に行っていて、3代将軍、5代将軍から特にかわいがられていて出入りもしていました。江戸城の石垣や庭、御殿内のいろいろな意匠を見ていたはずですが、領内でそれをするという必要は実はないのです。というのは、江戸城では将軍様が、全国の大名たちに自分の威厳、威光を見せるためにそうする必要があり、金沢城にも将軍様が来るとしたら、もっともっと気を張らなければいけないのですが、自分よりも目下の者しか金沢城には来ないので、今度は領民や家来向けに、前田家としての自分の威厳なり威光をどのように示すのかということになります。地方大名の城とご公儀の城では、多少御殿の造り込みが違うのではないかと考えています。

ただ、前田家もそういう面で、領民との一体感をつくるために、文化5年（1808）の大火の後の再建の後には、12代目は領民、村人や町人の代表を、二の丸御殿の能舞台の白洲に100人、500人という

単位で呼んで、能をやっているのです。この能楽イベントはすごいイベントだったと思います。金沢城250年の歴史の中で領民をこれほど巻き込んだ事件はなかった。領民から献金を受けて城を再建したという負い目もあるのですが、そういうイベントを通して、この地域の領主としてのあるべき姿を見せたかったのではないかと思います。城下町の方から城を仰ぎ見る側も、城中に入ったことで、前田家に対する親しみ、親近感も高まったのではないかと思います。

（司会） 二の丸側が復元されたら、石川県の伝統工芸の全ての技術を集めた素晴らしい意匠が施される、盛り込まれるのではないかと想像するのですが、そういうお城でもなかった感じでしょうか。

（木越） そんなことはないです。これまで見つかった史料で、やはり内装金具はじめ、さまざまな意匠を見ていると、将軍家を超えるわけにはいかないが、江戸前期以来、立派な御殿を造ってきました。前田家には御殿造りの伝統があります。これを踏襲して、いろいろな工夫や贅沢な意匠を凝らしているということが分かりました。

本物志向でやっていくには時間がかかると思います。一気にできなくても、一つの部屋や部分ごとに調査成果を踏まえた復元が徐々に実現できればよいと思います。本物志向で徐々に整っていけばよいと思っております。

（司会） 北野先生、石垣もやはりこのお城と同じように、全国に影響を与え、また影響を受けたところはたくさんあるのでしょうか。

（北野） 先ほど木越さんがご紹介された、公儀普請で全国の大名が集まったときに、前田家は徳川期大坂城の最初の工事で、ある意味恥をかかされたようなところがありました。われわれは金沢城の石垣を勉強する中で、公儀普請の城を見て歩くのですが、西日本の大名と比較すると、下手とは言えないのだけれども、伝統的というか後進的なのです。それが、公儀普請を重ねるに従って、追いついていって、技術が向上していきます。そういう延長の中で後藤彦三郎のような希有な穴生が生まれ、専門の役職を置いて金沢城の石垣を管理し修理し続けてきた。

だから現代の石垣の管理や修理でも、その伝統を

引き継いで、江戸時代の石垣造りの技術者が持っていた研究熱心なところを、きちんと継承していかなければいけません。木越さんがまだ解明できていない点として挙げた、大きい石をどうやって積んだのかということなど、ああいうところを一つ一つ研究していかないと、江戸期の技術の復元に行きつかないのです。私はそういう研究をずっとこれからも続けていきたいと思っています。

(司会) この金沢城の調査研究の大きな特徴は、文献あるいは発掘、全ての分野の方々が一緒になって調査研究を進めてこられたということだと伺っているのですが、逆に大変だったところ、メリット、デメリットはおありだったのでしょうか。木越先生。

(木越) そういうデメリットなども経験して、非常に得るところが多かったと感じています。相手の専門分野が出した結論だけをつまみ食いするようなことはやめた方がいいと学びました。なぜそういう結論を出したかという、それぞれの学問の作法や方法がありますから、それを一定程度理解した上で、結論を頂く。場合によっては結論を頂かなくてもいいのです。研究手法を学ぶということの方が、学際研究の一番重要なところではないかと思います。

「学際」というのは、学問の際で、際というのとは端っこなのです。端っこの方同士で擦れ合ったところに、新しい発見があるということなのです。中心ではなくて、端っこの方においしいものがある。それが学際ということの意味ですから、端っこの方で何かやっている人たちが大きな発見をすることがあるので、学際というのは非常に可能性を持っているのではないかと思います。城郭研究における学際研究は、庭園研究などで一番特色を発揮できるように思います。いろいろな人が入ってきて好きなことを言うのですが、思いがけない発見があったりするのです。庭園研究は面白かったなと思っています。

(司会) 最後に、これからの10年、20年、調査をされる皆さま、あるいは機関に対して期待されること、エールなどを頂けましたら幸いです。北野先生。もっともっと地域の人に関わっていかないといけないという話は、とても大切だなと思って聞かせていただきました。

(北野) それはもちろんぜひ、そういう金沢城をこ

れから見てみたいということもあります。私は、やはり基礎研究が大事だということです。この20年で培ってきたものは非常に大きいけれども、さらにトップランナーとして走り続けるために今要求されていることは、伝統技術の研究と技能者のある意味養成のようなことです。これが今このお城の修理でも困っているのです。お城を直そうにも技能者がいない。そういう調査研究と技能者育成の事業を、ぜひこれからまた一緒にやらせていただけたらうれしいなと思っています。

(司会) ありがとうございます。では、千田先生。

(千田) 今日先生方のご報告で、たくさん勉強させていただきました。先ほど木越先生のお話がありましたように、まさに金沢城の調査研究所は20年間、新たな城の研究を拓いていくという、大変な難しいことを達成してこられたと思います。文献の人だけ、考古学の人だけ、絵図や地図の人だけということではなく、金沢城ということテーマにして、それに関わるさまざまな学問分野の人たちが集まって考える。そして、学問分野の人だけが集まって考えるのではなく、まさに北野先生のお話にありました石垣を積む人、木を組む人、そういったさまざまな技術を持っておられる技術者の方も含めて議論をしていかれて、市民・県民と共に一つひとつ進めていく。その成果が今日本に素晴らしい形でよみがえってきた金沢城の姿だと思います。

これは先ほどの木越先生のお話どおりで、金沢城はどんどん城の復元が進んでいるなど。実は全国的に見ると、こんなスピードでこれほど大規模に城の復元ができているところは他にないのです。この差の大きさは何が違うかという、しっかりとした調査研究、先ほどの学際的な研究で、今までなかった城を中心として復元するところまで、実技のところまでしっかりと捉えて研究成果をまとめていくのだという、研究の積み重ねがあったからです。

いよいよ二の丸御殿です。これは実は従来の櫓を復元するよりも難しいのです。なぜかという、金具一つ、ふすまや板に書いてあった絵、庭との組み合わせ、この応用問題を解いていくというのは、まさにこれまで20年間培ってこられた学際研究のさらにその先のパワーアップでいかないと達成できないことだからです。ますます市民の方、県民の方に応援していただいて、研究所の調査研究という活動

が活発に進んでいくことによって、二の丸御殿も見えてくると期待しています。何とか生きているうちに復元してほしいです。

(木越) もうお二方に言っていただいたので、そんなに付け加えることはないのですが、私自身今課題だと思っているのは、20年間私たちは何とかやってこられたのですが、次の世代、調査研究を担う若い世代の人材不足に直面しています。金沢で専門研究を志す人、例えば古文書や近世史という学問、専門的な調査研究をやってみたいという若い人がちょっと減っているのです。それは考古学の方でも同じではないかと思います。若い人たちにそういう興味・関心を持ってもらって、研究や調査を始めると大変なところもあるのだけれども、そこを何とか乗り越えて、調査研究する人材がたくさん増えるように、何とかしたいなと今考えているところです。

(12: 目録36) 「メ 長左殿 御中 孫四郎」

何とて今日ハいまた」御出なく候や、早々御出」あるへく候、待入候、かさねて」申へく候、くわせんたるへく候、」いそき待申事候、」かしく、

(13: 目録37) 「メ 長左殿 御中 孫四郎」

返々、早々た、今御出」待申事にて候、

一筆申入候、仍とせんに候」間、御出候て御はなし」候へく候、まち入申事」にて候、そとんハかの御ふる」まいの事申入候か、」御文ハまいらす候や、」此方にてハ、そとんおせつき」申事にて候、かしく、

(14: 目録38) 「メ 長左殿 御中 孫四郎」

今日たかのへ参候へと、」かへり申候、早々やとに御さ」候ハ、御出を待申事候、」早々御こし候へく候、」かしく、

(15: 目録39) 「メ 長左殿 御中 孫四郎」

返々、せひともニわれく」御まかせ候へく候、た、し」人々したいにて候、

以前より申入候事、」何と御しあん候や、うけ」たまわりたく候、せひ」ともにわれく」ニ御まかせ」候へく候、御ちやく」も」御申あるへく候へ共、まつく」申入候、御返事ニうけ」可給候、かしく、

(16: 目録40) 「メ 長左殿 御中 孫四郎」

今日ハ何とて御出なく」候や、此方とせんにて候間、」御出候て御はなし候へく候、」た、し、御わつらいにて候や、」御返事ニうけ可給候、」かしく、

(17: 目録41) 「メ 長左殿 御中 孫四郎」

返々、御こし候て」御はなし候へく候、今日ハいまた御出これ」なく候、早々御こしまち」入候、おそく候ハ、かさねて」申候へく候、とせんにて」一人ある事候、必々」待申事候、」かしく、

(18: 目録42) 「メ 長左との 御中 孫四郎」

今日ハ御出なく候、つは」た、今い候間、御らん候へく候、」そのために一筆申入候、」御返事までおよはず候、」おそく候ハ、しろを御」出し候

へく候、」かしく、

(19: 目録43) 「メ 長左殿 御中 孫四郎」

た、今もしかきいたし」候間、早々御出待申事」にて候、おそく候ハ、くわせん」五百やにて御入候、其方したひ」にて候、」かしく、

註

(1・6) 拙編著『前田利家・利長』(戎光祥出版、二〇一六年)。

(2) 本史料の閲覧・調査には、石川県立歴史博物館濱岡伸也氏のご高配を仰いだ。記して謝意を表す。

(3) いずれも金沢市立玉川図書館加越能文庫所蔵。「松雲公採集遺編類纂」は明治三十年(一八九七)、「加藩国初遺文」は明治二十一年(一八八八)の成立(脱稿)である。

(4) 日置謙編『加賀藩史料』一(前田育徳会、一九二九年)七四二頁、同編『加能古文書』(金沢文化協会、一九四四年)二二〇六号「館紺屋文書」。

(5) 本史料の閲覧・調査には、前田土佐守家資料館竹松幸香氏のご高配を仰いだ。記して謝意を表す。

署名「孫四郎」および消息の内容から、その発給年代は利長がいまだ「利勝」と名乗っていた松任城主時代（天正十一年五月頃～同十三年閏八月頃）と考えてよい。一部はすでに拙稿「織豊期前田氏権力の形成と展開」⁽⁶⁾に言及・紹介したが、全文の翻刻はこれまで成されていない。懇意の家臣千福との音信は些末な事柄に終始するが、若年時における利長当人の貴重な証言であると同時に、当時の武家社会の一端を窺う興味ある史料である。

(1..目録25)「メ 長左殿 御中 孫四郎」

返々、今日ハいまた「御出もこれなく候、」御がいき二候や、
とせんにてある事二候間、「いそぎ御出候て御はなし」候へく候、た、し、
御わつ「らいにて候や、うけたまハリ」度存候、おそく候てハ「いらさる
義候、」かしく、

(2..目録26)「メ 長左殿へ 御中 孫四郎」

何とて「はやくと」御かへり候や、うけたま「ハリ度候、いまたねす」
候て御さ候ハ、早々御こし「待申事候、いそぎ一筆」申入候、「かしく、
(3..目録27)「メ 長左との 孫四郎」

返々、御出を待入候、
今日ハいまた御出なく候、「何とてやとにおわし」まし候や、早々御出候て「
御はなし候へく候、」待入候、かん五郎おも御さ「そひ申へく候、いそぎ」
待入候、「かしく、

(4..目録28)「メ せんふく殿 御中 孫四郎」

返々、くわし御うれ「しく存事候、」御めにか、り申入候へく候、
み事くわし「おひた、しく給候、」うちおかすせう「くわんいたし候、」今
日かなさわへ参候「間、やかてかへり可申候、」かしく、
(5..目録29)「メ 長左との 御中 孫四郎」

返々、いそぎ御出「待申事候、
た、今ふるへいり候間、早々」御出候て御いり候へく候、「待入申事候、
おそく候へハ、」はいり申事にても「いそぎ一筆申入候、」かしく、

(6..目録30)「メ せんふく殿 御中 孫四郎」

返々、ひまにて候ハ、「御出を待申事候、」早々御出候へく候、
夕日ハことのほか「くるひいたし候、しかれハ」今日はまくり、おふ「
に参候間、其方もあんない」しやに行申度候、「まつく「これまで」御出
候へく候、かしく、

(7..目録31)「メ 長左との 御中 孫四郎」

返々、かん五郎おも御「さそひ候へく候、
今日ハ御出なく候、とせんにてい申事候間、早々御出」候て御はなし候
へく候、「待入候、おそく候ハ、又申」入候へく候、御返事まで「およ
はす候、」かしく、

(8..目録32)「メ 長左との 御中 孫四郎」

夜前あらましに「候つる間、早々御出候へく候、」待申候、其うへ「そうし」
おもき、候わん間、必々「待申候、御返事」までおよはす候、「かしく、
(9..目録33)「メ 長左殿 御中 孫四郎」

返々、御出候てふるへ御「いり候へく候、待申事に候、
二三日中ハ御出もこれ」なく候、かの物御わつらい「候や、にかくし
き御事」にて御いり候、た、今ふるへ「いり候間、ひまにて候ハ、御出」
候て御いり候へく候、「いそぎ待申事にて候、」御わつらひにて候ハ、
せひ「なく候、かしく、

(10..目録34)「メ 長左殿 御中 孫四郎」

今日ハいまた御出これ「なく候、昨日はふるまい何」とておそく候や、た、
今「やかてつかひ十人出し」候へく候、其分御心へ「あるへく候、そとん
うけ」こいにて候ハ、そとんかたへ「御申あるへく候、かしく、
(11..目録35)「メ せん長左殿 御中 孫四郎」

返々、かん五郎もん「おハ、つかい候て御つれたち」候へく候、
きのふより、そとんと「御かけ候、かミ出し候わん」由申候間、早々御
こし候て、「御とり候へく候、四十八まい」かミの由、御やくそく「にて候間、
其分御申」候へく候、かしく、

〔附録二〕新出史料 前田利長自筆消息の紹介

筆者（大西）はこれまで、十六〜十七世紀にかかる加賀藩前田家関係史料の紹介に努めてきた。「国祖遺言」の翻刻もその一環である。以下も同じく、前田利長の消息二十六通を新出史料として紹介したい（史料Noに次ぐ「目録」Noは、拙稿「前田利長発給文書目録稿」〔1〕における史料Noである。また、端裏書は鍵括弧で括って冒頭に掲げ、改行位置も鍵括弧で示した）。

まず、前田利家の召し抱えた染物屋「館紺屋」の子孫に伝わった史料の一部を以下に挙げたい。現在は石川県立歴史博物館（大鋸コレクション）に収蔵されている〔2〕。森田柿園編「松雲公採集遺編類纂」巻一四二に「金沢館紺屋文書」として採られた史料十一通のうち七通、同編「加藩国初遺文」巻六に「原書金沢館紺屋理兵衛所蔵」として写された史料九通のうち七通に相当するが〔3〕、以下のNo.6の釈文が、『加賀藩史料』・『加能古文書』〔4〕に紹介されたほかは、いまだ活字化されていない（『加賀藩史料』・『加能古文書』掲載のNo.6が正本からの翻刻であるか否か不明であるため、No.6も新出史料と見なす）。

（1…目録139）「メ こん平 参 はひ」
 たちこんやそめ物の「ちん八木の高七十六石」式斗五升に候、これを「出し候て四十八石一ひやう八升」にて候、此はる此内十五石「かし申候、それをいま」ひき候て、卅三石一ひやう八升「つかハし申候ふん候、此」銀子さとふき式百廿五匁「つかい候間、わたし可申候、かしく、

廿五日

（2…目録140）「三郎へ 参 ひ」
 此のほり九、早々「そめさせ可申候、」もんハ高木「給の事、」かしく、
 （3…目録1278）「メ こん平 参 はひ」
 九兵へ

くろうめ「たん」ミ事「出来申候、」いま又卅たんあまりも「そめ可申候、（絹）きぬを」はんにつかハし候へく候、「此かミ五そくこんやに」とらせ可申候、「かしく、

十月廿日

（4…目録1135）「メ こん平 参 はひ」
 たちこん屋、此方へひき「こし候て、さかなあけ候、」心さしし「うちやくのよし」可申候、しろかね「二まい」とらせ申候、いへ「おもつ」くり候へと候へく候、「又同壺まい、おんなども」かた分とらせ申候、「かしく、

七月廿九日

（5…目録1126）「メ 九兵へ 左内へ 参 ひ」
 いたし、さたの「かきり候、さうく」あおいのかたをほんの「こ

とく、ほりなおさせ」可申候、つゆなども「むよう候、かしく、
 たちこんやニ可申候」此ほんのあおいのことくに「かたをうつし候はん、」昨日出し申候ハ、あおいの「中のしべ物も、はのさきへ」とおさす、中二とめ申候、「一たんハるへし、又あおい」の中二つゆも何とて「入候や、ほんになき事を」（*冒頭の追而書へ続くカ）

七月廿二日

（6…目録176）「メ 三郎へ 参 はひ」
 尚々、たちこんやしたいに「さそうなるかたひら、わきく」の「こんやへくはり、そめさせ候」やうに申つけ候へく候、
 われく「そめ物いたし」申候「こんや、とうまちこんや」のかしらニ申つけ、さ、う「なるそめ物おは、いまのこんや」分わきのこんやへく「ばり」申、そめさせ申候やうニ明日「分申つけ候へく候、明日にも」おりかミをとらせ、こんやのかしらニ「申つけ候へく候、かしく、

（7…目録1402）「メ 三郎へ 参 ひ」

たちこん屋いまい申候「やしきとなりあき」申候由候、たれく「申候」ともわたさせ候ましく候、「たちこんやニとらせ申候」やうニ、出羽かたへ申度候、「かしく、

次いで前田土佐守家資料館所蔵「前田利長書状巻」を紹介したい〔5〕。同史料には、千福長左衛門宛の利長消息十九通が貼り合わされており、利長の

聞談として語る（語ったと思しき）事象に、京都（聚楽）、そして伏見でのそれが目立つ点に即せば、勘十郎の仕官は文禄年間（一五九二〜九六）との推定が成り立つ。日置はそこで、正保元年に「七十三歳」没すると、生年は元龜三年となつて右の推定に合致しないため、「七」を「六」の誤記と見て享年を「六十三歳」に読み替えたのではあるまいか。

だが、筆者は村井勘十郎当人の証言からこの通説を否んでみたい。日置も遇目したのである。「村井重頼覚書」所載、卯月廿四日付村井兵部宛村井又兵衛（勘十郎）書状写に「豊後五十年忌之義、先日宗兵衛方まで被仰下候、扱もく御きとく道をたてさせられ、御めうか弥可有御座と目出度大慶奉存候、当年未四十六年ニ罷成候、豊後殿六十二而十月廿六日巳之刻ニ江戸ニ而被相果候事」云々と文言が見出せる⁽⁴⁾。五十回忌に言及するこの時点で、勘十郎の父（もしくは養父）村井長頼（慶長十年没）の死後、いまだ四十六年であるという。慶安三、ないし四年（一六五〇・五一）であろうか。長頼の五十回忌はこの後、承応三年（一六五四）に営まれたはずである。

この史料の存在から、さきの由緒帳における勘十郎の没年、そして村井勘十郎正保元年六十三歳没という日置説は斥けられよう。だが、子孫の筆になる由緒帳の記事がまったく荒唐無稽とは考え難い。「正保元年七十三歳病死仕候」の一文のうち、日置が誤りとした享年の方は、あるいは信すべきであらうか。少なくとも、明確に誤っていたのは享年でなく没年の記載であった。

前記の通り、勘十郎の生年は日置の推定の如く、天正十年前後と目すのが妥当であるが、以下の如く補正が必要であろう。勘十郎の息子（同じく又兵衛を名乗る）の覚書「亡父又兵衛儀書付懸御目申候」⁽⁵⁾に「十九歳 利家様御遠行迄御奉公相勤申候」とあって、慶長四年（一五九九）閏三月の前田利家病没時に勘十郎は十九歳であったという。同人の別の覚書「村井又兵衛之覚書」⁽⁶⁾には、「慶長五年廿歳、大正持山口玄蕃御攻被成時」云々とある。この二つの証言によれば、勘十郎の生年は天正九年（一五八一）でなければならぬ。仮にこの推算を信じれば、仕官は文禄三年（一五九四）

となり、くだんの「七十三歳」という享年を史実と考えれば、承応二年（一六五三）の死去となる。以上の仮説をさらに進めれば、「シヨウホウ」と「ジヨウオウ」の類似が、勘十郎の没年記事を誤らせた背景にあった可能性をさえ描くことができよう。以上、村井勘十郎の生没年につき、その生年を天正九年と改め、同じく没年も承応二年である蓋然性が高いことを指摘した。

註

- (1) 当該史料の命名者やその命名時期は明確でない。ただし、前田知好（利家三男）を初代とする前田修理家に、知好「自筆之品」として「利家公御物語之由覚書 壹冊」なる史料が伝来したとされる（金沢市立玉川図書館加越能文庫所蔵「前田修理家譜」）。金沢市立玉川図書館加越能文庫所蔵「国祖遺言」は、その奥書に「前田氏知故家祖自筆」とあるので、当該写本の原本は右「利家公御物語之由覚書」と同一の書冊を指す可能性が高い。筆者の考えるに、「国祖遺言」はかつて「利家公御物語之由覚書」と呼称されていた。
- (2) 拙稿「前田利長論」（『研究紀要 金沢城研究』一六、二〇一八年）、拙著「前田利家 利長―創られた「加賀百万石」伝説―」（平凡社、二〇一九年）、拙稿「国祖遺言（上）」（『研究紀要 金沢城研究』二〇、二〇二一年）等。
- (3) 「御夜話集解題」（日置謙校訂『御夜話集』下編、石川県図書館協会、一九三四年）、日置謙『改訂増補加越能郷土辞彙』（北国新聞社、一九五六年。元版一九四二年）。
- (4) 金沢市立玉川図書館加越能文庫所蔵「村井長頼伝記並覚書」等。
- (5) 金沢市立玉川図書館加越能文庫所蔵「村井重頼覚書」所収。なお、同史料には、筆者が前掲註（2）拙著「前田利家・利長―創られた「加賀百万石」伝説―」等において偽作と断じた「右大閣様御書共」（天正十三年）九月十一日付前田利家宛秀吉書状）につき、「じゆらく（聚楽）より伏見へ御移候時分」（文禄四年）に奥村栄頼（撰津守）・奥野金左衛門および勘十郎の三人がこれを筆写した（「右三人を申合候て、悪筆ニ而めいくニ右御書共、うつし申候」との言及がある。この勘十郎の記憶を事実とすれば、問題の秀吉書状は文禄年間にはすでに前田家内部において作成（偽作）されていたことになる。
- (6) 前掲註（4）「村井長頼伝記並覚書」。同じく勘十郎の息子又兵衛の（寛文十二年）閏六月二十五日付書状にも「十九歳利家様御遠薨迄日夜 御前二近仕罷在」とある（「壬子収録」）。
- (7) 金沢市立玉川図書館加越能文庫所蔵「村井又兵衛之覚書」。

者共、儲金沢ニも御遺物被下候衆、銀子合二百七十六枚被下候衆有之事

御腰物一

一、御脇指一 前田利常 御さる様へ御遺物 利長様へ

金子百枚 御わたし被成候義候事

一、金子百枚 はくの面・から折・かうはい合三色 肥前様ノ御うえ様へ

右之通也

一、石川郡・河北郡・氷見郡 一、金沢御城中

一、大坂御台屋 兼 金銀諸道具不残肥前様へ御渡被成候御遺言にて候、右

ハ慶長四年初三月十五日より、弥御煩おほしめしきられ、芳春院様御右筆にて御書置之御下書被成候事、然所ニ芳春院様肥前を子ニもち候

間、金子も不入候由御意候て、二百まい御請取被成候由御座候、色々

物語共有之事、右之内孫四郎様へも百五拾まいすばり申候、色々の義

共御遠行之御跡ニ御座候事、

(奥書)

此一卷者、前田氏知故家祖自筆而深藏之、余密乞之謹写

弘化三丙午季夏 菅原矩正

朱書「右国祖遺言ハ、十余年前加藤里路の蔵せるを借り写せしも、誤字多ければ、今年再び借りて照校せしも、原本素より誤あり、敢て私意を加へず、原本のまゝを存するなり、明治廿六年六月廿八日」朱印校了

〔附録二〕村井勘十郎の生没年について

筆者(大西)は「国祖遺言」の分析・検討の結果、その編著者を、前田利家の近習村井勘十郎(のち又兵衛・長明・重頼)に比定したが、勘十郎の生没年につき、天正十年(一五八二)の出生、寛永二十一年/正保元年(一六四四)の死没との認識を示してきた⁽¹⁾。この理解をここで再検討しておきたい。

筆者が勘十郎の生没年を叙するに参照したのは、先学日置謙の仕事である。氏の執筆にかかる勘十郎の筆記「利家公御代之覚書」(「亜相公御夜話」)等を収めた『御夜話集』の解題、および『改訂増補加能郷土辞彙』「村井長明」の項に基づく⁽²⁾。

前者には「子爵前田家の好意によりて」調査した「勘十郎家の由緒帳」が引用されており、勘十郎こと「村井又兵衛長明」に関して「正保元年(六十三歳カ)七十三歳病死仕候」との記事を載せてある(六〇七〜六〇八頁)。勘十郎は寛永十六年(一六三九)、大聖寺藩の成立にともない、加賀藩主前田利常の家臣から大聖寺藩主前田利治(利常三男)の家臣に転じた⁽³⁾。よってその子孫の由緒書上が大聖寺藩旧藩主家と思しき「子爵前田家」に伝来し、これを日置が確認したのであろう。

ここで注意すべきは「正保元年七十三歳病死仕候」と日置が由緒帳の記載に疑問を呈した点である。由緒帳の没年・享年に拠れば、勘十郎は元龜三年(二五七二)の出生となるが、日置はいかなる史料に基づくか不明ながら、享年に十歳の誤りを推定して「七十三歳」に「六十三歳カ」との註記を施した。日置の註記に従えば、勘十郎は天正十年(一五八二)の出生となる。

日置はこの推論を『改訂増補加能郷土辞彙』「村井長明」の項において断案に変化させた。すなわち「正保元年六十三歳を以て没した」(八九五頁)と叙述する。根拠はなお明らかにされない。

しかし、筆者は数多くの関係史料を渉猟するなかで、この日置説に疑問を抱くようになった。日置が何故、勘十郎の享年を「七十三歳」から「六十三歳」に読み替えたのか。「利家公御代之覚書」の「勘十郎十四にて御奉公に被召出候」(同上No.210)云々という証言や、同書において勘十郎が自身の見

候、信濃義ハ、第一若とう一種ニ取立申候、扱又太刀折紙おもたせ、た、ミさわりよき故取立候、我等見立ハ右之通ニ候間、其心得候て物語、跡にて子共ニ可仕旨御意候へハ、豊後何のかまいなく泪にむせひ申斗ニ候、扱やれ豊後と御意候て、あの勘十郎義、今少年も立候て、肥前ニ取立候様ニと□□共ニ申置候と御意候へハ、豊後義いよく泪にむせひ申候、扱夜半之時分おくへ被為成候へハ、三体・五兵衛をはしめ、扱もく名御大将様かな、御内衆ハ見立までも、御煩はやおもきとおほしめし、各へ被仰置候、三体申候、千人・万人ニすくれたる大将を英雄と申候か、殿様ハ万々ニすくれたる御大将様と、三体引事を申、各泪にて被罷在候事、

大納言様御のと今虫二すし出申候て、御遠行廿日斗以前、御遺物共之義を、御うへ様御右筆にて御書出覚

- 一、金子千枚 一、御脇指 一、御腰物 合八腰 一、きどう墨蹟御懸物
- 一、きぬ二百疋 一、わた子は 一、能登口郡 壹万五千石
- 右孫四郎様江御遺物
- 一、金子五十まい 一、はくの面廿 一、わた二百は 孫四郎様御うへ様

- 一、金子五百まい 一、からおり合二百たん 一、わた千は
- 御うへ様へ御遺物
- はくの面 一、はくの面廿 前田対馬殿御うへ一色様へ
- かうはい 一、はくの面廿 此内御子様達へも

- 一、金子百まい 一、はくの面廿 前田対馬殿御うへ一色様へ
- 一、金子七十枚 一、きぬ三十疋 此内御子様達へも
- 一、金子五十枚 一、はくの面廿 此内御息女様へも

- 右ハ長岡与一郎殿御うへおちよ様へ
- 一、金子七十枚 此内 宗半御取立ノ御子三十まい 信濃取立申御子廿まい
- 一、金子廿枚 一、わた五十わ 長ノ十左衛門殿御うへ
- 一、金子廿枚 一、長光御腰物 長岡与一郎殿

- 一、正広御脇指
- 一、金子十まい 土方勘兵衛殿 一、金子五枚 一、小袖五ツ 中川宗半
- 御家中三ヶ国之人數
- 一、金子十枚 前田対馬 一、金子七枚 高島石見

浅野彈正殿

- 一、金子十枚 前田孫左衛門 一、金 五枚 土井左京母義
- 一、同 五枚 青山佐渡 一、同 拾枚 村井豊後
- 一、同 五枚 御内義へ 一、同 二枚 同内御うへ
- 一、同 七枚 奥村伊与 一、同 十枚 篠原出羽
- 同 二枚 同内御うへへ
- 一、同 五枚 長九郎左衛門 一、同 三枚 高山南坊
- 一、同 五枚 村井左馬助 一、同 五枚 奥村河内
- 一、同 五枚 富田下野 一、同 三枚 徳山五兵衛
- 一、同 三枚 岡田長右衛門 一、同 三枚 寺西宗与
- 一、同 三枚 神谷信濃 一、同 三枚 村井勘十郎
- 一、同 三枚 岡田丹後 一、同 二枚 奥村長兵衛
- 一、同 二枚 斎藤刑部 一、同 二枚 岡本三体
- 一、同 三枚 小塚権大夫 一、同 三枚 木村土佐
- 一、同 三枚 山崎長門 一、同 三枚 富田源大夫
- 一、同 三枚 片山伊賀 一、同 三枚 岡島備中
- 一、同 五枚 太田但馬 一、同 三枚 神尾凶書
- 一、同 二枚 高島平右衛門 一、同 二枚 松本監物
- 一、同 二枚 今井左大夫 一、同 二枚 脇田主水
- 一、同 二枚 山崎種善坊 一、同 一枚 富田孫九郎
- 一、同 一枚 岡田助一 一、同 一枚 半田十郎
- 一、同 一枚 橋本孫平次 一、同 一枚 上村孫三 一、同 善之
- 一、同 一枚 松山三斎 一、同 一枚 橋本宗右衛門
- 右之外お上らう衆、おもてにて石黒采女・月斎・しらん、其外之

かめ候へハ、被仰出候御法度背き申ニ罷成候、我等共存候ハ左様之者ハ見付候てとかめ、其もの様子、又ハ返事次第ニ見合はたらき候ハ、当座ニきりふせ、又ハめし取候やうニ成共と存由被仰候処、奉行衆・浅野弾正殿、扱ハ金森法印などをはしめ五、六人、大納言殿被申如く、我々も其通ニ存由被申候へハ、上様御意、尤大納言申通可然存由被仰出候、扱其通ニ被仰出濟申候、其時も皆々御勝手へ御出候て、申ても御威光つよきニ、又被仰事尤之儀故、利家公へたいし物申人なく候由、彈正殿を初、年寄・咄衆へ御申候事、

一、殿様鶴をあかり候へハ、其ま、御虫ニあたり、少も上り不申候へ共、うき世つるをくいたかると御意候て、かうらい鶴銀一まいつ、ニ、卅御かわせおかせられ、御客御見舞被參候衆へ、御出来あい御ふるまい二度々御料理出申候、上様御前にて色々御咄之上ニ、此頃大納言殿鶴を度々ふるまいたへ候由、いつれもく御咄衆申上候得ハ、上様御意御され事ニ、それハ大納言、ぬす人にて鶴之料理食セ候、いつれも鶴とよるこはせ、其ゆへ別之肴ハ出し申間敷候、鶴にてよるこはせ候と、御機嫌よく御わらい被成候、其時大納言様もそれハ御意めいわく仕候、いつれもニ料理仕候て、うれしからせ申候と、とつとたかいニ御笑被成候よし、扱もく互ニ上手かなと、上様御咄衆、殿様へ御越御わらい被成候事、

一、大納言様、能州分金沢へ御帰之刻、雨ふり、つはたより日暮、御帰之時、道あしく候時、種善坊酒ニ酔候て、いつれも馬取共はいくくと申候、種善坊申やう、ぬし馬取ニそうなミにはいくと申事、さりとしてハさたのかきりニ候、種善坊か馬はいたれか、馬はいと申候へよし、いつれも尤くとわらい被申候、つねに種善坊酒斗の時申候ハ、うき世のもの共からかささをさすハ身をぬらすまじきため、ちやうちんをとほすハ明ルをみるためニ用意するニ、少の事をからかさやふれ、ちやうちんやふれ、□□はらせぬ事おかしく候由、つねく被申候、又金沢

へ御帰之時ハ、殊外種善坊御意ニ入候故、少身もの共そせうを頼申候へハ、ほうはいニさへ六ヶ敷事ハ不被申ものニ候、殿様へハ御進物仕候ても、御氣ニ入度存候処ニ、殿様へ御覚事又ハ御六ヶ敷事ハ、此種善坊ハ申上事不罷成候、けにく御身上なくすハ、家をうり御はしり候へと申仁ニ候、おもてむきハ左様ニ申、殊外内しよハひるみさかちな坊主と、人の事きもいり申ものにて、何もわらい申事ニ候事、

一、大納言様御きらい第一、不知事を知タふりをしてうそを云ものを、老若共二つはきはき被成候、後加様の者ハ、必小身者ハめんほくうしない、大将ハ何事を云ても、侍共得事とまことにせず候物也、第一合戦の時など、れいのうそつきと下知を聞不申候もの也、語を御引候て、○知レ之為レ知レ之、不知為不知、是知也、云事有と御意候て、肥前守様・孫四郎様へ御意、肥前ハ不被存、越中と取合之時、片山や多野村を大将ニ遣時ハ、侍共下知をさかす、不破や村井を遣候へハ、下知を諸侍聞申候と、御意被成候事、

一、大納言様御遠行可被成春二月十一日之夜、御咄之時、中之間へ村井豊後・徳山五兵衛・寺西宗与・斎藤刑部・三休、此衆斗をめぐして咄申候へと御意、はや御気分もあしき御咄共色々候而、扱御意ニ、篠原出羽ハとらと云時分、あしおもさすらせ、我等そは二ねふしさせ申候、扱此七、八年以前分、神谷信濃を左介と云時分、右之通我等そはにおき申候間、兩人をハまつハ若とうにて取立申候、知行をも出羽ニハ壺万石遣、信濃ニも人跡のよりきなどを付候て、八千石遣申候、然共肥前守も跡にて、大納言目ちかい、兩人を何事ニ存取立候様ニ可存候間、段々其方共ニかたり置候間、此通跡ニても子共ニ申聞候へ、又ハ各もよく分別仕候へ、出羽ハ第一役ニも立そう成ものニ候、かた口成もの、きす斗ニ候、くわしくハ豊後よく存候、をれかめいむこニもし、又ハ豊後をはしめて諸大夫ニする時、あれおも豊後ニことわり候て、諸大夫ニも申付候、末森・八王子ニても出羽ハ手前よく候、豊後存申

(128) 〇六三・一六〇四頁 (徳川家康)
一、大納言様と大苅御間柄あしく候て、御申分有之時、神谷善左衛門と云御家之神谷信濃いとこにて候を、内証ニ色々之義を大樹御申合、大坂信濃所へらう人いたし候躰にてござれ、是ニ色々物語有之、信濃仕合よく、後善左衛門事、伏見殿様御知音衆分御内証申来、早速あらわれにけかへり申候、扱殿様御耳ニ入、信濃れいしや□□にて、おんミつにて豊後・長右衛門□□取次、色々御理申上、御おんミつにて済申候、其故今少殿様御存生被成候ハ、信濃ハ身上あふなく候事、

(129) 〇九一・一六九二頁
一、伏見にて二月十九日、山里ニ殿様御出候て、御家中役人、うえ木共ほり参り候へハ、御機嫌よくこわい、を役人共ニ御くわせ被成、扱人数を付可申旨御意候て、奥村主計・村井勘十郎兩人、日跡付申候へハ、三百四十二人役人有之、扱もく、兩人ながら同事成候手跡と御わらい候て、但勘十郎ハ未年七ツ八ツ主斗よりおと、ニ候間、手もあかり可申候と御わらい被成候、又御されことニ、村井左馬助・奥村織部役人をハ、人数を多兩人付可申候と、御機嫌よく御わらい候へハ、斎藤刑部、御説のことく兩人之弟共ニ候間、人数多可仕なと、申候へハ、殿様刑部無用之事申候て、主計・勘十郎ニよせかまでニあい申など、殊外御機嫌よく御わらい被成候事、

(130) 〇六七頁 (慶長元年)
一、秀頼様御四ツノ年分と御膳ヲあかり申候刻、御いとり被成候時、今春相詰居申候ゆへ、かたきぬ斗ノ躰にて、つゝ、ミ太こにてしまいを仕候へハ、御きけんよく御膳あかり申候、それか御くせニ成申候て、後々までも御膳あかり申度事ニ、いつものことく仕舞はやしにてあり、殿様是を御笑止かり、ろくな事にてなく候由御意候事、

(131) 〇七七頁 (毛利輝元)
一、あきの森殿、ついに利家様へ御出候事、たかいニなく候所に、秀頼様御もりニ被為成候て後、伏見にて安国寺を以、金森法印と土方勘兵衛殿をもつて御理候て、いつかたへも不罷出候ゆへ、御見廻申事

も無御座候、然共秀頼様御もり被為成候へハ、万事以来までも得御意候様ニと御理、兩人衆、村井豊後・徳山五兵衛などニ御相談被成、大納言様へ被仰上、殿様御返事ニ、森殿之義、先年唐陳之刻、なこやへ罷越時、御国中被通刻、御留守居衆へ被仰付候由にて、殊外御馳走共ニ候、左様之御礼も然々不申入候つる、安国寺へハ其通申入候、左候へハ我等所へ御尋可有由忝存候、以来心中如在有間敷旨被仰候て、伏見山里におんミつニ金森殿・勘兵衛殿・安国寺三人御相伴にて御ふるまい、其上ニ正広ノ御脇差被遣候、其分十日ほどありて、右之衆御相伴にて、殿様森殿へ御越候て、色々御馳走、のりしけ之御腰物進上にて御帰被成候事、

(132) 〇六九・一六七二頁 (辻新)
一、伏見にてつしきり・おいはき出来候刻、大閣様、大納言様ニか殿御座候故、御逗留被為成内ニ、五人奉行衆其外、大樹・備前中納言殿・あき森殿・金森殿法印・景勝・正宗・肥前様・長岡越中殿、其外老若大名小名衆卅斗御意ニ御詰候、其時右之御仕置如何可被成旨被仰出候時、おもひくニ存分別被申候衆も候、扱国郡持屋形くつし、之前ニ番所をいたさせられ可然旨被仰出候、御尤之御意有之所ニ、扱奉行衆被申候ハ、つし切かあくとう人有之時ハ、番所分いつれも罷出おさへ置、たれかものと吟味して其主人江と、け、其主人分めしこめ候様ニと、いつれも被申候、中ニも石田治部・増田右衛門・長東大藏など、其通よく可有御座候由、大形相極さうニ候処、大納言様被仰候ハ、扱もく各被申分、我等などハ何共かつてんゆかす候、其御心ハと皆く被申候へハ、左様二つじきり・あくとうするものか、はや其ほと二取つめられ候て、番之もの御意次第と、うなたれ可有之哉、もはや其時ヲ生害と可存候間、それをと、けニ主人江遣事、我等ハ思ニ不存候、左様ニ被仰出と奉行衆も被申渡候ハ、後あくとう人共ヲにかし申事可有御座候、夫を番之者手などをおひにかし候へハ、結句越度可罷成候、偕又主人へと、け候間もなく、右之通はたらき候をきりと

然其一本鎗分手柄共被成、御身上御仕上被成、扱藏人殿跡ヲ二千貫御

取候て、其分又度々御手柄ニ而、能登ニ加州を二郡御取候て、其上互

ニハケンノやう成内蔵介と御取合候て、御手柄度々之上ニ、内蔵介ニ

御合戦御勝、越中をも切取被成候間、今ノ世ニハ大納言殿ほとノ御手

柄ハ、日本之義ハ不及申、唐ニも有之間敷と、いつれよりあい申事ニ候、

そこにて主水殿・内匠殿も其色を申事ニ候よし御申候、利家公御手柄

第一、扱又不彦も村豊も奥与州など、長九ハ能州ニ、おのゝやう

成よき臣下衆ニ、御先手をも被仰付候故と、御番三人御申候、いつれ

被申候者、忝御申分ニ御座候、筑前守承候ハ、大慶ニ可為存と、彦三

をはしめ被申事、村井豊後手柄共之事、

一、江州かねもり城責之時、南はん笠信長公分拝領仕事、

一、長篠合戦之時、御具足羽織信長公分拝領仕事、

一、浅井御取合、柴田退口之時、豊後も鎧、利家公御そはにて三度迄あ

わせ、信長公へ御先へ御使ニ参候時、信長公分御こし物ニ付おかせら

れ候御 拝領仕事、

一、越中五ふく山ニ大閣様御人数御陳ヲとらせられ候時、御本城様、大

閣様へ御わひ事にて、佐々内蔵助無事御免罷成、九月三日ニ富山分内

蔵介御礼に被罷出候間、まへ日二日御陳所之前ニ上様御出、両山を御

見おろし、御せうきこしを御かけ御座候而、村井豊後を被召出、利

家様も御前ニ御敷かわを御敷候而御座候、其時村井又兵衛、扱も今度

ハ又左と内蔵介取合候付而、其方度々先懸いたし、手柄共上方にて聞

及、又候此地にて又左被申候おも聞申候、満足又左内蔵助、おれも

まんそく申由御意候て、御めし候て御座候し、らの御とうふく被下候、

其時上下あやかりものとさ、めき候由ニ御入候、利家様も一入ノ御

満足被成、御礼被仰上候よし、其時分奥村助右衛門も末森ヲもちかた

め候儀を、上様江被仰上候由、殊之外助右衛門かけにて腹立被申候を、

殿様御耳ニ入、何事をあのちハ申候、末森ハ助右衛門斗にてなく候、

千秋主殿助・土井伊与、其外むかし上様も御存大西金右衛門なども置

申候故、助右衛門斗ハ不被申候よし、事二度々御意候由、後々

迄も岡田長右衛門・寺西宗与・徳山五兵衛なども物語ニ候、扱越中分

金沢城迄、上様御帰陳被成、不破彦三・前田五郎兵衛殿・同右近殿・

長九郎左・高島孫次郎殿・村井豊後六人ニ、金子・御小袖なども拝領

被仕候事、

一、伏見殿様御居間こたつに御あたり御座候、其日やねはこむねぞんし

申候所、御作事御させ候て、大工共四、五人、やねニ居申候、下の縁

御小人共居申候、金沢大工やねふふはつれ、ぬれゑんの上へひし

とすりおち、目をまわし候時、皆々小人共如何ノときもをつふし、

そはへより候へハ、弥大工はや死申やうなる躰仕候、其時殿様大音を

御上候て、あのうろたへものと、あらくと御しかり候へ者、其ま、

大工おきあかり、やねへはしこふとひあかり、何心なく作事ニ取つき

申候、扱をくへ被為入候得者、年寄衆・御咄衆、扱もく名大将かな

と被申候、扱其暮方ニ先ノ大工ふひん也と御意にて、御大工かしら宗

右衛門ニ被仰付、後日ニハあれおはやすませ候へと御意候へハ、何れ

もく涙ヲなかし、扱御しひも今ニ不初と被申候、其時三休語引て、

其人見其言語トこれにて御座候、其人々ニヨリ被仰付候と被申候、皆々

語を書付申事、

一、殿様御数寄御つは口切時、被仰付、廿数寄も御茶被進、

九十人あまり御茶被進候、其あかり膳を右両人、其人々のすきくを

書付させをかせられ、来年口切にても、又ハ春の御数寄にても、皆す

きくい被申候料理物を、其人々ニ心もち被仰付、扱もく御数寄と申

ハか様之御事と、御客衆帰被申時、く、り御出之刻、たかくとほめ

候て、御帰之衆多御出入候、さりとてハくと各被申候、但それく

二なきものハ不罷成事と被申候事、

事共を聞申候時、右之(公事)くし其時出申候、互(三)たいたいの公事之由、其時兩人たい(対決)けつ(三)成申候時、孫一物云おわり、こと(詞)はコウ御座りまさしてなと、ぬしか利をひたもの申候へハ、權助せい(三)しかね、我(新様)かやう成(嘘)うそを云ものニハ、これくわけ度と、まへ(前)をひろ(広)け候へハ、おやかた様立之あれを御聞被成候へ、殿様御前何事之所(二)而、侍(三)申ことは(二)候哉と申候へハ、それか越度(三)成、御前(三)らうせき(三)之由、御立候へとおい立被申候、頓(一)而殿様御耳(二)入、公事も權助負(三)成、三ヶ月ほと門(閉)ヲとち、く(曲)せ事之由(二)有之申候処(三)ニ、其後御わ(訛)ひ事候而被召出候、豊後(二)被仰付、孫一・權助中なをし仕候、殊外權助を豊後(訛)しかり申候へ者、め(迷惑)いわく仕候、わ(木)きも其時(見)ハミへ不申候、孫一うそをい、申候を、不斗腹立申義(二)御座候、殊外赤面いたし、權助も父權平も、豊後より孫一も出入申もの(二)候故、後ハ互(二)中なをり仕候段、公事ハ權助負(三)成、

一、蒲生飛驒殿、伊勢(二)而十六万石御取候、相津(全)にて百万石(三)成御越候故、天下之侍(一)・らう人共在付參申候、其時(二)越中御陳之刻、殿様(三)有之御馬廻加藤九郎兵衛と申仁、五百石取參申候、内藏助殿内其時馬廻矢島六介と申もの、これも四百石取參申候、は(傍)う(一)はい(二)候処、日頃ハ北国同国之由(二)而咄し申候、有時蒲生左兵衛(二)テ、色々武篇物語之上(一)ニ、利家様・内藏介殿取合之咄出申候而、互(一)いけん(威言)云やゐ、喧嘩仕出ぬ(抜合)きあい、九郎兵衛刀之き(切先)つさき、六介(一)とう(副服)ふく(二)あたり切(裂)さく、六介刀さへ人之袴(二)あたり切さき申候人多(二)候故、引のけ申候、まつハ矢島六介かた、少にふく候故、加藤九郎兵衛かたへよせ可申と申時、内藏介所(二)有之者、三十九人侍共有之、大納言様(三)有之つる侍廿一人有之、互(一)より(寄合)ある、相伴中(動)う(一)こ(二)き申候、其時飛驒殿耳入、く(曲)せ事なる事かな、両方切腹可申付而御申候、然共右之通を一々御聞候て、偕も昔の主人を武道をひ(轟)いき仕事、侍(二)ハ尤(三)存候、然共加藤九郎兵衛申分、いよ(一)尤、内藏介末森(一)・はず(一)の間、度々合戦(一)打(一)ま(一)け候間、六介先主之いげんハ、申分有間敷と飛驒殿御笑候て、御意(二)て兩人中

なをり仕候由、し(衆)ゆ(衆)らく(一)にて千石徳斎へ參候て、殿様へ御物(語)かたり被申上候へハ、侍と云ものハ有かたき事かなと、御笑候て、其加藤九郎兵衛と云ものハ、かすかにお(一)ほへ申候、おれ(一)ヲ内にて越中取合之時分、新座もの(二)候得共、り(利口)かう成もの(二)候、いつそや立退申候と聞申候、扱ハ飛州(二)有之かと御意候得ハ、其利家様御一言(二)て後、九郎兵衛千石(二)罷成候、偕其以後富田主水・川島左兵衛なども其時、加藤所(二)喧嘩之時相詰候而有之候つる由、物語被申候事、

一、村井豊後義、花藏房事(二)付て殿様御中たかみ、半年あまり引こ(三)ミ有之時、勘十郎(一)殿様(一)きんちやう御うたせ、人(二)申など御意(二)て、十月廿五日(二)ニ、金子(一)ヲ三(一)まい、鶴一、かん(本)はやし(一)極袋茶(一)たい被遣、心(二)おれをうらむるな、おれか家中をかた(一)ニして、豊後(二)おもひかへる事ハなく候へ共、以来諸人の見せしめ(一)ニ、中(一)たいして有之候、其心得仕、これを料理仕、茶たへ候へと御意候、鶴おは御看奉行(二)よのかり事申候て請取申、勘十郎申事(二)候へハ、かしこまり候由にて渡申事候、右之通申聞候へハ、豊後も母も左馬助(村井長次)・勘十郎も忝あまり(二)、涙(一)ニむせひ、右を料理御茶被下候、其通御請を申上候へハ、殿様も御(一)な(一)ミたくミ被為成候事、

一、伏見(四)にて殿様御居間之わきかこひにて、浅野(浅野長政)正・徳善院(前田玄以)・金森(長近)法印御談合事候、火袋之間へ戸田武藏・猪子内匠・上田(重安)主水・土方(維久)勘兵へ殿御出候て、不破(直光)彦三・長九郎(通能)左・徳山五兵衛・高山南坊・奥村伊与(永徳)・村井豊後(長頼)・寺西宗与・三体など咄有之処へ、右四人之御衆御出候て、色々御咄共ノ上(二)、武州御申出候ハ、我等(二)は別而御目を被下(一)□申(二)てハ無御座候得共、今之世(二)も昔も(二)候、あるいわ人数千共もつ身上、又ハ国郡もち多、大名(二)成おは尤手柄と申ながら、其身之仕合よきと申事也、利家公之御儀ハ、父見ハ二千貫之家、佐々内藏助兄之跡三千貫之家(成政)ニ候、然共利家公、前田之弟子(二)候故、十四(一)ニて信長公へ御小々性(二)御出、初ハ五十貫御取候由、いつも(一)御意、

(16) 〇六七五・六七六頁

一、大閣様聚楽御城ニ御座候時、御手自御料理可被成旨にて、かうそそうす奉にて利家様を召候時、森勘八、其時御門番仕候、御小性一人にて御入候へと申候時、おれハ虫持病ニ候間、不斗入事候間、小性二人召つれられ候ハんと御申候所ニ、勘八、少まへ年、肥前様へ御普請場にて之いしゆ候故、利家様へあたり、やくらに有之、御法度之由ニ申せと申候、其を殿様思召、御はらを立られ、其ま、御出頭なく御帰被成候、其時又かうそそうす奉にて、上様御料理をまちて御座候て、筑前ハくと御意候と使参候へハ、御門番入間敷と申候と御返事被成候へハ、かうさうす笑止かり、浅弾正殿など、御相談候て、松原ほうき御迎ニ被参候而、□の御門ハ御入被成候、其義後日ニ上様御耳ニ入、後勘八ニ余人替たる筑前を入間敷事ハ、供之者多候共、筑前ハ不苦儀御意候而、御機嫌悪、浅弾正殿□ニ被仰付、勘八内それニ在合たる侍二人、腹さらせ被申候、扱も勘八いたされやうハ見事なる事と、天下ニ笑申候由ニ候事、其ハ後、殿様江勘八出入不仕候共、其後勘八、民部少ニ成申候、御理色々被申候而、出入被申候、猪子内匠殿・宗無・森豊後殿など後迄も御申出候而、か様のきびのよき事ハ覚不申候由御申候、其頃ハ村井左馬助・富田左大夫・依田主水・奥村織部など、中小性之由、物語有之事、大閣様御一門衆、扱又御取立衆、何も殿様御代ニ知行被下候衆、

- 一、前田五郎兵衛殿 一、前田右近殿 一、前田対馬殿
- 同孫左衛門殿 同又次郎殿
- 一、中川武藏殿 一、青山与三殿
- 同 御取立衆
- 一、村井豊後・同左馬助 一、奥村伊与・同織部
- 一、篠原出羽 一、山崎庄兵衛 一、片山内膳 一、岡島帯刀
- 一、近藤善右衛門 一、富田大炊 一、半田半兵衛
- 一、木村三郎兵衛 一、富田次大夫 一、北村三左衛門

一、山崎彦右衛門 一、奥村与兵衛 一、岡田長右衛門

同源太左衛門

一、神谷左近 一、小塚権大夫 一、高島平右衛門

一、寺西善太郎 一、奥村弥左衛門・跡め采女 一、松本監物

右御取立衆、此外千五百・式千石も多候事、昔よそにても人持・大名、御家ニても御知行取衆

一、不破彦三 一、長九郎左衛門 一、高山右近

一、不破源六 一、徳山五兵衛 如此候事、

一、利家様なこや御陳ニ多年被成御座候内ニ、利長様未越中三郡悪所知行被成、人数も多御持候間、御台所人も多有間敷、御すりきり可被成と御案事被成候義、利長様御聞候而、扱も御年よられ、長陳被成ニ、左様ニ我等事をすりきり可申候と御あんし忝思召候也ニ而、なこやハ御帰陳之明年之春、しゆらくにて、あかね袋ニ金子を入、五百まい入、大納言様、肥前様御持参被成候而、おくにて村井豊後・奥村助右衛門を御使ニ而、□思召候へ、是程たくはへもち申候由被仰候へハ、殿

様殊外御満足被成、御機嫌よく、夫程とハおもはすあんし候由御意候而、金子千枚まいらせ候ハんと思召候つるニ、見せ被申事、父母ニ孝行仁と御意にて、其後卯月、大閣様を職掌之御成も済候而後、村井豊後を御使にて、まつ金子千枚ニして御もち候へと、何事ニ付ても心あんし不申ものにて候よしにて、五百枚利長様へ御進上候、利長様御満足被成、大かたならす候て、豊後ニ其時、金子廿枚・御あわせ・ひとへ物など被下候、年寄衆御咄、扱も互ニ御父子様名大将かなと泪ヲなかし被申候、偕三体、□父父タリ子子タリトハ加様之事を引事を申、かんし申、人ハいつれもく尤候と被申候事、

一、なこや陳前年の物語、丹羽権助と上村孫一、百性公事い、下ニ而

濟不申、前田五郎兵衛殿にて、いつれも高島織部殿・徳山五兵衛へ殿・寺西宗与・松本伊兵衛・岡田長右衛門・村井豊後七人、御意にて公

寺西宗与・松本伊兵衛・岡田長右衛門・村井豊後七人、御意にて公

寺西宗与・松本伊兵衛・岡田長右衛門・村井豊後七人、御意にて公

寺西宗与・松本伊兵衛・岡田長右衛門・村井豊後七人、御意にて公

寺西宗与・松本伊兵衛・岡田長右衛門・村井豊後七人、御意にて公

にて罷出候間、有明を出し申候て、あたりミ申候へ共、ミへ不申候、
扱もそれる三日めニ、御馬廻渡部半十郎こや火出、殿様御殿も不殘
やけ申候、是天狗之つけかと、是三付ても殿様おし事ハ不被成事、
一、なこや御陳にて神谷信濃、未左介と云時、御城御能之刻、殿様御供

申候処、一帰やとへ帰、昼時分又御迎ながら見物ニ罷立候刻、御聞番
衆と申分候て、ほうを以て打たれ、信濃左ノ方額にあたりちたり、後
までも其きす御入候、其の上様御小性衆も信濃二名を付、なこやぼう
州とかけにてもわらい被申候、御家中ニも左様ニ申候、然共若とうニ
殿様御すてなく候、其後桜井勘介御せいはいの時分信濃きり不申事を、
猶以心中ヲいかミりきりとハミへ申候事、

一、岡田長右衛門、昔能登にて新川儀大夫ニわる口を申、其いこんニ
陳小屋新川なしこみ、長右衛門をかためきりつふし、うしろ一刀切、
後迄も右ノ眼六寸斗きりつふし、うしろハ大疵一尺斗、大きす二候、
あれほとひきやうものニ候処、大疵おひ氣かつよく生てい申候事、
ふしんと後迄も皆々申慣、あたまをかつそうして、御右筆一種ニ召お
かれ候、其後新川儀大夫、御家をはしり、上方へのほり、大閣様未
柴田殿と御取合之時分、御奉公ニ罷出、しゆらく之時分、上様之御馬
廻にて、殿様へ御理を被申上、かさを御覽、おりく出入被申候、殿
様おほしめすも、重而長右衛門、儀大夫とはたし可申候と、内々ハお
ほしめし候へ共、其心なく其時半田半兵衛、長右衛門と別而ねんころ
ふりニ候ゆへ、助太刀打可申候間、儀大夫とはたし候へと達て異見申
候へ共、長右衛門同心なく候故、其の半兵衛もミかきり之事、

一、関東陳之刻、信濃地にて景勝人数ハ先手、殿様ハ北国之大将ニ而候
故、跡ニ御打候処、越後人数おいわけにて越後人数少おそなほり候を、
おとろき候て、殿様御先手不破彦三・村井左馬介人数行か、り、先
をあらそい、景勝人数、直江山城ものと村井左馬助ものと喧嘩出来、
きりあい申候、左馬助のほりさしを、直井もの、あらそい打たおし申

候を、弥五郎と申、久々豊後召仕申候下人、跡先をおそきはやくと
ありき申候ものニ候を、直井のほりさしをほうにて二人打たおし候へ
ハ、彼のほり大将、弥五郎をかたを一刀きり申候所を、長柄の鎧を弥
五郎おつとりて、直井のほり大将を前分うしろへつきふせ申候、殊外
大成事ニ成申さうニ候処、殿様御威光つよき故、其ま、互二年寄衆出
合相済申候、此方ハのほりさし一人打たをされ、弥五郎少手をおい申
候、越後衆ハ具足着壱人つきころされ、のほりさし二人打たをされ手
おひすミ申候、殿様御威光と申候、後までも年寄衆咄被申候事、

一、羽柴筑前守利家北陸道之大将
右ニ申付人数

一、越後之喜平次景勝 一、丹羽五郎左衛門 一、木村常陸守
一、真田伊豆守

右加賀筑前守利家下知次第、人数立仕合戦可仕者也、

三月十六日 御朱印

一、なこや御陳御引後年三月、大閣様・政所様其外、御手かけ衆、か様
をはしめ、吉野山へ御花見、其の高野山へ御参詣、其の聚楽之御たや
へ御帰居被為成、筑前守かたへ職掌之御成仕候へ由被仰出、俄ニ御
用意候て、卯月十三日ニ被為成候、天下初而之職掌之御成ゆへ、日本
侍も其外うこき申候、其時御位も中納言ニ殿様被為成候、其年一番ニ
利家様、二番蒲生飛驒守殿、三番あきの森殿、四番江戸家康、五番
備前中納言殿、六番越後之景勝、此六人江御成にて候、其時も天下ニ
物はしめ、か、中納言利家公被成候由申慣候、扱佐竹・正宗其外国大
名衆、職掌ハ不罷成、御茶を被上、御進物被指上候事、
一、其暮十一月、聚楽御城関白様へ大閣様職掌之御成御座候而、五日之
間御在城、上下共ニ氣を詰申候事、

躰ノ時、殿様被仰候ハ、遠州ときつく被仰候へハ、御眼色をミられ、
そつと謹而ノ時、若人ニ異見可申候、そうして侍ノ物語咄ハ互ニ慰候
間、一人つゝするかよく候、責所ハこれとニ、三度おほへ申候、人の
物語咄ヲ仕出ヲき、もせず、我カ物語斗をめされ候、其ハあしく候、
人ノ咄候ハ、よく聞物、我カ咄するか、昔分よく候と申候、今ほと天
下目出度候、信長公の時分などニハ、左様事までも吟味して、我ま、
ヲハいわせ不申候、あるいわ武道之義せりあい候事も、互聞届申もの
也と、ノウ武州などもおほへ可有之御意候へハ、武州手を御つきは
つとはかり被申候、其時遠州かほ、あかめ、忝御意ニ御座候、以来か
うかくニ罷成候と、頭ヲうなたれ御あゐさつニ、扱御茶を殿様御自身
御立、いづれもへ被進候而、御亭主ふり出申候、何も忝かりまいり、
其御帰跡ニ殿様御意ニ、おれか所にてハ片山伊賀・江守半左衛門兩人
はうはい共ニ、あのつれを申人の物語ヲきかす、我咄斗申候、さた
のかきり、夫ハ舞まいさるがくハ左様ニたれかわきにて咄申候ても、
まいかたりうたひか、り候へハ、かまわす我云事をとをす俣ハ、百性・
町人・小者共などのつきあい候やうなる事共ニ候と御意候へハ、殊外
江守ハ其分たしなミ申候、其二、三日過、浅野正殿御越候而承候へハ、
平遠江をつよく御異見御しかり被成候由、さりとてハ御尤ニ奉存候、
我等も異見申度、久々なしミ申候間、おいゝニ可申存候得共、中
く聞申間敷と存ひかへ申候、こなた様御意なれハこそ忝躰仕候へ、
我等なとつよく申候ハ、喧嘩を仕かけ可申と御わらい候て、修理・
くれ松申聞候由、御わらい被成候事、
大閣様分御自筆ニ而利家様へ御書写共
先度上路之刻、早々対面申候、去年関東ニおゐて松枝・八王子の
てから共、但人口ニ分しミゝと礼も不申候、其方義さいしやうニ
くらいあけ可申候間、其心得可有之、何事も近日面之時分可申承候、

恐々謹言、

三月十九日

秀吉御判

羽柴筑前守殿

同御書、なこや御陳ニて御自筆写

今度ハ唐人数万騎、人数出申候由ニ付て、先夜ハ貴所罷越、我等名代
大将して唐四百余州を切したかへ可申旨望被申候儀、誠ニ手から之被
申分、不初今儀と申ながら大慶申候、然所ニ彼唐人共わひ事を申候、
人数も引入申候由、注進申越候間、此度ハまつから入ハ指延可被申候、
何事も以面可申候、恐々かしく、

九月廿一日

大かう御判

羽柴筑前守殿

同上様御自筆、なこや御陳ニて御書写

昨日ハ御茶給候て、過分存候、殊いろゝちそう之段、満足申事ニ候、
露地之躰、作事可申様もなく、御数寄之事ハ申ニ不及候、猶面にて可
申承候、恐々かしく、

十一月九日

大かう御判

羽柴筑州 参

尚々此ふくろの地進之、

右三通ハ御かけ物ニ被成候ておかせられ候事、

一、殿様御せうそく被成、御参内か御登城ノ時ハ、いつもいつも御
ふところわきさし御指御座被成候事、

一、なこや御在陳ニ御作事出来御座候時ノ殿様御物語、又ハ年寄衆も咄
被申候、夜詰過候て、奥江被為入候処、御庭ノ前之かうし御座所を
のそき申候を、殿様おほしめし候ハ、女ほう衆之被入候所をのそき申
候と思食、御腰物を御取せとへ御出候由、おくニ入、少将殿 御
機嫌悪とおもひ、人を御出し中の間までも、彼是被申付候所、せど分
御台所へ御まわり御らん候へハ、大いりりニ火ヲふき申候を、ふしん
ニ思召、御腰物おし つかつと御入候得者、大入道ちらと見へ候て、
いつかた共なくミへ不申候、扱其おくニ御台所人飯塚・小飯塚、二人
へや有之候ゆへ、罷出候へ者、御意候へハ、きもをつふし、取刀之躰

衛・江守・三体などハ後迄も申候へキ御意ヲ承り、伊与・伊賀などハ少へんえしかほも候へ共、豊後ハ忝義候共可申上躰なき、色々其時三体、誠ニか様ノ御意、これそ君臣讓功にて御座候とかんし申躰、御国目出度御義と洩くミ申上候へハ、それよくと御意にて、いよく御機嫌よく、か様ノ事ハ書物ヲもかつてんするものハ其通と御意候、豊後ハかうへを地ニ付、忝御義と存躰御座候、いつれも問申候て、三体ニ講尺を問候て書付申候、殿様此文功ニ御意候事、

一、おちよ様、長岡越中殿御子息与一郎殿へ御祝儀之まへ日、大符・浅弾正殿・金森殿・戸田武州・内匠殿、其外いつれも廿人斗御見廻衆詰テ御座候時、色々御咄共、昔ノ御物語、若キ大名衆ハ一間次にて御咄色々候、金松又四郎事、咄ニ出て、其ついでニ内匠殿・武蔵殿、今ニ存出、きふにて又四郎を御亭主様御しかり候事を御申出候へハ、加藤左馬殿・浅左京殿・平野遠州・□□権助、其外之衆、此義かくれなく承及候間、承度由御問候へハ、其分こゑ高く御咄ニ成、おく之間ニも御咄共候、武州・内匠御咄候へと、加藤左馬助殿・浅左京殿御申候へハ、そこにて兩人御咄候、きふすけのや所にて福留平左衛門・はちや出羽・佐々内蔵助・金松又四郎・武州・内匠、其外二、三人咄有之時、又四郎高名を仕たるいけんヲ申候所へ、利家御出被成候時、又四郎、我等其時之義、又左など御存候由被申候へハ、御亭主様、我等など左様ノ所まで行と、き不申候間不知候と御申候へハ、又四郎氣ニかけ候時、利家御意、せかれめか、なにをはちかみのくいあわせをしてと御申候て、平左など御入候て、あのつきヲいわせ候て、よく聞て御入候由御申候へハ、平左、其御事ニ候、先程分耳をこやしますると御申候、其時又四郎、ぎやうさんなど云、互にぬきあい被成刻、皆々中へはいり被申候時、はちや出羽・又四郎と□□道之知音ゆへ、其ま、又四郎をひつたてつれて帰申候、大坂ニ少はしかみのくみあわせしてと御笑被成候、其後御番帳きわまり候時、又四郎も利家ノ御番与ニ書

付有之罷成候時、又四郎か番袋ヲ取て御なけ候て、おれか番へハあのやう成ものハ入間敷と被仰時、後日ニ福平左・すけのや九右ヲ頼、大納言殿へ理申、偏はちや御おんニうけ可申候間、奉頼由にて御中なをり、其分利家公へ出入仕候と、色々御物語御兩人御咄候へハ、おくの座敷分金森法印・浅野弾正殿・有間など、久々ニ御亭主様御若キ時の御はを被出候事承候由、とつと御わらい事ニ御申候へハ、殿様何事を武州と内匠ハ被申候、とかく昔はうはいはいやなものと御わらい被成候、尤若衆ハ耳をたれ承候、左馬殿・左京殿などハ、きひのよき事とおほしめしたる躰ヲ被成候事、

一、殿様御咄、甲斐国高とうの城しやうの助殿せめ候刻、御手柄有、其時御年若キゆへ、侍共善悪ヲ殊外かけさたなど御申候、其故皆々心懸ノ侍共、中ニも城へせつ所にておそくせめのほり候者之義などを、さんくニ何ノ吟味なく御申候ニ付而、侍共ノ中ニも無念とおもひ有之時、彼明知無本ノ時、二条へおそく取懸候時、しやうの介殿鐘ヲ御もち候て、いかにくと兵共ニ御意候得共、又候哉よわき事申と自然御運よく御なからへ、後ニさけすまれ間敷と心得、兎角是にて御待請打死と御心得可被成旨申候由、其内ニかけおちの者も有、御供申、皆打死する大将と云ものハ、よきはたらき仕ものハ不及申、手柄感状も遣取立候、又あしきとおもふ侍もよく心ニ吟味する物也、左候者是非共一度用ニ立、打死可仕とおもふものにて候、悪口などを武道事ニハ侍ヲ大将ハ云ぬものニ候とこそて、此人ヲくちをこミ可申候とおもひかたきニ成も内の侍と、肥前様・孫四郎様へ度々御居間にて人なき所にて此御はなし被成候と承書付申候、

一、殿様へ平野遠州・戸田武州・大野修理・くれ松など日暮ニ御見廻ニ被參、御咄候所へ、猪子内匠・津田長門なども跡分御見舞御咄候、三体・五兵へなども罷出咄候へと御意候候、遠州上の衆之咄ヲ聞もとけす、咄ノ内ニもぬしの咄仕出候咄被申候へハ、武州なども殊外腹立さう成躰ニ候、あまりく遠州咄ばかりを被申候得者、御座敷さめたる

候て、か、様御ふところへ御入候を御らん候て、殿様もうへ様もおくへ御にけ入候故、かうそつ御尤くと、あいのしやうしを立候て被罷出、其をしほ二被来、其ま、殿様共御中なおり、大閣様被成候天下ノ上下承及、扱もく御かるく敷名天下持、跡先有之間敷御事と申慣候由、後々迄も年寄衆・御咄衆被申候事、

一、いなミと申京ノ本卦取手柄、利家公以来日本かたふたか天下もち可被為成候、越前府中ニ而本卦取申由、戸田武藏殿御母儀ノ死去之事、扱又一六ノ御子者、肥前様、扱又御家中村井豊後子左馬助、右近殿御子又二郎殿、近藤善右衛門子弥六、奥村助右衛門二番子又十郎、いづれもくさんあい申候由にて、京・伏見いなミ七十あまり之坊主ニ候、殿様へ御見廻ニ参候時ハ、おもておく共ニ見とおし参られ候由にて、手ニすへ候様ニちそつ被成事、

一、大納言様御居間にて柳瀬御陳儀、肥前様・孫四郎様・土方勤兵へ殿へ御咄被成候、肥前ハ其所よくおほへ申候由御意、御前ニハ徳山五兵衛・寺西宗与・村井豊後・三体・奥村伊与・岡田長右衛門六人居被申候、金左衛門・勘十郎ハかよい仕有之時、木村三藏・小塚藤右衛門、ひるいなき討死仕候、前田又左衛門内、両人名をなのり、四、五度つきあい討死候、富田与五郎其外四、七人ハ、廿間斗立退討死致候、扱もく三藏・藤右衛門ハ一入ふひん候ゆへ、三藏か兄作右衛門ニ三千石、藤右衛門か弟藤十郎ニ三千石遣、鉄炮兩人ニ七十丁あつけ、越中之さかい之城ニあつけ置候、いさひ之義は豊後よく存候、豊後ハ朝無比類首ヲ取参候故、其ふさきを見せニ遣申候内ニ、はやはいくんニ成申様子ハ、よく豊後存、富田与五郎父次部左衛門、平法之家ニ候間、六百石遣置申候へき、次部左衛門死申候間□也、又ハ与五郎子ニ候間、せかれ共今ノ与五郎ニ六百石ながら遣置申候由、御意ニ候事、

一、殿様昔御物語被成、おれ十四分具足着初、其頃八十日共具そくきぬ事無是候ゆへ、なこや陳おさめ之具足と存候、五百度や六百度と云

事なく具そく着申候、然共合戦又ハ鐘ハ度々ニなきもの也、其内ニ心はし有時、手をおい候か、又ハ首を取鐘を入候ニあい申候、それさへ浅井合戦之時も、首を取候へハ、信長公御馬廻安井六兵へと云もの、らう人ニて有之、手にあい不申候ゆへ、又左殿とこととはをかけ候間、其首とらせ御前相済申候、長篠合戦ノ時、朝首取候へハ、是又信長公御小性に今井一郎右衛門と云者、これらう人にて手ニあい不申、又左殿奉頼由ことはをかけ候間、とらせ遣相すまし申候、扱其以後、我等ふか手おい申候、然共豊後我等ニ手をおかせ候ものを、おいつき首ヲ取申候、おれ其日首までも合すれハ、一代ニ廿六取申候、かたのこくとく信長公御家にてハ、我等も首数も取申候内にて候処ニ、今きけハ越中にてたれやらんか、首三十ノくやうした由おかし候、夫ハ或ハ百性を切ころし、内ノものをせいはいみたし候て、合首三十三と首くやうと存候、左なくハ具足を三十三度着申候をおほへ候て之事かと被仰候へハ、年寄衆・咄衆尤くと御かけニても被申候、有時金森殿・武藏殿・内匠殿など御出候て、色々之御咄ノ上ニ、右之御物語被成御笑候得者、こなた様などノ首くやう被成不申候ハ、今ノ世ニ日本ニハ有之間敷と、いづれも昔ヲ御かたりニて御わらい被成候、云度ま、ヲ申ものトミへ申候由、おのくとつと御わらい被成候、其座敷ニ長岡越中殿など其外二、三人御座候へ共、年若キ故、謹而殿様御物語ヲ御聞御座候事、

一、伏見大地しんゆり申年、十一月廿一日ニ御夜咄ニ、殿様御機嫌能色々御咄候上ニ、越中内蔵助と御取合ノ御咄有て、村井豊後ニ御意、はずの間焼候事を被仰出、昨日かけふかの様ニおほへ申候な、我等ハおれニ手柄をゆすり、おれハ其方へ手柄を今ニ不初と、たかいニ云候義と御意にて、其座ニ徳山五兵へ・寺西宗与・奥村伊与・中川宗半・斎藤刑部・片山伊賀・江守平左衛門・三体・富田長右衛門・奥村長兵へなと、御前ニ人多居申候、其ゆへ聞しれニ猶以御意とミへ申候旨、五兵

ともなくす(煤)、に火かつき(付)、ふすもり五ヶ所一ほとはや、さし物も(燃)へ候て、
ふすく(燒)とやけ申候ヲ見付候て、皆々水ニてきやし申候、扱もく(奇特)
きとく千万、いなり大明神ヲ、大閣様御しんかう候へ間、其御つけと
上下申慣候て、大納言様御登城被成候て、秀頼様分御ほう(褒美)ミ共拜領申
衆も御座候事、

(94) ◇五三〇～五三四頁

一、伏見大かめ谷にて、大納言様御下屋敷渡候て、いづれも有之候処、
大閣様俄ニ殿様へ、三月十五日ニ御普請場分すくニ被為成候刻、村井
豊後御門ノ内ニ万事申付、御目見仕候へハ、上様御意、やれわすれた、
あの(懸)大ひけニ大納言近辺ニ屋敷とらせ可申ものとおと御意候て、ふんこ
橋(懸)のきわニ明屋敷候を、廿三間・廿八間之御屋敷を其日ニ被下、天下
かくれなきふんこ橋(懸)之きわニ候間、わか名も豊後、後名高ク罷成候
由、御機嫌よく御わらい被成候、其時殿様忝旨御礼被仰上候、其刻不
破彦三(直光)わと上様御意候、久々相煩、国ニ罷在候由、殿様被仰上候へハ、
ふ(不便)ひん成と御意、扱其時、徳山五兵へにも御屋敷可被下由、廿間・廿
間之屋敷ヲ被下、柴田修理を我ま、ふしたる五兵へ、今ハ大納言内(直)に
てほゑひそけニ有之由御笑被成、これ兩人はかり、上様より御ちき(直)の
屋敷被下候、殿様忝おほしめし、御礼被仰上之事、

(95) ◇五二二頁

一、関白様御屋形ニ新川郡相そへ、大納言様御拜領被成、八月廿四日ニ
御わたまし候て、十月廿四日御つほ口切被成、御茶上候へ被仰出、大
閣様俄ニ被為成候、御相伴ハ大苻(徳川家康)・金森法印(長近)・有間法印(有馬則頼)・有楽(織田)にて御
座候、上様御機嫌よく書院へ御出被成、夜半迄御座候被成□候、同廿
六日ひる(昼)分肥前様(前田利長)・孫四郎様(前田利政)、御相伴ハ土勘大夫殿(土方勘兵衛雄久)・村井豊後(長後)・奥
村伊与(永福)、御相伴可仕旨御意にて、御機嫌よく夜半まで御数寄やにて
御咄御座候、同廿七、八、九日之晩まで備前中納言様(宇喜多秀家)・浅野弾正殿(長政)・
長岡越中殿(細川忠興)・正宗殿(伊達政宗)・羽柴下総(堀川雄利)・戸田武蔵殿(重安)・上田主水殿(重安)・奥山佐渡(長房)・
新庄(直頼)するか殿(直頼)・羽柴久太郎殿(堀秀治)・かすや内膳(治長)・大野修理(長房)・杉原ほうき(長房)・
平野遠州(長泰)・千石越前(仙石秀久)・半入、其外六、七人御茶被進候事、

(96) ◇五三〇～五三四頁

一、同霜月三日之朝、御家中衆又ハ肥前様衆御ふるまい(振舞)、其通御意に
て、人々それく(直光)ニなおられ候、御書院次ノ間までおしはなし左座、
不破彦三(直光)・高山南坊(利好)・前田孫左衛門(吉次)・青山与三(長知)・太田但馬守(長知)・村井
左馬助(長次)・岡島備中(吉)・徳山五兵へ(延高)、右座長野九郎左衛門(定吉)・高島石見守(定吉)・
中川武蔵守(光重)・山崎少兵へ(庄)・片山内膳(延高)・不破源六(伝朝)・奥村織部(栄明)・寺西宗与(定吉)、
右合十六人御ふるまい被下、御茶ニふく立、御自身御一ふくく、
殿様御持参被為成、右座分被下時、豊後参候へと御意にて亭主被成
候、右座ノ時ハ伊与参候へと御意にて、是又亭主ニ被成候、加様ニ御
吟味をあいく(懸)ニ被成候、其頃豊後ハ金沢御城代ニ罷在ヲ、御屋形・
新川郡拜領候、即ちちと被上候様ニと御意にて罷上候、誠忝御事ニ豊
後申事ニ御座候事、

(97) ◇五三四頁

一、右之外、六、七千石分二千石まで之衆、其外物頭共、合三十七、八人
御ふるまい被下、御茶も豊後・伊与亭主ニ被成下候事、

(98) ◇五三四頁

一、殿様せつく頓(節句)而御登城ノ時、又ハよそへ御ふるまいニ御越之時、御出
□被成候御相伴、有楽(織田)・浅弾正殿(浅野長政)・金森法印(長近)、又者大苻(徳川家康)なども御門
外迄御出候而、のり物ニまちて御座候へ共、右之通り出□ノ時、若
も(乗)の共いつもく御出□と申候へ者、豊後(徳山)・五兵へ(寺西)・宗与(奥村水橋)・伊与(連)
とを(連)はしめとして被申候ハ、何より不入時ハ御くせニ候間、おそく御
出候ても不苦候、朝日山敵出申時、末森ノ時、はずの間ノ時、其外度々
入時ハ一番ニ御のり出、先手ノもの共も跡に成候様其まま御出、御大
将ニ候間、加時(マ)ノ時者おそく御出候而もくる(苦)しからぬと被申候事、
一、大納言様関東陳にて、上様御前ヲさ、多悪ク御帰陳候て、明ル年(天正十九年)
しゆらく(繁榮)にて御中なをりし(祥雲院)の事、か(端)様殊外をこりを御煩候て、御
心あしく候時、か(孝藏主)うさうす参つきて居被申候へハ、上様不斗御成候由
付て、其後日殊外おこり大事にて候故、大納言様御う(芳春院)へ様も、か、
様の枕もと(定)ニなみたくミ御座候所へ、大閣様ふと被為成候時、か、殿
さためて見廻不申候事、腹立にて候ハんよし被仰、其ま、帯を御とき

扱又大勢咄座へ参候共、おれとハたれ中かあしいそ、たれとハのかれぬと分別して、あるいわ中のあしきものか、かう言たらハ、とういわうそ、はつたらハ切てくれうそ、又ハ間よきもの言事仕出シ候ハ、かうさやういとむねにもち候て、人中へ出物也、なに心なくうろりと□□^(本マ)六月ニかまへ、人中へ出候得ハ、必なに、つけてもおちとを取物也、偕こそ武州、今ノ咄ヲ聞候へハ、昨日飛州座敷にてうろたへたるもの共、はちをかき申候なりと御意、人ニ逢候時ハ、いしゆなきもの共ニハ、つねハいかにも多かははなさず候様ニする物也、信長公も此御意ニ候、其心得尤と孫四郎様へ御意ニ候、年寄衆、御尤文武御大将と被申候事、

一⁽⁸⁸⁾、勘十郎十五ノ年、十月二日ニ大虫ヲおこし候へハ、殿ときこしめし、^(部屋)へやへたて御使、^(医師)くすしハ月齋、^(針立)はりたてハ上しゆんヲ付おかせられ、其外しゆようなども参、^(脈力)腹をとり候へと御意、其内ニ虫おさまり候へハ、重而御使被下、今少悪候ハ、おれか見廻可申候とおもひ候へハ、早速よく候、後養生仕候様ニと善僧御使ニは、これを慰ニ仕候へ由、□□御菓子持セ被下、皆々詰テ有之衆も、扱も忝おほしめしとな^(流)をなかし申候、其内煩内ようニ成候へハ、殿様きこしめし御きもをつふされ、やとへ罷越候へハ、京ノ三条ノ外きやうけいゆう^(遺)法印をよはせられ、つくろい候へと御意候、然共次第におもく成申候へハ、扱も扱もふひんニおほしめす、其頃父豊後、金沢城代ニ被仰付有之、勘十郎義おや共ノ一入かわいかる子ノ事ニ候間、殊ニハ国ニさかしりと云、上手の外きやう有之間、何とそして金沢へ下、養生させ候へ、死共生ルとも、父母ノうらミき不申候様ニと御意にて、先ヲ村井左馬助ニ被仰付、其時分御普請ニ上路仕、左馬助居申ゆへ、忝泪をなかし、御請申上、けい□□てし□□迄、殿様御意にておくらせ被下候、豊後も母も金沢にて御意共承、忝あまりニふしころひ、泪ニむせひ忝かり申候、先さかしりをよひ、□物ミせ候へハ、百四、五十日にて平噓いたし候へハ、扱上路いたし、伏見にて御礼申上候、殿様殊外御きけん

よく、豊後殿満足すいりやう申候由、御笑いにて御機嫌よく、御小袖道ふくなど被下、忝奉存候事、

一⁽⁸⁹⁾、なごや御陳引之暮、しゆらくにて孫四郎様御祝義之刻、蒲生飛驒殿御申候ハ、上様御暇被下候間、我等も相済可被下候故、利家公も御国へ御下可被成候哉、とかくニ互罷下跡にて祝義可然存由被仰候、大納言様尤存候と御意候て、先肥前様御きも入、村井豊後を殿様御名代ニ御残置候由被仰出、数年豊後者なごやニ相詰候へ共、此度上方ニ残置間、孫四郎祝義相済罷下候様ニと御意候、いかやう共と豊後御請申上残り申候、飛驒殿家長ニ蒲生四郎兵衛・町野左近など飛驒殿名代ニ有之候、

一⁽⁹⁰⁾、長持七十五丁、一のり物廿八丁、其外色々しゆらく立はしまりてノ大なる御祝義申候候、

一⁽⁹¹⁾、其時豊後守ニ金光ノ刀、一、小袖三重、一、金子五まい被下候、斎藤刑部ハ飛驒殿殊外御かわいかり被成候ものゆへ、これをあいさつ人ニ御残置候へハ、刑部ニ兼定のわきさし、小袖二重、金子三枚、か様ニ飛驒殿めいくニ被下候、

一⁽⁹²⁾、殿様今蒲生四郎兵衛へニ、うのつノ刀、一、小袖三重、金子五まい被下、町野左近ニ、一、わきさし、一、小袖二重、一、金子三まい被下候、其時、奥村助右衛門も斎藤刑部同事ニ飛驒殿被下物候へハ、助右衛門被申候義ハ、豊後殿とハ我等下めニ被仰付義、不及是非次第共御入候、斎藤刑部なみのあしらい、これと申も殿様被成やうゆへと腹立被申候を、松山と申すよこめ坊主、殿様へ申上候へハ、云ニおよハす、豊後かまねハ成間敷と御意候事、

一⁽⁹³⁾、大閣様御遠行之事、十二月す、はきニ、御たい所へきつねふと出申候、いつれもす、はき共おいまわり候へハ、そらへあかり、大さし物ノ上ヲとひまわり候、いつれもはしこをさし候て、おいかり見れハ、いつ

腹立候を、ぬれゑんにて聞、こらへ可申候と存候へ共、さうり取八大夫かお、ミ、あけ見候て、腹立申躰ヲ見付、それかはつかしく、立帰(言葉)ことはかけ打はたし、後そうり取もぬきはなし、二人して与兵へを切ふせ、扱皆々何事と出申候時、武蔵殿も長刀もち出候由御申候、其時右之次第知音共(語)二かたり、八大夫切腹申され候、とかく悪口若きものハ申間敷事と、いづれもく御物語共有之、其時殿様御意、○鬪殺基起自悪口、文ヲひかせられ、老若共二悪口ハたしなミ可申事と御意候へハ、金森殿・武蔵殿など御申候ハ、昔武井肥後守(夕庵)ニ御しう心御わすれなきと、いづれも御申候て、色々さ、めき御咄共御座候事、

(86) ◇四四四、四五六頁

一、唐陳之義、承候分書付申候、大閣様(名義屋)なこやニ御在陳被成時、いづれも屋形くも出来候、其時唐ヨリ人数出、日本之人数あしく二候由、唐令御注進被申上候処、大苻(藤川系孫)・大納言様其外日本之国郡もち、御加勢被遣御談合之刻、利家様被仰候ハ、先上様御□□もつたいなく存候、御人数ハ中国・四国・九州ハ不残、其外も罷越有之、もはや此上ハ大将一人御名代被遣、唐人共を引受、合戦仕義ニ御座候、私此度罷越、唐四百余州ヲきりくすし、御手ニ入可申旨被仰上候へハ、扱もく我等存やうニ望被申候、左候ハ、頼申由御意、其時大苻泪ヲなかし、我等義ハ筑前令国数も取申候、望可申と存所ニ、筑前守ニこされ候と泪を御なかし候、扱殿様被仰候ハ、それハ家やす被申分尤ニ哉、但筑前か是ニ居不申候時、左様ノ分別候へとつよく被仰候由、然所ニ上様、何事も被申分無用ニ候、此度も筑前被申分、満足申旨御意ニ候、然所ニ大名・小名、あの家やす(空立)と申衆多有之由ニ候、扱殿様屋形へ御帰宅ニて、舟共御用意、扱加州へ御仕置ノ御使、もはや二度日本へ帰申間敷候、野村七兵衛ヲ被遣、しゆらくニ御うへ様、越中・金沢肥前様へ御自筆ノ御書にて、若百ニ帰朝申候ハ、唐国迄も切取、名ヲ上候与存候へと、御直書ニ候、御家中いづれも大名・小名皆々、豊後・左馬助ヲはしめ、ゆいこん(道言)同前申越候、日数九日之間、不破彦

三・長九郎左衛門・中川清六・高島織部・片山内膳・青山与三(吉次)、前又左衛門殿名代篠原出羽・奥村助十郎・前田孫左衛門・不破源六・半田半兵衛・北村三右衛門・富田左大夫・奥野与兵へ・岡田長右衛門・高島平左衛門・高山南坊・村井豊後・村井左馬助、其外御家中大名・小名、とやくくと御左右次第第二、舟出はすにて酒もりをして待被申候旨ニ而、其内ニ唐令(降参)こうさん使者出来候ハ、まつ無事ニ成候故、殿様ヲハ上様不被遣、京・伏見、天下共利家様とらぬ弓矢ヲ御取、今ニ不初御名上させられ。御手柄と申慣候、家やすの其時之そらなきヲ、金森法印(長近)・蒲生飛驒殿(氏郷)・浅野弾正殿(長政)・有間法印(有馬則頼)・有楽殿(織田)など、其外戸田武蔵殿・上田主水殿(重安)・猪子内匠殿など御越候而ハ、御わらい被成候事、右ノ時 上様唐へ御書ノ写、

今度唐令人数出し申候旨、追々注進得其意候付而、秀吉為名代加賀宰相羽柴筑前守指遣、近日渡海申付候、此者下知次第ニ合戦可仕候、此旨申遣候へハ、筑前守申儀ハ秀吉下知存、誰々不寄背者於有之ハ、急度成敗可被加条、其意可存候、猶右之趣三人之横目共ニ申合候、其外ノ人数共、銘々筑前守可申渡者也、

九月七日

御朱印(豊臣秀吉)

右西国・四国・九州唐国ニ在陳衆不残名書有之事、

(87) ◇六四四、六四五頁

一、聚楽にて蒲生飛驒殿ニ肥前様(前田利長)・長岡越中殿(細川忠興)・木村ひたち殿(常陸)・山内对馬殿(豊)・戸田武蔵殿(重安)・上田主水殿(津田)・津田長門殿、其外四、五人咄ノ上、木村ひたちと山内对馬とまちかい出、すて二ぬきあわせられ候躰ノ時、御亭主飛驒殿と肥前様、両方へ引御のけ候所へ、武州・主水ハわきの座敷ニものをたん(談合)こうして御入候か、きもをつふし御かけ入候て、中へは入候て事ニ不成候、其外皆々きやうてんなる躰ノ由候、各ノ色々御異見にて、其座ニ中を御なおし候由、後日ニ武蔵殿、殿様へ御越候て御物語被成候、御帰之跡ニ殿様孫四郎様へ、若キものニ候間よく聞て置候へ、近所ニ有之もの共も聞置可申候、そうして侍ハ登城ノ時も、

一、聚楽にて関白様御城へ(豊臣秀次)大閣様霜月職掌の御成候て、五日之間御在城之其時ノ初日之わき能(脇)ニ、かんたん御座候、関白様御能御自満(後)ゆへ、御能(ミ)も関白様被仰出候、其後殿様へひの口・くれ松参り、其外(浅野長政)浅野正殿・金森殿も御出、御咄共ノ上ニ、さりとてハ今度大閣様御成わき能(ミ)、かんたん不可然、御能之由ひの口・くれ松なとうたひ候て、笑止わらいニ各御申候ハ、誠皆々か申由は不可然、わき能と御申候上下右之通申慣候、左様ニ候へハ、其明年七月、関白様御身上相果切腹被成、何事も忍(辛)くわ(華)一す(睡)いの夢ニ成申候由、善悪共二人々さやすりおふ物也と申慣候事、

一、大坂にて七月廿三日夜、つねく徳山五兵衛・江守平左衛門ヲ福島(正則)大夫殿御頼候て、舍弟掃部殿ヲ別而利家様御め懸被下候様ニと御理候て、夜ニ入、掃部殿御出候御亭主ふり出、掃部殿上戸ゆへ酒をあらため出し候へと被仰付候、しやくハ勘十郎取申候、御帰ノ跡ニ御機嫌悪事御入候て、善僧を御た、き、御台所へに遣申候を、おつけ候御出被成、あれとらえ候へと御意、取つき申躰いたし、善増(僧)ヲにかし申候へハ、つねに勘十郎か善僧ニ目をかけ申候ヲ御存候ゆへ、御はら立候て、勘十郎にて一ツ御打被成候て、二ツめニ御なけ打ニ被成候を、其扇を取候てわきへなけ申候へハ、にくきやつかなとおくへ御入候て、豊後子にてなく候ハ、せいはいも可仕候へ共と御意、二日ノ間、外様へおし出し被成候、扱其後御機嫌なおり、三日め廿五日ニ勘十郎めに出候て、奉公仕候へと申候へ、よくおもへは善僧も脇刺もさ、ぬやつゆへ、ワさと取はなし候てにかし申候、勘十郎氣かつき過候て、たれにてもおれかしかり候へハ、其ま、ことハ次第ニ其ものをきり可申躰之ものにて候由、忝御意にて御前へ罷出、誠ニ有かたき御事共ト、父豊後一入泪ヲなかし、岡田長右衛門・徳山五兵衛・寺西宗与・江守平左衛門・斎藤刑部・三休、其外皆々扱もくありかたき君臣ノ間、是も豊後殿御子ゆへ、扱又よく御奉公被成候ゆへと被申候、其時ニ三休語ヲ引被申候、○君臣互恥愧所也ト引事を申、扱もく可有御事、殿様

ハ勘十郎心懸はからせられ、又勘十郎殿ハ善僧ヲ取なし候躰ニて御にかし候御事、尤くと被申候事、

一、大閣様今加藤左馬助江御感状ノ写、偏大納言様御取成ゆへと持参被成、忝かり御座候事、

一、其方事先年於「柴合戦」之刻、一番槍仕候付而、為御褒美御知行一廉御加増被遣候、其心得於朝鮮数度番舟ヲ切取、無比類働手柄之段不可勝斗候、殊今度順天・対山両城可引入之由、各連判仕候へ共、不致加判神妙之覚悟、御感不斜候、依之手前御代官所有次第、三万七千石為御加増被下候、本知六万式千石、都合拾万石之内、壹万石ハ無役、九万石者軍役可仕候、国持ニ臆病者在之間、被成御一類所猶以国主ニ可被仰付候、如此被仰出上者、命ヲ全仕可致忠節候、自然乘調儀聊尔之働等仕、越度無是様ニ令覚悟候、猶徳善院・浅野弾正・増田右衛門尉・長束大蔵可申候也、

五月三日
加藤左馬助殿
御朱印

猶以帰朝申候ハ、直此方へ先可罷上候、被成御対面御直ニ被仰聞、頓而国可遣候、

右之コトク加藤左馬助殿へ御感状之事、

一、殿様へ九月三日ニ大符・金森法印・有楽・戸田武州・猪子内匠殿なと御出、昔御物語共色々候而、侍ハ悪口ヲ申事をたしなミ可申事ニ候、信長公未尾州一國御手ニ入候刻、佐々兵へと今村八太夫、百五十貫つ、取、相詰人心ニ候故、少出入候て、与兵へ所へ八大夫参、互ニ理くつヲ申候処ニ、与兵ハ少理くつニつまり申候、扱互腹ヲ立、八大夫婦申候刻、ぬれえんへ八大夫出申候へハ、さうり取木りをさし出申候、心せきはき申候ゆへ、木りノおかきか、り候を、さうり取なをし申候内ニ、はや八大夫ハ帰候と存、与兵へ内ノ者をしかり、機嫌あしくして、あのやう成うろたへものくる時ハ、以来もるすと申候へと

〔史料紹介〕

国祖遺言（下）

大西泰正

〔凡例〕

・小稿は前田利家（一五三七〜九九）の言行等を筆録した編纂史料「国祖遺言」の翻刻である（全一三七項目）。小稿ではその後半部分を取り扱う。前半部分は『研究紀要 金沢城研究』二〇（石川県金沢城調査研究所、二〇一二年）所収「史料紹介」大西泰正「国祖遺言（上）」を参照されたい。

・当該史料の原本の所在は確認されていない。底本には、金沢市立玉川図書館加越能文庫所蔵の写本「国祖遺言」（請求番号：5525）を用いた。翻刻における体例は、右「国祖遺言（上）」の「凡例」に述べた通りである。

大納言様分村井豊後守ニ御感状ノ写

一、今度蓮間表其方望申付而、敵地へ押入候義、無心元存候へ共、此度を我等運命次第と存、無是非申付候処、無異義彼地を令放火、敵数勢ニ而慕付候へ共、其方自身鎗ヲ突、不初令手柄之段、不可勝斗候、雖為少分為加増、加州石川・河北、能州之内以四千俵令扶助、全可知行所如件、

天正十三年

二月廿八日

利家御判

村井又兵衛殿

利長様分村井豊後守御感状之写

一、今度蓮之間表焼はらい可申候旨、貴所望ニ付而、利家被仰付、其方ハ別而秘藏之者之義と云、きふね之城きわと云、其上夜中之義候へハ、引儀無心元思召候へ共、目加多又右衛門・丹羽源十郎□□ヲ聞おちニ明退候を、無念被思召、此度越中へ中入して放火仕義、尤と被思

召候処ニ、彼地ヲ不残焼はらい、敵あまたしたひ付候得共、其方自身鎗を突、味方あしをもミたさず、遠路之所しつくと被引取候段、誠ニ手柄共今に不初義不可勝斗候、利家御満足大方ならず候、次ニ其方寄騎吉川平太・江見藤十郎など、そはにて手柄仕候由、其方口次第ニ御はうミ可有由、利家御意候、猶面ヲ以可申候、謹言、

天正十三年

孫四郎

二月廿九日

利勝御判

村井又兵衛尉殿

一、殿様御咄、御家ニ居申候魚住隼人ハ、備後守殿御代ニ城攻ノ甲ハきず、金ノあミかさヲ着候て手柄、よき首ヲ取参候、首帳付申候仁、名をなのり候へと申候へハ、金ノあミかさと御付候へと隼人申候、其時弥手柄ニ成候由御意、末森後巻ノ時、魚住など本丸ニ留守ニ置申候由、慥おほしめし候由御意ニ候、知行無役千石被下居申候事、

一、殿様御膳、朝夕ニすへ上候、村井勘十郎一人二十六ノ春分被仰付候、路地其外へ御出ノ時、御腰物奥野金左衛門・野村与平次・村井勘十郎三人、替りくもち申所ニ、有時御書院ノ下にて、御小人かしら新八を御せんかん候て、御ちきニ御やまし候時、野村与平次御腰物もち候て居、うつかとゑん之上ニ居申候、後新八大わきさしにて有之候間、勘十郎氣ヲ付、新八そハへ引付居申候、金左衛門ハめを付居申候へハ、殊外御機嫌よく、けふハ万事隙なくめしつかい候へ共、おれか用ハ勘十郎一人仕もち申候へ、扱勘十郎隙入申候時者、金左衛門もち候へ、刀ヲもつ者ハ主人機嫌をも見候て、其心もち有ものにて候、つねくいつれも申聞候ニ、よのやつはらさたのかきりと御意、色々御よまい事にて、其かいよく野村与平次は外様小性ニ被仰付候、其時ノ御ことは末も色々勘十郎ためニハ忝義、御咄衆、豊後ニきかせ被申候へハ、弥よく御奉公申上候へ、御奉公申時者、豊後子ト必存申な、新座ものと存御奉公仕候様ニと申聞候事、

執筆者紹介

梶 木 英 道	前石川県金沢城調査研究所副所長
池 田 仁 子	金沢市文化政策調査員 元金沢城編年史料編纂協力員
袖 吉 正 樹	金沢市立玉川図書館司書
大 西 泰 正	石川県金沢城調査研究所所員
木 越 隆 三	前石川県金沢城調査研究所所長
千 田 嘉 博	奈良大学教授
北 野 博 司	東北芸術工科大学教授

研究紀要 金沢城研究 第21号

令和5年3月 発行

編集・発行 石川県金沢城調査研究所

〒920-0918
石川県金沢市尾山町10-5

電話 076-223-9696 FAX 076-223-9697
E-mail kncastle@pref.ishikawa.lg.jp
<http://www.pref.ishikawa.lg.jp/kyoiku/bunkazai/kanazawazyo/index.html>

研究紀要『金沢城研究』第21号 正誤表

頁		誤	正
11	表No.24	金沢城二之御丸御殿明細図	金沢城二之丸御殿明細図
	表No.50	滝之御間・波之御間ヨリ御居間廻り御広式廻り迄	滝之間・波之間より御居間廻り・広式廻りまで
	表No.52	二之丸御殿御補修絵図	二ノ丸御殿御補修絵図
	表No.69	金沢城二之丸御次内嘉永年中修補図	金沢城二ノ丸御次内嘉永年中修補図
40	右段絵図	金沢城図	金沢城図（奥村家鎧袋内・箱入）

※P.11の正誤については、元にした『金沢城史料叢書29「金沢城二ノ丸御殿絵図集」絵図に見る金沢城二ノ丸御殿』（石川県金沢城調査研究所、2017）における絵図名称が、その後所蔵元で変更されたことに起因する。

石川県金沢城調査研究所